

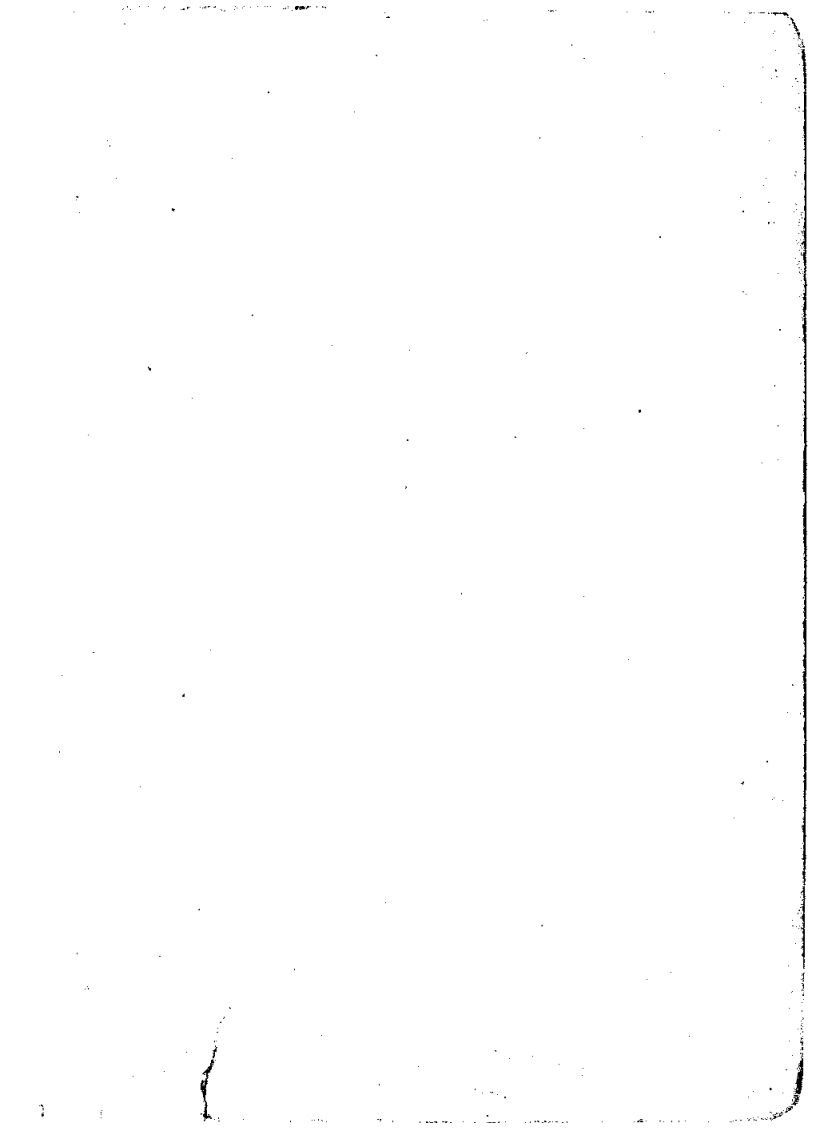
岩波文庫

2785-2786

浮世繪類考

仲田勝之助編校

岩波書店



岩波文庫

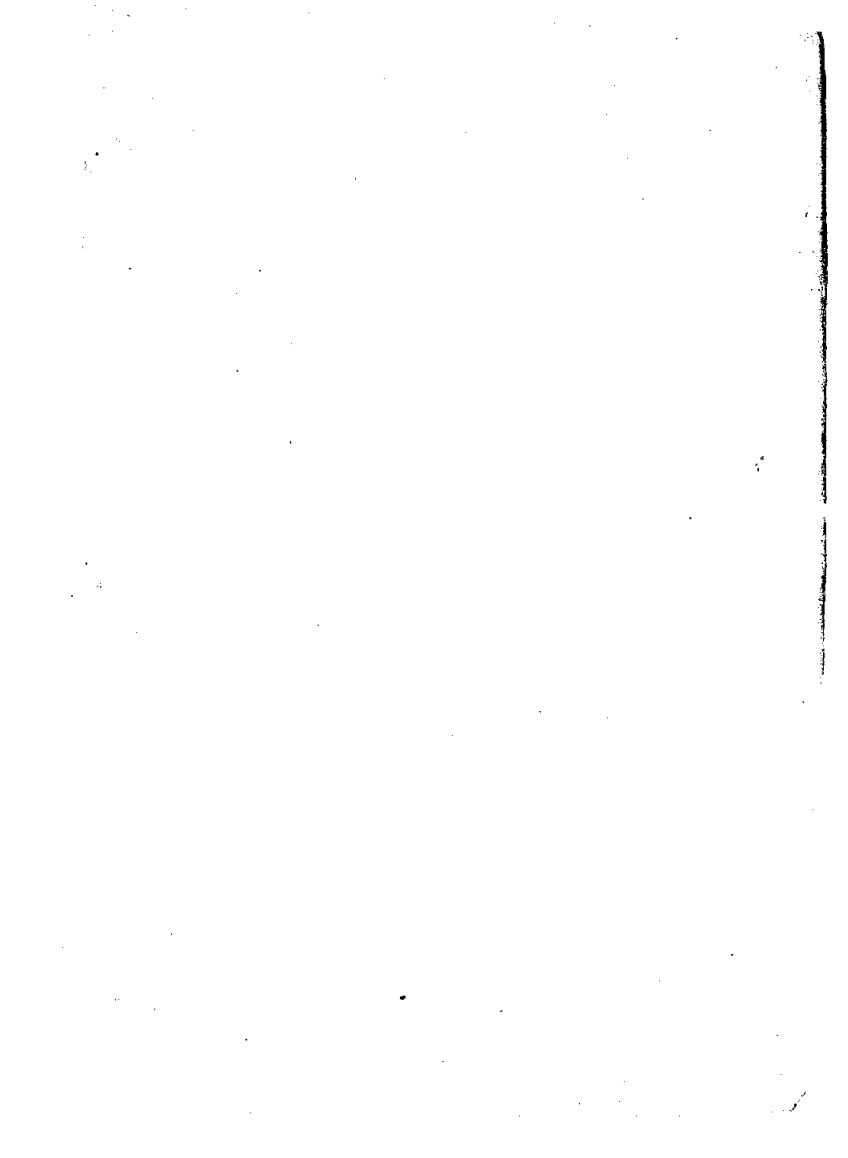
2785—2786

浮世繪類考

仲田勝之助編校



岩波書店



## はしがき

「浮世繪類考」は浮世繪研究上唯一の典據とせらるゝものであつて、何人も浮世繪研究の手がかりを得んとするに當つては、必ず參考せざるべからざる文獻である。然るに從來、主に寫本を以て行はれ、この完本は印刷に附せられず、一部のみは傳へらるゝも全班にわたりしものは未だ嘗てなかつた。依て類考によりたりといふも、何本によれるか一々明示せざる限りは明かならず、各人區々の本によつて引用し來りたるを以て類考によるとはいひ條、古き類考によりしものか、新しきものによりしか判明せず、大に混雜を來し來つたので夙にその底本を作る必要が叫ばれ、現にこれが作成に着手せる人なきに非ざりしも未だ一もあらはれず今日に至りし次第である。本書はその缺を補はんとし、まづ翻刻本にのみつきて編纂したるが、それにては猶不十分なるを感じ居りし際、T氏の非常なる厚意により寫本中最良の佳本を見るを得て之を改訂し、更に類考研究家鈴木南陵氏の藏書を借覽するの機會を惠まれてこゝに一部の編成を終りしものが即ち本書なのである。

元來、浮世繪類考は笹屋新七邦教の編せる所と考へられ、久しく左様に思はれて來たが、近

4  
來の研究では、類考は寛政二年頃大田蜀山人之を撰し、邦教は寛政十二年に附録始系を作つた。これその原撰にして、享和二年山東京傳追考を附し、文政元年より四年頃までに式亭三馬補記を加へ、次第に増補せられたるを、天保四年無名翁、即ち溪齋英泉以上の三書を集めて一部となし、更にその考を加へて無名翁隨筆と稱し面目を一新した。其後弘化元年齋藤月岑これに補記を加へて増補浮世繪類考と改題す。なほ龍田舍秋錦なるもの右の數部を改撰し、慶應四年新増補浮世繪類考と題して一部に行はれた。

以上の如くにして成りたる類考の中明治以後刊行せられたるは

- (一) 校訂浮世繪類考(孚水ぶんこ) 昭和七年版
- (二) 無名翁隨筆(燕石十種卷二の内) 明治四十年版
- 同上(日本畫談大觀の内) 大正六年版
- 同上(隨筆文學選集第一の内) 昭和二年版
- 同上(日本畫論大觀中卷の内) 昭和四年版
- (三) 増補浮世繪類考(溫知叢書第四編の内) 明治二十四年版
- (四) 新増浮世繪類考 單行 明治廿三年版

同上（日本隨筆大成第二期卷六）

四種にして内、増補浮世繪類考は無名翁隨筆の改訂本なるを以てこの二つを同種のものとするれば三種あるのみとなる。

右の内、校訂浮世繪類考は最善本とせらるゝ曳尾庵本のうつしによつたものであるが收容せる人員は三十七人に止り、増補浮世繪類考は約二倍の八十六人になつてゐるけれど新增補は約四倍の百二十七人に達してゐる。同じ類考といへども初期より末期までは非常な人數の相違で、廣重の如きは新增に至りて初めて出づる畫家であつて、他のいづれにも載つてゐない状態であるから、これら全部を網羅せざれば完全なる類考といふを得ない。これら全部を合せて始めて徳川期全體の浮世繪の研究に資すべき次第で、如何によればとてこの一部では十分の用をなすといはれないのである。よつて本書はその全部を、進化し増補した順に次第し、如何に原撰に尾鰭がついたかを一目瞭然たらしむるにつとめた。これを一の特徴とする。

次に刊本以外の寫本に至つては殆んど無數で差異が際限なく撰擇に苦しむ次第であるが、ここに特記すべきは從來未だ知られざりし最も原撰に近いと信ぜられる佳本をW氏より提供されたので、それを底本とした事である。それは享和三年頃成つたもので、文化十二年の曳尾庵本

より十五年も古く、且類考と始末とを一つに系統づけたものであり、文章も古體を存するのでこれを採用した。尙足らざる處、苟も參考となるべきは西山堂本、只誠本、及び鈴木南陵氏の故法室本等を校勘して取り参考に資する事とした。

で類考原撰に近き底本は之を五號活字にて組み、「増補浮世繪類考」に於て初めて補はれた分は【増】の字で示し、京傳の「追考」は【追】、「新增補浮世繪類考」は【新】、「故法室本」には【故】の略號を以て區別し、各最初の段落の冒頭に示した。従つて或る略號は次に別の略號が出てくるところまで續くわけである。なほ、増補加筆の次第はT氏本、【追】【増】【新】の順に築き上げられたものであることを念頭に置いて讀んで頂きたいと思ふ。なほ必要と認めたる部分につきては聊か脚註を施した。

終に末筆ながら底本を提供せられたるT氏、及び藏書の拜覽を許されたる鈴木南陵氏に深甚なる謝意を表す。若しそれらなかりしならば或はこの書は生れなかつたであらう。

昭和十五年十一月

編者識



## 目次

大和繪師浮世繪之考	一五	杉村治信	四七
吾妻錦繪之考	三	菱川師平	四七
岩佐又兵衛	三五	東坡軒	四八
鎌屋立圃	三八	長谷川長春	四八
菱川吉兵衛師宣	三九	吉田半兵衛	四九
探幽齋正信	四〇	當世繪又兵衛	五〇
川島鉞清	四〇	當世繪半兵衛	五〇
菱川師房	四一	大津又平	五〇
菱川師永	四二	蒔繪師源三郎	五三
菱川政信	四二	大森善清	五四
菱川友房	四六	鳥居庄兵衛海信	五四
古山師重	四六	英 一蝶	五八
杉村正高	四六	宮川長春	六六
石川流宣	四七	西川祐信	六七

西川祐尹	七二	鳥居清之	七八
野々村治兵衛	七三	鳥居清政	七八
中路定年	七三	古山師政	七八
繪菱忠七	七三	近藤助五郎清春	七九
橋 守國	七三	近藤清信	七九
懷月堂	七五	奥村文角政信	八〇
鳥居清倍	七六	奥村利信	八一
鳥居清經	七六	奥村文志政房	八一
鳥居清忠	七六	泰川重利	八二
鳥居清重	七七	藤田秀素	八二
鳥居清勝	七七	井村勝吉	八二
鳥居清次	七七	吉川盛信	八三
鳥居清久	七七	西村重長	八三
鳥居清定	七七	橋 保國	八三
鳥居清廣	七七	二代目橋守國	八四
鳥居清房	七六	阿りう	八四
鳥居清時	七六	川枝豊信	八五

羽川珍重冲信	八五	月岡雪鼎	九四
羽川藤水	八六	勝川春章	九五
富川房信	八六	小松屋百龜	九七
春川秀蝶	八七	鈴木春信	九七
下河邊拾水	八七	吉川定好	九七
酢屋國雄	八八	湖龍齋	一〇〇
鳥居清滿	八九	一筆齋文調	一〇〇
田村貞信	八九	菊川秀信	一〇一
勝川輝重	八九	柳文朝	一〇一
石川豊信秀葩	九〇	珠雀齋	一〇一
石川豊雅	九一	鳥居清長	一〇一
春川師宣	九一	北川豊章	一〇四
長谷川光信	九二	中村慶子	一〇四
寺井重房	九二	門牛齋秋童	一〇四
鳥山石燕	九三	谷久和	一〇五
橘岷江	九三	菱川友幸	一〇五
山本藝信	九四	笑丸	一〇五

奥秀	105	北尾政美	125
歌川豊春	105	窪 俊滿	125
法橋關月	108	榮松齋長喜	127
蔀 關牛	108	勝川春好	127
竹原春朝齋	107	蘭德齋春童	128
竹原春泉齋	109	田中益信	128
赤松亭秀成	110	古川三蝶	128
勝川春河	110	金 長	128
細田榮之	110	堤 等珠	129
北尾重政	111	法橋中和	130
戀川春町	114	司馬江漢	131
喜多川歌麿	115	岡田玉山	131
東洲齋寫樂	118	丹羽桃溪	132
勝川春英	119	勝川春亭	133
歌麿妓堂艶鏡	123	歌川豊廣	134
紀 吉信	123	古川鬼玉	136
北尾政演	123	歌川豊國	136

歌川豐秀	一四〇	松好齋半兵衛	一五四
佐久間草偃	一四〇	速見春曉齋	一五四
石田友汀	一四一	流光齋如圭	一五五
奥村文鳴	一四一	二代目春曉齋	一五六
葛飾北齋	一四二	北川菊齋	一五六
二代目歌川豐國	一四九	蹄齋北馬	一五七
歌川豐清	一四九	戴斗	一五八
辰齋	一五〇	泉 守一	一五九
北齋	一五〇	泉山松月	一六〇
昇亭北壽	一五〇	北雲	一六〇
北岱	一五一	魚屋北溪	一六一
鳥居清峯	一五一	春川榮山	一六二
大原東野	一五二	春川五七	一六二
淺山蘆洲	一五三	喜多川式磨	一六三
一峯齋馬圓	一五三	菊川英山	一六三
青陽齋蘆國	一五三	勝川春扇	一六五
合川珉和	一五三	歌川國貞	一六六

二代目喜多川歌麿	一七〇	松川半山	一八〇
柳川重信	一七〇	探月齋	一八〇
歌川豊久	一七三	谷本月曆	一八〇
北尾美丸	一七三	北明	一八一
歌川國長	一七三	浪齋重春	一八一
歌川國丸	一七三	北堂巖山	一八二
歌川國滿	一七四	曉 鐘成	一八二
歌川國安	一七四	一陽齋正信	一八二
歌川國直	一七五	春曉齋政信	一八二
歌川國政	一七六	桂向亭長丸	一八三
歌川國次	一七七	東 春嶺	一八三
歌川國信	一七七	福知白瑛	一八三
歌川國宗	一七六	森川保之	一八三
二代目柳文朝	一七六	三木探齋	一八四
中井藍江	一七六	葛飾爲齋	一八四
二代目石田玉山	一七九	六花亭富雪	一八四
石田玉峯	一七九	重山	一八五

岳亭春信	一八五	歌川芳虎	二〇三
菱川清春	一八六	國員	二〇五
月川輝重	一八六	五葉亭廣信	二〇五
溪齋英泉	一八六	南粹芳雪	二〇五
一立齋廣重	一九二	芳瀧	二〇六
歌川國芳	一九四	梅之本齋齋	二〇六
長谷川雪且	一九六	歌川芳梅	二〇六
長谷川雪堤	二〇〇	歌川國輝	二〇六
喜多武清	二〇〇	歌川芳員	二〇六
大石眞虎	二〇一	歌川芳勝	二〇六
雪麿	二〇二	昇齋一景	二〇六
二代目北齋	二〇三	喜多川北麿	二〇六
春齋英笑	二〇三	興齋月亭	二〇六
歌川貞秀	二〇三	補遺	
四代目歌川豐國	二〇四	宮川春水	二〇六
歌川貞房	二〇四	勝川春水	二〇六
歌川芳盛	二〇四	勝齋水	二〇六

(鶴岡藍水)

三〇八

## 附 録

古今大和繪浮世繪の始系……………三〇九



## 『書』大和繪師浮世繪之考

浮世繪と稱する事は日本繪より云出たるなればいと古くよりの唱なるべし。百濟の河（異本河作川）成、宇多の朝に仕へし巨勢金岡、後堀川院の貞永天福の頃左京權太夫藤原の信實と聞へしは本朝に比類なき倭繪の妙達名を得し人也。信實の末裔に土佐刑部大輔藤原の光信は繪所倭畫を中興す、是倭繪一派の祖（土佐氏は經隆祖）と言へり、明應年中の人也。古法眼永仙元信も光信が門に入て日本繪を學び畫法を受、狩野土佐各姓氏相分れども皆悉く日本繪なり。畫家の傳記は諸書に委數出たれば云は事舊にたれども亦云はざれば其意解がたきこといとく多かり、畫道を學ぶ初心の爲めに爰に略抄す。往古は姑く云ず、後小松院の御時應永年中明國より如雪といふ僧來朝して相國寺に住す、蘭芳軒と言ふ、漢畫の妙手なり、名を當世に播す（又如拙は九州の人なり）其頃豆州の産にて東山殿に仕へし狩野四郎次郎伯信と云者畫を善す、後大炊之助藤原正信と改む、箴法眼、狩野祐勢正信と云（友清祐清とも書けり、其元は遠州刺史永享中の人也、狩野祖）如雪を師として畫法を學ぶ、亦薩州の人に春育周文といふ人漢畫の妙手にて畫法を如雪に授（受カ）て相國寺に住す（越仙又越溪とも云出藍の稱あり、明國より秀文といふ人來朝して畫を善す、

飛驒國に住して曾我氏をつぐ唐人秀文といふ後蛇足に畫法を傳ふ、周文と混同すべからず）祐勢正信この人に畫法を學ぶ、僧雪舟（雲谷軒等楊と云ふ備中の入丹青の妙世にしろ處なり）小栗宗丹俱に周文を師とす（小栗宗丹は周文の高弟なり一に宗罩に作る、室町家に仕へ後に相國寺に入て僧となり自牧と稱す）正信は宗丹にも教を受けたり、祐勢は如斯名人に隨て畫法を學得て後に狩野一家の畫法を立たり。然れども漢畫を改ず、故に雪舟正信宗丹は各學ぶ所一つなれば筆勢皆相似たり、然れども其後明應文龜に至て祐勢の長子狩野四郎次郎藤原元信、父正信が畫本法意を嗣ぐ。其名（真本名作后）異朝にまで震ふ、明の郭澤は元信が筆法を見て師とせん事を望しとぞ、越前守に任ず、玉川と號す、法眼永仙後世古法眼と稱す（足利家に仕へて永祿年中歿す）、元信畫道に熱心にして大日本繪を學ん事を欲して、土佐光信の女は倭畫に妙手なりければ元信是を妻に娶て猶畫法筆格を學びけり、茲において自ら日本畫の風意を學ぶ人多く、元信も半ば漢畫を廢すと云とも、日本に産れて何ぞ異國の畫法風骨を事とすべき、倭畫の筆格を建つるにはしかずと、いよく狩野流一家をなさんとす。しかれども此ころは諸國亂れて戰鬪しばしく止時なく、世の中安穩ならざりければ、治世を待て世に出んと大和和泉或は紀州に身をひそめ難を避て、終に畫家一流をなし、商船に畫を附してかたじけなくも明帝の詔書を給り子孫

に傳ふ一世の苦心を思ふべし。雪舟は諸國に遁れて治世を待り、後明に渡り張有聲を師として草筆の書法を學び、歸朝して日本に草畫の筆を傳へたり、或説に雪舟は眞畫を改て草筆の唐畫を以て一家をなす故に淡畫といふ。古法眼藤原の元信は本朝一派の畫法を立てしより本繪と呼びならせしにより狩野流の惣名となりし、されども筆意凡ならざれば本畫といふ不<sub>レ</sub>如を末畫といふと記せしは、附會の説にていと受難し、疑ふらくは誤りならん。按ずるに本畫の唱へ狩野一家に限るべからず、和漢ともに本畫末畫唱へあり、事本末有況や畫法に於てをや、筆法規則得たるを以て是を本畫といふ是に反する者を末畫と稱す。「無墨點」則是なり。墨書なくして五彩をほどこし分ち畫く蘭畫の細畫の類なり、(阿蘭陀畫也硝子に眞を寫しまたは銅板にて眞を寫す)、唐米南宮末繪を以て市街の壁に貼して賣る、是本畫末畫と分つの謂ならずや、街畫と云も是より起れり。亦雪舟草筆を傳へしより唐畫と呼と云も受難かり、雪舟の畫風は唐より出ざる筆法なり、雪舟の風意は唐畫とは異なり、漢畫は雪舟のみならず往々皆漢畫の寫眞を畫しならずや、又草筆を淡畫といふにはあらず。前にも云る如く多くは異邦の畫人より傳へしなれば筆法畫則は唐畫に起りて日本繪に畫法を別に建ず、草筆は探幽齋に至りて大に開け狩野流一家の骨法墨色の濃淡を顯せり。(探幽は右近將監孝信の長子なり、小名宰相四郎次郎采女と云、

宮内卿法印藤原守信、寛文二年敍法眼海内第一の名人と稱し、多く繪本を残して後世の準的とす、狩野流の豪傑丹青の妙世に知るが如し、畫道に志といへども多くは是を辨へず、且大和繪と稱する者は浮世繪師の事と思ひて其差別を知らぬも有り、續日本紀に靈龜元年乙巳從六位下江見押勝姓を更爲倭畫師と有り、俗間の畫師猥に書べからず倭畫師は姓也（井澤長秀俗說辨に出）、そは兎まれ唐の繪容ならず倭國の宮殿樓閣山水人物に至るまで寫しなすは日本繪なり、是を倭畫といはずや、日本の景容を畫くを以て稱するなれば、字義通稱に不拘訓音を以て日本繪を倭畫とし、又大和繪と俗に目なれて書改しは大和國に住せし畫工の斯く書始しも有と云とも、倭國の風意を寫せしをばやまと畫と一概に唱へ來れるものならずや、偏頗の稱と思ふべからず、土佐流の祖と稱するは巨勢金岡より起り、曾孫公忠、弟公茂の孫深江、其子弘高、常則、爲成、成光、良親、越中守隆信、左京大夫信實、伊豫守隆親（其餘數ふるにいとまあらず）、從五位下土佐守藤原經隆是土佐氏畫祖と云。經隆の長子越前守行光、光重（彈正忠）、廣周（刑部大輔）、光信（左近將監土佐守）、光茂（刑部大輔）、光持（將監）、光高と代々禁裡繪所預として、今猶數代連綿として相續、（刑部大夫光持は慶長年中の人なり女子あり、古右京繪所將監狩野光信妻とす、慶長中秀吉公に仕ふ。近代に至りては故有りて委數記する事を憚り、將軍家にも住

吉貞慶を京都より召れて土佐流の繪所となし給ひ、如慶廣通より數代住吉内記と稱す、住吉家より板谷家と稱して分家す粟田口も類族なり、仁和寛平の往古より天保の今に至る迄九百四十餘年來土佐流とす、古土佐に僞れる畫多く、東都にては京傳と云、下り繪と云、極彩色の細密なるものなり。今京傳といふは四條繪と云ものにて應舉、南岳、文鳳などの畫の類にて土佐流にあらず、漢畫に近く土佐に異り。狩野流及諸家種々に分れて、いづれか日本繪ならぬはなし。皆丹青の達人海内迄雷鳴すとは言はでもの事なるべし。就中土佐流の歌撰、源氏等の繪巻物、歌の心、昔物語、四季雜體の繪卷物、雲上の束帯、官女の五衣着て藤がわしき、英雄の軍譚、賤の農夫が耕し草刈るさま、樵夫のいとなみ、漁夫のすなどり、或は市中の貴賤老若物見遊山の往交さま、市女笠きて衣引まとるし容、今見ては質朴の古風と思はるれど其畫る頃は時世の今様なるべし。されば今の世に浮世繪師が流行の光景を寫せども二十年來經たるを見れば其風俗に違あり。爰を以て思ふべし、星霜はるか推移れば昔繪なりとて其時の時世振にはくらべがたけん、されば昔は浮世繪も日本繪にて各畫けり、或書に爲成が倭漢の抄の屏風に漢畫とやまと畫の浮世の人物を畫きたりけりと有となん。土佐狩野流の銘々も先に云へる源氏等の畫容を大和人物と唱へ貴賤質朴の姿を雜人形、或は浮世人物と唱ふ。されば各得手たるを以て漢畫師

倭畫師と倭漢を分ち、(又其中に山水畫師、花鳥畫師、武者畫師、源氏畫師、浮世畫師などゝ得手たる人を他より稱するの唱なり、唐畫にも梅畫、蘭畫、竹畫、山水書き、人物かき、花鳥畫有り、各得手たるを云、浮世畫はやまとゑに有)畫法筆意備れるは皆俗に言本繪師なり。譬畫家の末裔の人なりとも規則骨法備らざれば末輩素人畫と言ふべき也。從來畫は眞を寫すを本意とす、然りといへども筆法畫格倭漢ともに建しより是を亂さず、墨の濃淡を以て畫の位を定む、是等を辨へ寫す時は畫ならずといふ事なし。やゝともすれば古人の粉本に寄らずして畫けるを以て誹謗族きやうくもあれど笑ふに絶たり。己が畫才に拙くして圖を巧み筆法を立つるの智なくして古人の繪本を寫し溜、夫を準的に畫かざれば扇一本書事あたはぬ愚者偏痴と云ふものなり。武家に繪師を置くも軍用地理を寫すの爲なり、すでに張良が蜀の棧道を燒しも蕭何が地理の圖を奪ひ得て漢中へ入ぬけ道の陳蒼道を知ればなり。夏の禹王が洪水を治め徑陸の水衝を丹青を以て分ちしも地理の圖による物ならずや、地理風景人類皆眞を寫なり、(根本により人の寫しを亦寫して間違あらば何のえきかあらん)。繪道を學ぶ者を畫巧と云、圖工と稱す、人物禽獸蟲魚草木を畫圖に假寫すが故に畫巧と云へる所謂なり。或畫家の曰、古より似て似ざるを本繪の法なりと云へりと、片はら痛く笑ふに絶たり。畫法に曰く眞に遠く畫に近かれと云は筆法を失はずし

て眞を寫すを云に是を思ひ誤りたるもの也。畫法に托して斯云んより畫ぬといふが遙に勝也、似て其非なるは大畫なるべし。宛も萬物隨て似ざれば其物にあらず、漢畫に寫眞の法有り、其性を見て生を寫すぞ專要也、見る事の不能ものは古人の畫によりて畫くべきのみ、その性をしらざればいかで妙を極むべき、和漢古人も是を云り、虎を畫てならざれば犬に類すと馬掬もいはずや。嶽の屈曲、波の瀾文、雲の凝り、水の流溜（岩木の皴松の茂枝は畫法に書得難しと云へり）、是等は視者惑ず波とし岩とす事を以て其狀ちを寫すのみ、されども筆法規則にそむくは畫道の詮なきものなるべし、能觀察して會得すべき事ならずや。且粉本によりて畫るを非とのみ云にはあらざるべし、人物古實の類によりては新に其圖を巧なし其意を失ふ事多し。是等は粉本を乏しからず貯置をもて其道の達者といふ。往々開院に大内を選されて後、寄馬の障子并李將軍、養由基が障子など沙汰なかりけるを、四條院の御時、西園寺相國禪門修理せられける時、頭の中將資季朝臣申起して立られたりし、此障子の繪本ども鴨居殿の御庫にぞ侍なる、建長造内裏の時、繪所の預前加賀守有房繪本を持ちりければ取出してかゝせられけりとあれば是等をも思ふべし。規矩ある事は如斯一偏の論と思ふべからず、或畫家又曰、古人の筆法備りし圖によらずして新に眞を寫し圖を巧み畫くことなかれ畫法に反すと。是又何の謂ぞや、琴柱に膠す

るがごとく畫道を辨へざるの時論嬰兒のごとし。凡畫は仙術に比し目前に人の欲する所を現す風流に至ては、そのおのれを樂み人をたのしましむ、如歌如詩。古人も詩中の畫畫中の詩とす、詩は有聲の畫、畫は無聲の詩、心の欲する所に隨て狀ちをなすは畫也、古人の粉本を寫すのみならば奚ぞ畫の假寫の徳あらんや。源氏物語に紫の上が源氏の君の須磨の留守三年の間つれづれなる遊びに畫をかき給ふ、今日はけふのありさま裝束御遊びがたきにたれたれ御かたはらにありて日のうちはかゝる遊びあり、夜に入ればからうじて休給ふかたはらにたれたれそひふしたるありさま繪に書き言葉書などくはへ給ふとあれば、譬畫の正不正はとにかく畫日記にて夫に奥州を知らし給ひ、亦鳥羽僧正が供米の糠俵なりしを興畫にえがきて供米の不法を訴へ、或は法眼賢慶が弟子法師は師の後家の不行跡を訴へしも畫を以ての功なり、和漢かゝる例枚擧すべからず、貞永天福の頃後堀河院の御時似せ繪を御好ありける、北面の下臈御隨身などの影を左京權太夫藤原信實朝臣を召てかゝせられけるとあり、花山法皇の書寫上人を似貌にかゝせ給ひしも、百濟の河成が童子の面を寫して其人を得、高宗が夢中の人を畫て傳説を得たる、漢の武帝が李夫人の畫姿を樂しみ將門の首を寫して實檢に備しも眞を寫すの妙によれり。美女の姿畫にあこがれ傾城の畫に私語云し和漢其類枚擧し難し、王昭君が賂の潤筆錢の吝嗇により身に



禍をかもせしも眞を寫すの事より起り、唐も倭も其頃は別に浮世繪師有て美女の容色を寫せし  
 ならず皆名人の畫師なるべし。佛畫、畫像、美女遊女、其時世の浮世容畫に至るまで委しく畫  
 師の預るところなり。其節古人の粉本をたづね古風質素を寫さねば畫に位なし、下卑るなんと  
 云ならば何の功あり益あらんや。近頃俳優の面を似せ畫き女兒の弄ものとなせしより一端の興  
 畫大和畫師の永く汚名の基となる歎しきかな。今俳優の似畫戲場の繁昌に隨て流行し浮世繪師  
 の名是より汚れ愚俗の爲に廢せられしは彼黨の罪ならずや、亦悔るとも六日の菖蒲十日の菊に  
 て朽をしけれ。浮世繪師を稱するは昔土佐氏の高弟に岩佐又兵衛と云し者、故有て土佐流を破  
 門せられ流寓して市中に住めり、從來倭畫の妙手なれば雜人物の浮世姿を畫き是を鬻で給食に  
 易て僅に業のたづきとす、彼雪舟が兵亂を避て筑前の蘆屋の里に隠れ住み釜の畫を畫きて居り  
 しも、此又兵衛も相似たり。されば大津追分繪は又兵衛より書始しと世に云傳へたれども畫體  
 の風意は異なるものなり。浮世人物を畫くの妙手なれば浮世繪又兵衛と渾名せしより後世に浮世  
 繪師の稱を残せり（又兵衛が傳は別に藏せり追考）俗に是を浮世繪の濫觴と云ふは音曲演戲の  
 浮説に起れり。前にも云ふ如く浮世繪とて別に畫法あるにあらず、畫法（漢カ）委く唐畫に起り規則筆  
 格數種の點法を建てしを、山水草木の畫法は古今さまざまの説もつとも多し。本朝に傳へしよ

り畫道ひらけて妙手多く一派の筆意畫體を分ち其家々に規則有り、好む所の畫風を師として是を學ぶもの師の法則に従て不改、累代是を畫く者は其畫裔なるも己家々に畫の技あれども反し守らず、諸流混同して心の欲するに従て自ら筆意畫體をなして自立すとも畫法正しければ一家をなすべし、諸家の分流みなしかり、浮世繪師のみ別に在らず。倭繪の總名大和繪なれば浮世繪を大和畫師と云は勿論のことなり。畫法を守る筆に自在をなす浮世繪師は大和畫のきほなり、他の不及ものなり、萬治寛文の頃波沙羅畫と呼ぶものありし、或書に曰扇團扇のばさら畫にも是を稱して出ぬはなかりしとあるは、其頃は流行の事を畫き板行にして墨ばかりにて摺り、跡にて彩色計り鹿相にしたるなるべし、元和寛永の頃ばざらと言ふはあぶれもの黨を結び男達をまなび、きほひ組と云て市中ゆさんのさまたげをするものを云放言也、波沙羅繪は末畫なり、街畫と云て（筆意にも畫法にもかゝわらず達者にはか行がするやうに扇うちわの仕入物面白く圖を巧み、競ひて畫きてなりはひとするをばさら畫に比してなづけしなり、當時は一廉の畫工是等を畫くこととなりぬ）渡世の爲に畫法を不學、繪馬、祭禮の燈籠繪、見世物芝居の看板、幟繪、繪提灯の類、子供の持遊ものなど繪賣の類なり、畫法を辨へず規則に反して蒔繪、絳箔の下畫の如く畫き、或は草双紙、俳優の似面の板行畫を浮世繪師に列してかく者あり、是古の

波沙羅畫也、今俗混同して皆浮世とのみ唱へ來りし故に、ばさらゑの名は言ものなく、誤りて斯云にや。板刻の繪は浮世繪師のみに限らず、世に残し後世に傳へんには板刻の外他なし。初學の者畫道に入の助は尤益あり、漢畫にも諸家の畫譜數百部あり、笠翁の畫傳などを始本朝の唐畫師が筆跡も數本あり、倭畫に狩野流の諸名家、法眼春卜と橋守國殊に數百部を發兌す。雪舟家に櫻井周山の畫則等、雪舟が著、秋、畫録其他諸家の畫譜枚擧するに不遑、皆是虛名を貪るにあらず委しく畫法規則を傳へる爲なり。今浮世繪を畫く者小説の繡像讀本或は遊女町の傾城、或は流行美人繪を梓に彫刻精巧を盡し錦繪と號し、板刻の繡繪は江戸を以て第一とし名産に嚮事となりしは、太平の恩澤溢れ餘慶を蒙るの幸ならん。爰を以考見れば畫所の各異るとまた樂しみに畫くと渡世に畫くとの差別により思ひ誤り、別に浮世繪師と俗に呼來るもの也。因に曰、世に畫難房とて、畫けるを見て是を難し嘲る者あり、いと古より云事にや、後白河院の御時繪難房と云者ありて、いかに能書たる畫にても必難を見出すもの也と古き書にも見得たり、然れども物の錯誤は時々の器財宮服古實也、能く博識に問ふべきものなり、知らざるを問は法なり、知て問ふは禮なり、過て繪きたるはあらため難し、俗畫法を辨へず手足の長短畫者の意を思ひ誤り、一遍の見體にて嘲る黨あれども儘齟齬の意あるものなり、是等は取にもたらず女兒を欺くの論なり、

必其者の依怙鼻眞ありて云事多く、彼所は不畫爰に難あり彼所に失あり目が曲り口がいがめり  
など、彼が他を寫せしなれば他に比難はもとより有りしと答ふれば夫は門弟が代筆せしなら  
ん或は贗物なるべしなど、何處が善のか悪のか畫の視どころもしらぬ故に、眞偽の賞鑑を差置  
いて強て鼻眞のあやまちを覆ふ事、浮世繪のうへにはいよいよ多し。而體は師匠が畫き、繁多  
に任せて弟子に其餘はかゝせしならん、或は人物は師の畫きて、草木樓臺は弟子に畫かせしな  
んど、愚俗畫法をしらざれば是を云ふもの十人に七人有り。畫き難きを弟子に譲り、畫き易き  
を師の畫くは師より勝れる弟子ならではいかで是を任せつとむべき。是等は繪難房にあらず鼻  
眞を争ふに無失を以て論ずるものなり、文盲愚痴の僻事謂とて痴呆の限りを盡すと云、年にも  
耻ぢずして珊瑚珠もほふつきも松露と思ふ、愚鈍度疑問疑惑ふ阿房の半ものしりは秋の落葉を  
拂ふが如し、論にも不及。畫法は和漢諸書に委しく出たれば會得すべし。佩文齋書譜、芥子園  
畫傳は其論たりしといへども見て益多く、古き來船の本は人物の一部一帙なく新渡の華本は全部  
す、又翻刻の本もあり。倭畫を學ぶにも漢畫の規則はすつべからず、往古よりの畫家の論或は  
異説を傳ふこと世に多し、畫人の業を賞せんとして、事を畫に託して畫法に反する事あり、仙  
術を施して壁の畫の中に容を隠し龍紙をはなれて空に昇り、雁抜出て天に飛ぶ、寛平法皇の御

所の障子の馬は草を食ひに夜な／＼出しは金岡を賞するの説、閑院の障子の雞をみて雞の蹴合たりしは成光が筆の妙を傳へん爲の話、河成が九相の圖の惡嗅は飛彈の匠工と巧の勝劣を比べんの譬なり、元信が馬の額は左甚五郎を並云んとして河成匠工の話を附會し、北野の額の郭公の聲を出せしは、和泉式部の歌を賞せんのみまきぞへなり、金岡又は古法眼の筆捨松など呼ぶは松を賞するの謂、松島の説は風景をほめんの意也、大友宗麟が豊後の丹生島に狩野重信（法眼永徳源四郎宗秀之兄）と、樹岩見山（大明の人）畫論は大平の勇氣を勵すの傳なり、吳正翁が猫の畫は午時の當推量、（猫を畫くに目を丸く書くは法にあらず、糸の如くに畫くは法なり、虎を畫くに半を以てす辟論なり、禽獸蟲魚寫眞をみて死したる狀なりと言しは、死せしを寫したらんと思ふは推量にて云ふ也みな同じ）、藏戴松が鬪牛の誤りを牛飼の難せし類は、黃筌が飛鳥の論に類し、夢中に圖を得たりと云傳ふるも神靈を見て狀を得たと云も疑説也、畫難房が杣の繪に木屑を雪落せしを見出したるは、生類を畫くに食物を書添ざれば死畫となるなど畫法に反するの異論（異本論  
作説）にして畫を不學者理窟を云て難じ誇の一癖なるのみ、古今に討論は盡べからず却説ことあり、古人の傳神妙手を施したるは筆意畫法墨色備り、一微の物にも性に委しく目撃する所宛も生けるが如く、人物のはたらき斯くもあらんと感興の趣きをあらはすは其眞

に似たるが故なり、爰を以て賞鑑の決着自然筆癡々、代々贗正の眞偽を視るに畫法の八活、落墨、設色、筆意、畫法亂ざるを看るを旨とす。臨摹し陰寫して畫くものは畫法筆法必亂る、是等の説を聞誤りて、板刻の畫は浮世繪なり取にたらずなどと、半學貌して本畫師漢畫師などと、直の知れぬ米に命を繋ぎ、身分職法も不知して閑暇の助に畫を學ぶとも畫法の式の一端を不辨、賢曰、事を知て業に疎ければ不知に劣りなんと自誇、韃靼繪を明繪と心得て、唐晋漢宋元明を混同してわきまへず、設色法は五彩を練る加減をも會得せずして、市中の者を街畫といやしめ給食の人を素人繪と嘲る、我愚を不顧して人を誹訪そしつは、古人守一も畫習子供の譬なりと是を笑へり、己瘡患て人の疾を喫きと云ふの類、魚を喰たつて鮮喫あまきを嫌ふが如し。當世畫工板行繪具の潤色を不假、墨一遍の繡々に粉本臨摹せずして、四季雜體に人物生類の光景、萌出る草、靡臥樹木、疎荒亦美麗を盡す、臺閣學舎の物凄じき風雨霜雪、戰場遊觀、其狀を寫して實斯も有けん、と風情を調べ、假寫事畫法を不辨して筆を下すことは難し、唯黒色五彩を施ざるのみに拙きか、規則は不知業にのみ長たる者が畫たらんは趣不調、大抵は可なりと雖も腹をへだて、痒を搔如く、情を盡さず欠けたる事のみ多く見ゆ。況や才無、筆動かずして彼是雜交膽寫して是を畫くとも不具にして拙し。墨一篇の板刻畫すら如し斯、謗罵者是を辨へよ。近世畫を視に目を貴

ばずして耳を貴ぶの人情と也、業に勝れたる者をば拙きもの是を妬猜さまざまに嘲り、非を穿鑿して云を譚知と稱し、一犬の虚萬犬の實にひとしく、是を傳へて同學輩風流の餘情を樂むは稀にして、互に勝負のみ競争いかに戦敵の俗語有といふとも、主親の敵の如く我同心の族にさへも、確執あり我意に募り依姑を以て業には疎く、心誇りて唯高慢大言を吐き、己が筆に不及は代筆を頼み自是を廣言し、軍中の拾首して高名を争ひ感狀を望むにひとしく、畫道の本意を失ひ古人の法に反す、夫のみならず自誇に過ぎ古人の名を嗣、己が拙きも不顧古人の名を以て高名を求めんとて、茶器名刀の如く古きを尊び千辛萬苦の巧を経たりし故人に業を以て耻辱を譲り、後世疑惑混同して己が名も發せず古人の名を汚す事其罪甚し。仕官の者累代家名姓氏を嗣相續するは、其族先祖を失さずして末裔の勤る所也なんぞ血脈もなく縁家をあなぐりもとめ歴史に英名を汚こと古人不悅憤に不堪、爪弾きして忌嫌惡むべし、其愚には及ぶべからざるものならん。かかる強情の黨多ければ、其猛威に押倒されて愚俗是に惑ふ者多く、近世（文化文政を云）畫本の類を梓行して市中に發兌し鬻ぎ、板元も是に準的多く古格を失する者出來り、價を貪り畫工作者をないがしろにして巧拙を不辨、下職と共に扱ひ馬糞と饅頭を不分別、黒きは犬糞と胡麻味噌を同す、麝香は牛の糞なりと思ふ、されども金錢を以て昏じめ我意を震

ふものから給食に易て業とする者は是に従ひ、止動の間違も馬が聞かねば是非がないと、此畜生と心に云ひ心に答て金銀の繩に繋る嗚呼我へたり廢れる哉。畫に業を樂む者はいかでかゝる卑劣の黨に近寄りらんや、遍擔の愚に理論するは一杯の水を以て車薪の火を救ふが如く、病犬に體儀を救ふるに似たり、いよく憤怒を増て却て患を得べし、仇を以て恩に報の類なり。愚翁も僅に此業を學びしに、得も知らぬ畫人が筆に予が畫名を記し彫刻し、世に行ふもの數十部あり、夫のみならず同名の者諸國に在て、なりはひとする事を朋友より告來る事數度、浪花京師の書肆より發市の小冊にも偽名あり、呆るゝ事やゝ久し。行程隔りし國へは扱人板元の購入を欺き賣たる物にや、東都の書買は畫料を食り、書かけたる畫の半より他へあつらへ偽物を拵へ、一應斷わらでもなんの祟りか有べきと多寡を括り、欲に薄情を以て疎漏の亂暴を振舞ものならん。亦繪行脚の名を同するものは僕よりも業は勝れたる者なりとぞ、同名姓氏暗合せるものか、是等は貪惜せぬ事なれども、我食を喰つて他の名を弘むるも一癖のいかもの好ならんか。思ひ入る心の奥の隱家はよしや吉野の山ならずともといふ古歌にもとづき、只清貧を樂むには不<sub>レ</sub>如と今は其業を廢して世の流行はしらずなりにき。日本畫の愚考を朋友の需に應じ誌付るの序でよしなき事を書添しになん。

于時癸巳東都根岸の時雨岡の於閑窓

無名翁誌



## 〔無〕吾妻錦繪之考

東都第一の名産として他郷の者江戸より歸るには、江戸繪と云つて必ず是を求むる事となれり、世俗之を一枚繪といふ。先に山東醒世翁曰、延寶天和の比の一枚繪といふ物を藏せる人ありてみるに西の内といふ紙一枚ほどの大きさありて、おほくは武者繪にて丹綠青黄土をもてところまだらに色どり、大津繪の今少し不手ぎはなる物なり、畫はみな上古の土佐風にて甚よし。畫者の名はしるさず、もとより歌舞伎役者遊女の類ひの姿をかゝず、元祿のはじめより役者の姿をかきはじむ、丹と柄といふものにて色どれり。江戸眞砂子六十帖に云、元祿八九年の頃元祖國十郎鍾馗に扮す、その容を畫き刻て街に賣る價錢五文、是より役者の一枚繪と稱するもの數種を刻すと云、寶永正徳の比迄専らにあり、享保の始め同朋町和泉屋權四郎といふ者紅彩色の繪を賣はじむ是を紅繪と云。夫より色々に工夫して墨の上にかはをぬり、金泥などを用ひてうるし繪と云て大に行る。寛延の比より彩色を板刻にする事をはじめて紅藍眞三遍摺なり。明和のはじめ吾妻錦繪といふもの出來始て、今に至りますく花美を盡せり。或人云寛文の比は板刻繪なし、大津繪の如く種々の武者繪をかき畫にしてうりぬ、板刻になりしは延寶の比がは

じめなるよししかるやいなやをしらず、享和壬戌冬十月記とあり（山東京傳が蜀山人所藏の浮世繪類考校訂の追考の卷末にしるして送りしものなり）。板刻の畫は寛延の比より起りて、天保の今に至る迄八十餘年のものなりとおぼゆ、亦摺込の彩色摺多くありしと云へり。上方にては今も多し。錦繪の精巧、天明寛政の頃迄は京大阪にては等閑のものなかりしに、今は江戸にも勝れて佳製多くなりぬ。寛政の始めより金銀銅粉雲母入の彩色摺りをはじめしより、後正面摺きめ出し等の工風をなせり、近比、狂歌春興の摺物に美を盡し、春毎に互におとらじとて寫眞摺無地金摺などを製しければ、再應是を禁じられたり、是より江戸賣買の錦繪に金摺りは止むたり。

按ずるに寶曆明和の比は今切繪と云て、みよし四つ切りの三通摺の繪有、是等の類ひ成べし、且は後大奉書摺となりし、奉書二つ切を大錦と云、今は大奉書中奉書は不用、イヨマサと云紙を用ゆ。合にしきも最上紙を用ゆ。伊豫奉書二つ切を合錦と云へり。みよし二つ切を小合錦と云。大錦の二つ切りは中錦、合錦二つ切は中合と云、伊豫奉書豎四つ切をきめと云。其外種種の紙數品國産の紙を（國紙と云）用ひて様様の唱へありといへり。

草双紙も文化の比より錦繪の表紙となりて、合巻といふ者になりぬ。正徳享保の頃赤本と云紙

數五枚位綴たるは、唐紙の表紙なりしを赤く染たる紙になりたり是を赤本と云、夫より萌黄色の表紙となせしを青本と呼ぶ、其後黄表紙となりしをも青本といふなり。天明寛政の比こんにやく本とて、すきかへしのととき色の薄紙表紙を付、半紙ずりにて袋入にしたる草双紙ありし、是より今の晝表紙の合巻を製本せし者なり（今吉原細見五葉の松の製本のみ其體裁を改めず）按ずるに赤本と云ひしは金平本と云、紀逸が黄昏日記に曰、元祿年間の板なり岡清兵衛は金平本の作者なりと有、夫より後西遊記を譯せし桃太郎、宇治拾遺の物語より舌切雀花咲爺の一期榮えし昔噺しを作り、童蒙の弄と變じ赤本とはなりけん。其後還魂紙五枚づゝ綴て價を六文に賣りし黄表紙となりし比は三四へん摺の繪を切て表題に張しが、享和の年間に價十文づゝになりたり。此比迄は昔話又は目出度作りし草双紙なりしが京傳の滑稽行はれて年毎に奇をあらそひ、童の目をよろこばせんとて敵討の物語となり、前後篇を望しより一年二年と篇を次ぐことになりて染表紙のうへに錦繪を切抜て張りけり。此頃より半紙摺りとなり或はスニコと云紙にて製す、夫より表紙一面の繪をはり、または是を錦繪の摺付表紙となせしなり（板元江見屋の工風より繪表紙の合巻となれり、文化のはじめなり）、是よりいつとなく草双紙の名は廢れて合巻とのみ呼び來れり、近世は道中双六もさまざまに工風し美を盡し、千

代紙白粉齒磨の袋まで錦繪摺りにならぬはなし、美點を盡すの限りといふべきものなり。

## 岩佐又兵衛

又兵衛父を荒木攝津守ト云、信長公ニ仕て軍功あり、公賞ノ攝津國を給ふ、後ち公命を背て自殺す、又兵衛時に二歳、乳母懷て本願寺の子院(に)隱れて、母家の氏を假て岩佐と稱す、成人の後織田(信雄に)仕ふ、畫圖を好て一家をなす、能く當時の風俗を寫スを以て、世人呼て浮世又兵衛と云、世に又平と呼は誤なり、畫所預家に又兵衛略傳あり。

藤貞幹好古日録ニ見ユ。

【無】秀吉信長の使として荒木村重が有園の城に来る、河原林治冬、秀吉を殺と云ひしとて、秀吉脇差を引出物として是を稱す、天正元年四月、信玄卒し、義昭公信長と不和に成、將軍家譜代の臣細川藤高、茨木の城主荒木村重兩人、佐久間信

\*(一)内は好古日録によつて補ふ。

盛に寄て信長に降参す、岐阜の城にて對面の時、信長刀の切先に饅頭ニツツつらぬき、我芳志なりと指出し給ふ、村重大の口をあき切先の饅頭を一ツ口に喰んとす、信長笑ひ玉ひ、其後攝津を興ふ。(以上類考に無之也)

按するに是世にいはゆる浮世繪のはしめなるへし、

又大津繪も此人の書出せるなりといふ。

【無】鎌倉公方持氏時代の比、常陸國小栗の城主小栗判官兼氏、讒者の爲に身を亡し源老々の後畫工となり小栗宗丹といふ、五代目の小栗大六東照宮御在世の時仕へ奉る、御使番を勤る、秀康公への御付人に相成、領知二萬石にて越前家家老相勤る、小栗美作守正矩是なり、始め五郎左衛門と云。

【追】按に一蝶が四季の畫の跋に、越前の産としるしたるを見れば、越前に於て成人せしと覺ゆ、名字は知る人もなかりしにや、たしかにするしたるものを不見、又兵衛が父荒木攝津守、名は村重、家士に重郷(姓氏不詳)と云ものあり、俗稱兵久藏、後に内膳と改む一翁と號、狩野松榮門人にて、畫をよく

\*後の研究に  
依れば勝以  
也

す、一説に又兵衛始め此人を師として、繪を學び、後に土佐光信(中人)の畫風に倣て一家をなす、世に光信の門人と云は誤也、時代同じからずと云、しかるやいなやを不知。

〔増〕岩佐又兵衛は姓氏實に未詳一名といへり、見聞せし處、繪は土佐流の名手なり、花鳥人物共に彩色筆意絶妙と云へし、就中浮世人物に妙あり、〔新増〕土佐流にては、市中のさま、或は花見など畫たるをすべて浮世人物の繪卷と云、又兵衛のみにかきらず、〔増〕土佐流にて浮世の人物をさして、雜人形雜人物、浮世の人物、或は武者人形大和人物なりとの唱へあり、土佐守門弟なりと云、□□年間の人なり、故有て姑く勘氣を蒙り、流浪して畫を以て渡世とす、(今云町繪師の如くなるべし)從來名を好まず業にほこらず、何くれとなく人の求むるに應じて畫くといへとも妙手なれば、自ら世に鳴り、用ひられしと云り、土佐流破門の弟子なればとて、今に至る迄、又兵衛の畫は土佐家より鹽定せず、極を不出、添手紙のみなり、是を折紙とす、禁裏繪所預は土佐流なり、將軍家にて狩野氏の繪を用給ふが如し、故ありて詳にしるしがたし。又兵衛畫に名印有る物は究て少し、遊女

などには、墨肉にて字體分明ならぬ印有も多し。世を送るたつきとせしのみなる性質、是にてたしかなり、當世の人虚名をむさぼり、己れが未熟にて及がたきには代筆にても名を顯はし、唯花押の立派を第一として、我物顔にほこる愚昧の輩に反する事、をのづから名人の所爲、備はる所の妙と云べし。

〔通〕雛屋立圃

〔増〕(立圃の傳諸書に載て人の知る所なれど爰に出す)野々

口氏、稱雛屋、俗稱紅屋 庄右衛門〔新〕或は市兵衛〔増〕(京師人)初

名親重〔新〕自松翁と號す〔増〕明暦の頃の人、寛文中歿す、年七十二

〔増〕立圃は書畫を能し、俳諧〔新〕(を貞徳翁に學んで)〔増〕名あり、風流の一奇人と云へし、畫は土佐氏の門に入たり。

〔通〕専ら浮世繪を書たり、醫師中川喜雲作の雙紙のさし繪、多くは立圃書けり、許六が歴代滑稽傳に雛屋立圃は畫を能す京童と云名所記、自畫なり云々、上り竹齋の畫も立圃なり。

〔世〕男を生白といふ、鏡山と號し、父と共に畫を能せり。



## 菱川吉兵衛師宣

大和繪師又日本繪師とも稱す、房州の人なり。

【繪】（正保の生、正徳中歿す、年七十餘）姓藤原（一説）日本繪師菱川氏、俗稱吉兵衛、後剃髮して友竹と云、安房國平群郡保田町の産なり。

【曳】菱川師宣歿年は京傳が再考に曰元祿八年板本師宣之遺墨委繪百人一首ノ序跋を以テ考れば元祿七年ナリ。

貞享元祿の比土佐流を略して書出せり、大和繪又日本繪などゝ畫名に記したるものも見ゆ。生國房州保田の産、元業紺屋にて上ハ繪師也。

### 【追】菱川師宣傳

菱川吉兵衛師宣、剃髮して友竹と稱す、初めは縫箔を以て業とし、上繪と云ふものより畫を書きならひて、後一家をなせり、英一蝶と時を同ふすといへども、十

年ばかり先立て世に行はる。案るに師宣は土佐の畫風を好て、浮世又兵衛、岩佐氏)が筆意に倣て一家をなせり。一蝶は狩野家の筆意を以て師宣が畫風により時世粧を畫て一家を成せり、共に近世の名畫なり。一蝶わかつりし時、師宣が畫風をしたひし事は、四季の畫跋(一蝶の部に出せり)と云ものに、岩佐菱川が上にたゞん事を思ひと自らかけるを以て證とすべし。師宣専はら印本の板下と云ものを畫きて、板刻の繪本甚多し、他國の人江戸繪と稱して板刻を玩ぶは此人に起れり。みなし栗

山城の吉彌むすびも松にこそ 其角

菱川やうの吾妻俤 嵐雪

みなし栗は天和三年の板なり、此比さかりに行れたるを見るべし。

【繪】吉兵衛師宣は若年の時より江戸に移居して、縫箔師を業とす。後畫を□□門に入て學び後一家をなせり、浮世繪に妙手なり、亦板下畫を多くかけり、浮世板下畫の始祖と云べし。後剃髮して友竹と云、村松町二丁目に住す。

傾城遊女をよく寫せり、彫刻の畫本多し。

【増】板に刻したる物

和國百女

三册  
元禄八年板

月次の遊び

一册  
元禄四年板

大和の大寄

一册

戀のみなかみ

一册

【増】畫本大和墨

三册

勇士ちから草

三册(貞享二年の板、大傳馬町三丁目鱗形屋開板)

【新】香具大全

天和四年板

倭名所繪盡

三册

【増】訓蒙圖彙

再板師宣畫貞享原板ハ吉田半兵衛畫

【新】江戸雀

【増】床談儀

艶書軌範

旅葛籠

色變子

近世大よせ

【全】

【新】以上五部、【増】共に師宣畫なりと、しかるやいなや未だ見ず。

【増】貞享元禄の頃の板元、江戸大傳馬町二丁目鱗形屋(古左衛門孫兵衛)今、馬喰町西村與八なり。

其外天和貞享の頃の板本多し。

【通】房州保田村林海山別願院境内に在る

\*床談儀以下の五部

周廻七尺厚二寸五分

洪鐘一口 口廣二尺二寸五分  
長サ三尺五寸

寄進施主

菱川吉兵衛尉藤原師宣入道友竹元祿七甲戌歲五月吉日鑄字如以上、予打本一紙ヲ納ム

以上房州保田町醫師澁谷元龍に問て其實を記す。元龍は菱川の親族なり。

〔場〕天和四年板まくら大全に、菱川吉兵衛師宣とあり。

貞享四年の板江戸鹿子ニ

浮世繪師

菱川吉兵衛

標町横町

同 吉左衛門

元祿二巳年板江戸圖鑑ニ

浮世繪師

標町 菱川吉兵衛師宣

〔三〕元祿五年板買物調方三合集覽(横切本一册)

同 所 同 吉左衛門師房

長谷川町 古山太郎兵衛師重

淺草 石川伊左衛門俊之

通鹽町 杉村治兵衛正高

橋町 菱川作之丞師長

菱川 吉兵衛

江戸浮世繪師 同 吉左衛門

同 太郎兵衛

〔三〕三馬曰、元祿十年板國家萬葉記(七ノ下に)

菱川 吉兵衛

大和繪師 同 作之丞 村松町二丁目

同 吉左衛門

如斯出たり。

按ずるに井澤長秀が俗説辨ニ國史ヲ引て大和繪師は倭畫師トテみだりに稱すべからざる事を述タリ。江戸元祖古  
代一流大和浮世繪師の初り。

菱川師宣<sup>\*</sup> 娘

生國房州保田ノ産 聲酒造之亟

貞享元祿の頃

彩色名人

大傳馬町二丁目

三左衛門いろ／＼書出ス

板元 鱗形屋孫兵衛

【故】探幽齋正信

\*此一項本の  
生註

菱川同時の人にして探幽齋守信に比して此號をもうけしか、其師を知らず。

川島絃清

京師の人、正徳頃の人、自ら大和繪師と稱す、其傳を知らず。

\*  
そし草

二册  
正徳五年板

\*  
それく  
草  
の誤

菱川師房

師宣の長男なり。俗稱始吉左衛門、後に吉兵衛。父と同居。はじめ畫師、後に紺屋を業とせり。

委畫百人一首

元禄八年板

菱川師永

師宣の二男なり。俗稱沖之丞

江戸麴子及圖鑑には佐之丞とあり、一説に酒造之丞といふと

父と同居、彩色に妙を得

## 菱川政信

師宣の門人なり、字守節、よく師の畫風に似たり。

## 菱川友房

師房の門人なり、畫風は(師に)似て筆劣れり。

## 古山師重

師宣の門人なり。俗稱太郎兵衛といふ。江戸長谷川町に住せり。元祿年中の人。  
三合集覽に菱川太郎兵衛とあれど、古山は本姓なり。

## 四座役者繪盡

吉原源氏

一册  
貞享四年

## 杉村正高\*

其傳詳ならず。菱川同時の人なり。俗稱治兵衛。通油町に住せり。

\*杉村治信と  
同人也



【新】石川流宣 伊左衛門俊之

其傳詳かならず、「故」名は俊之、俗稱伊左衛門、流舟とも號せり、淺草に住す。

【新】菱川同時の人也、大和耕作繪抄、江戸圖鑑綱目、并に江戸圖等あり。按るに菱川師宣に比して號を設しならん。

【故】鬻家人名略九に曰、石川流宣元祿武鑑の末に繪圖あり云々。流宣は作意ある人にて自分著作せしものあり、盛紫記咄といふ落し噺の本は自畫作なり。

\*正直噺

【故】杉村治信

其傳詳ならず、杉村正高の子歟、或は門人なるべしと思はる。

\*杉村正高と  
同一也

古今男 天和四年板

菱川師平

47 扶桑名畫傳雜家四ノに此名あり。其傳を記して曰、姓詳ならず。菱川氏、名は師

平。師宣の子といへる説もあれど定かならず。其畫跡伊達家の畫工菊田伊洲といへるもの携へ來りて予に見せしことあり。畫後に菱川師平とあり。其筆風よく師宣の畫法を得たれど、及ばざること遠し。師宣の男といへるによれば正徳頃の人なるべし。

按るに此人師宣の子といへれど謬ひがたし。師宣系圖浮世繪類考  
追考に載すに嫡男師房、二男師永と見へて師平なし。もしこの二人のうちの初名なりけんも知らねど恐らくは門人のうちなるべし。

### 東坡軒

其傳詳ならず、元祿十三年印本野郎舞姿記評林太和川甚之助を評す條に曰く、上略風吹洞にうき世繪かいて鏝踊など彩色菱川がながれ東坡軒となんいへる心中もの専ら此道をうれしがりけるとかや云々とあり、猶考ふべし。

【追】長谷川長春

京師の浮世繪師なり天和貞享の頃の人か、好色旅日記に、今の長谷川よし田が筆にもなるまいとかきたるは此人の事か、同時大阪に長谷川典之丞と云あり、是は本繪にて雪舟が末孫と云。

〔増〕吉田半兵衛（貞享中の人）俗稱□□ 京師の人なるか、號姓氏共未詳

無名軒が序云、いはでの山の岩つゝじ、云ねど色に通りものは、吉彌結びの長さ契りをかはしあるはずげがさの深き思ひをしのすゝき、ほに出てよりもよしな吉半か染のうめ盡すとあれば、師宣同時の人歟とおもはる。長谷川長春同時の浮世繪師なるべし、好色旅日記に長谷川吉田とかきしを見れば、其比流行の人とおもはる。

好色訓蒙圖彙（貞享三年の板、繪師吉田半兵衛と有り）〔新〕其外畫本數多し

〔増〕其後江戸にて再板せしは師宣の畫なり、其後板刻せしは祐信なり、是を貞享

訓蒙といへり、後篇に委しく記す、實名は數度見たれども外題を失す。

〔通〕當世繪又兵衛

同 半兵衛

元祿五年版買物調方三合集覽に、京にて當世繪書、丸太町西洞院古又兵衛とあり。是等も岩佐又兵衛が名を似せたものなるべし、又是にならばせて、四條通御旅所の後半兵衛とあり、是等も京の浮世繪師なり。

大津 又平 (大津繪、一稱追分繪)

按に元祿三年版東海道分間繪圖に、大津大谷邊佛畫色々ありと記す。昔は佛畫をもつはら書て、今の如き戲畫はそのかたはら也、飛州の山中にも毛坊主と云者あり、俗體にて常には農業木樵し、人死すれば導師となりて是を葬す。本尊は石地藏或は大津繪の十三佛なりと本朝俗診志に見ゆ。余大津畫の闍魔并觀音を藏す、ともに古畫なり。

大津繪の筆のはじめは何佛 芭蕉

今も佛繪を彼地にて賣ども、大津繪の畫風にあらず、常の佛繪を板刻し、彩色したるものなり。本朝文鑑に、浮世又兵衛は大津繪の元祖云々。此說遍く人口にあれど、たしかなる證なし。古き淨瑠璃傾城反魂香と云に、土佐の末弟浮世又平重興と云もの大津に住て繪を書たるよしをつくれり。是よりしてますます虚説を傳ふ。或説に別人に大津又平と云ものありて書始む。享保の頃まで、其子孫ありしと云。余大津の古畫、奴の槍を把たる圖を藏す。八十八歳又平久吉と書て花押あり、古雅なるものなり。彼又平が子孫の繪か。貞享四年版好色旅日記に、大津、追分奴槍持のいきほひのなき繪をうるが大谷云々、槍持の繪も古きものと見ゆ。大津繪も浮世繪に類し、且浮世又平が事を辨ぜんが爲に是を記す。

【新】大津繪の佛像

元祿四年芭蕉翁粟津の無名庵にありし時正月四日に

大津繪の筆のはじめは何佛

かく口ずさめるにて思ふに、古は佛像を畫くを専らとせしをしるべし。此頃は

津繪の佛像を持佛に掛る者多くありし故に、おのづから佛繪のかた行れ、戲畫はかたわらになせしなるべし。

俳諧日本國 元祿十六年印本

前句 暮てぼつく 薪割家

附句 追分の繪佛に後世を打任せ 土山林

前句 不知 大津繪に同向して行鉢たゞき 一 雕

本朝諸士百家記 寶永五年印本 卷の八に云、大阪長町七丁目團扇屋喜三郎といふ者あり。

此裏店に風關そとくわんとかやいへる七十餘の老法師有中略間半ばかりの棚を釣て大津繪の三尊を掛一首の讚に

繪にかくも木にきざめるも彌陀は彌陀

未來のことはかつてたのまぬ

又享保十二年竹田出雲が作せし伊勢平氏年々鑑と云淨るりに大津繪の十三佛といふことも見へたれば、寶永の頃迄かの佛畫を用ひ享保の頃迄も世に散在せしものなるべけれども、今はたへて見る事なし。

【一代男】天和二年印本 卷之三に寺泊りの傀儡の家のさまをいへる條に「屏風の押繪を見

れば、花かたがて吉野参りの人形、板木押の弘法大師、鼠の嫁入、鎌倉園右衛門、多門庄左衛門が連奴、これみな大津追分にて書しものぞかし、見るに都なつかしく思ふ云々」

かゝれば天和の頃は戯子繪をもかきしなるべし。

【五ヶ濃津の草紙】

刻版の年號詳ならずといへども、  
案るに天和貞享の頃なるべし。

卷の四に「龍虎梅竹左字に書たる枕屏

風追分繪の奴が露の命を君にくれべいと赤き丹にて書きたる所を見て云々」とあ

り、これらを思ふに今に昔を失はざるもの大津繪也佛繪のみ  
昔を失ふぬり笠きたる女の藤の

花かたがてたるも古きふりなり。

【追】蔣繪師源三郎

元祿三年刻本人倫訓蒙圖彙に此名あり、西鶴が作の讀本のさし繪、名を顯さずといへども多くは此人の繪なり。

【繪】人倫訓蒙圖彙（源三郎畫）

【新】描金畫斧 五册 此人歟。

## 【菰】大森善清

正徳の頃の人なるべし。其傳を知らず。

繪本新薄雪物語

五册  
正徳六年板

鳥居氏 名人

## 鳥居清信

俗名庄兵衛

難波町邊住居

好色大福帳五冊、元祿十年板、四座哥舞妓看板書名人。元祿享保の頃迄。

【三】三馬<sup>\*</sup>按、庄兵衛は元祖清信俗稱也。鳥居庄兵衛清信と書たる繪本も有。

鳥居清信は江戸繪の祖といふ【曳】(べし、はじめは菱川ごとき昔繪の風)俗なりしが、中比より繪風を書かへし也。此後繪風さまざまに變化せしかとも江戸哥舞妓の繪看板は鳥居風に畫かく事也。

\* 曳尾庵本に  
は庄兵衛と  
清信とを別  
人の如く記  
したればこ  
の註ありし  
なり



清満、清經、清長トモ一枚繪、草双紙をかけり。

【三】三馬按、清經、清長供に清満の門人也。

【通】鳥居庄兵衛清信、門人<sup>\*</sup>にあらざれども始師宣の畫風をかきて後一家をなす。元祿より享保頃の人。

\* 芝川師宣の門人

【新】俗稱庄兵衛、始め京師に住して後江戸に下る、鳥居家の元祖なり、難波町に住す、始は歌川流の如き似顔に工みにして別て市川團十郎の面を似せたり、此頃は盃杯に似顔面の行るゝ事今の繪猪口の如し、後江戸四座の歌舞妓の看板を疊きて名聲大に鳴れり、元祿享保の人也。

【三】三馬按、三芝居看板を受繼たる畫之順は

元祖 庄兵衛清信

二代 清倍 清信男也

三代 清満 清倍男也

四代 清長 清満門人也

\* これは芝居看板を受繼たる順にて畫系にあらざる事を在意すべし

五代 清峯 清満ノ孫也、今清満ト改ム清長ノ門人ナリ

三代目清満ノ實子ハ浮世繪ヲ不畫シテ縫箔屋ヲ業トシ、和泉町ニ住ス、仍之

清長姑ク看板畫ヲ相續セリ、其ノ縫箔屋ノ悴アリテ清長門人トナリ清峯ト名

ノル、今二代目清満ト改テ三芝居番附繪看板ヲ畫ク、是即三代目清満ガ爲ニ

ハ實ノ孫也。

\*別に清峯の  
項あり

【繪】鳥居流の繪は江戸大芝居看板番附を畫きて一派をなせり、今猶畫風を改めず、古き草双紙等狂言を寫し、詞書を加へしは鳥居流の繪なり、俗に鳥居瓢箪足と云て、敵役の手足ひょうたんの如くに畫くは、元祖清信の比より行れたるものなるべし、芝居看板にはさまざま古實ある事なりとぞ、追て別記に委しく出さんとす。

\* 同所 名人  
二代目 鳥居清倍

是より繪風奇麗になる也

三代目 同 清信

四代目 同 清倍

兄早世  
弟早世

\*鳥居家の代

五代目 同

清信

俗名第四郎

芳町住居、後三味線ひきに成る。

難波町

六代目 同

清満

\* 四郎子

哥舞妓看板書其外一枚繪多く出す。

清満門弟  
同 清經

本材木町

七代目 同 清長

當時三芝居看板其外一枚摺草双子等多く出す。

清長は俗名關新助と云、近頃錦繪彩色の名手也。七

代めを繼<sup>\*</sup>。

\* 第四郎子

\* なほ清長  
の頭を見よ

## 英一蝶

按ずるに一蝶はもと多賀朝湖と云繪師也、姓は藤原、名は信香、字は曉雲、表徳\*は和央、翠蓑翁、北窓翁とも言。

吳服町一丁目新道に住せし比罪有て元祿十一寅年の十二月三宅島に流さる、時に年四十六歳也。\*寶永六年丑九月御赦免、江戸深川に住す。(是)\*謫より歸りての文なり。

享保九辰年正月十三日歿す。

〔追〕英一蝶は大阪の産、姓は藤原、多賀氏、父は醫師也、一蝶十五歳の時江戸に來り、狩野安信の門人となれり、名は信香、一に安雄、俗稱を助之進と云、始朝湖と號す。翠蓑翁、牛丸幼名と云、俳諧の曉雲名なり、曉雲堂とも云、舊草堂、一蝶閑人後門人にゆづる。一閑散人、隣樵庵、鄰濤庵、北窓翁等の諸號あり。〔奇跡考〕書を佐玄龍に學びて後一家の風をかきて書名あり〔追〕俳諧は芭蕉の門人にして其角嵐雪等と友たり。俳諧の名を曉雲といふ。和央一作和應といひしは花街に於て呼びし名なりとぞ。元祿

\*本のまゝ

\*實は四十七歳なり

\*後に出せる四季繪之駿を指す

十一年十二月元祿八年とす  
るは非なり、吳服町二丁目新道に居住の時誦せらる。時に年四十七歳。

鷗居にあること十二年、寶永六年九月寶永四年とす  
るは非なり、歸郷せり。其後英一説に花房  
母の姓なり一蝶

と稱し北窓翁と號す。〔奇跡考〕深川長堀町に住ぬ〔人物誌〕。〔追〕享保九年甲辰正月

十三日歿す。享年七十三。二本榎日蓮宗〔長祐山〕承教寺塔中顯乘院に葬る墳あり。

辭世

まきらかす、つき世の業のいろとりもありとや月のうす墨の空 一 蝶

〔増〕北窓翁退筆塚記

近代繪事之巧、莫北窓翁若焉、其氣象之豪放、筆力之遒勁、足<sub>レ</sub>以追<sub>レ</sub>蹤於古名

人、而新奇洒落、其所<sub>レ</sub>獨得者也、翁姓多賀氏諱信首、一名朝湖、又有<sub>二</sub>曉雲、

翠蓑、隣樵等之別號、考曰<sub>二</sub>白庵、諱某、京師人也、翁幼遊<sub>二</sub>江戸、某侯嘗愛<sub>二</sub>其穎

悟、使<sub>レ</sub>之學<sub>二</sub>畫於牧心齋先生、居久<sub>レ</sub>之盡得<sub>二</sub>其筆法、時又戲做<sub>二</sub>岩佐重起菱川師

信、而畫時世風俗、有<sub>二</sub>春蠶吐<sub>レ</sub>絲雲行水流之姿、而翁之名籍甚、元祿中坐<sub>レ</sub>事、

配<sub>二</sub>流於三宅島。

或書に曰、元祿の比、五代將軍家綱公〔常憲院殿と申す、寶永六年薨去〕好色に

\*享年を七十  
一又は七十  
二とする説  
もあり、い  
づれも非也

\*宜雲寺に  
り是は全文  
にあらず

耽らせ玉ひ、吹上御庭にて御遊興に美を盡し玉ふ。第一の御寵愛にて三の丸お傳の方と申、君の御心に叶ひける。(阿傳の方は至極小身の十五表一人扶持黒鍬組白須才兵衛娘なり、后年に至り御旗本に昇進して、一度朝散太夫白須遠江守に任せられたり) 此お傳の方小鼓の上手にて、公御謠遊はせば、御側にて一調を打つ、或時は吹上御庭の池に舟をうかべ、公棹さし玉へば、お傳の方は鼓をしらべて樂み玉ふ。是平日の事にて不<sub>レ</sub>知人はなし。其比多賀朝湖と云畫師百人女臈と云繪を書て、貴賤の姿畫を寫し、其中に世上専ら風聞ゆる、舟中に鼓を打、棹さし謠玉ふありさまをうつくしく書たり。此事誰か公に謁<sub>つ</sub>奉りけん、立所に奉行所より召捕れて入牢す。罪の表は朝湖御制禁の殺生を好み、鳥を取魚を釣ける御咎にて遠流仰付られける、朝湖願により配處へ繪具持參御免被<sub>三</sub>仰付<sub>二</sub>配所にて一子を設けしを鳥一蝶と云。后御赦免ありけり。百人女臈の内、お傳の方舟遊びの體、至極の出來にて、御咎に逢しは、其業に依て刑せらるゝ事、本意にも近かるべしと憂ふる色もなかりしとなり。百人女臈の繪は、我心にもいみじく出來しと思ひしが後に圖を書改めたり、今は十が七八は傳はらず。英一蝶と名を改て淺妻船と云

繪を書り、鼓を持、舞裝束の白拍子舟に乗たるは、以前の圖をやつせしものなり。當時英一蜂など専ら此圖を畫く、一蝶淺草寺境内にて千幅繪を書し時も人々是を好みけるとかや。

〔無名翁〕或書に、於傳の方實父白砂才兵衛甲州士甲賀同心三十俵二人扶持新地千石に召出さる。甲賀與力小山田彌市、才兵衛にいこん有て討はたし行衛しれず、五の丸様御歎に付御威光を以て下總龍ヶ崎にて召捕、江戸中引廻しの上品川にて磔に掛られたり。才兵衛改易となり、五の丸様御願にて美濃八幡の城主遠藤右松早世にて斷絶す。才兵衛實子御取立にて双方家名相立、新地一萬石にて江州三上城主遠藤主膳正胤親と名乗る、「窓のすさみ」に曰、山田彌七郎と有り。(此書に寶曆七年とあり)

〔増〕淺妻舟贊に云、(隆達が破れ管笠しめ緒のかつら永く傳りぬ、是から見れば近江のや)あだしあだ波よせてはかへる浪、淺妻船のあさましや、あゝまたの日は誰に契りをおわして色を枕はづかしいのはりがちなる我床の山、(よしそれとても

\*高麗谷の草  
木にて増補す

\*同上

## 後水尾院御製

今宵寝ぬる淺妻船のあさからぬ契りをたれにまたかはすらむ

此英一蝶が百人女腐の繪をもととして後、洛陽の西川祐信と云浮世繪師、百人女腐品さだめと云好色本を書きけるとぞ。

【追】一蝶に老母一人あり剃髪して妙壽といふ、一蝶謫居にある内友人横谷次兵衛宗珉が家にやしなはる。正徳四年三月三十日歿。顯乘院に葬す。宗珉が居檜物町に在り。

三谷何某一蝶が謫居より母のもとへおくりし繪を藏す、謫居のおもむきをこまかに置きたるなり。横谷宗珉の家に残りしものとぞ。

【增】一説に曰、一蝶配流せられ、老母を養ふ親族なし、官舎へ此事を願ひ、謫居より繪を賣ることを赦されて、其價を以て母を養ふ。島一蝶とは是なりと云。未詳、誤ならんか。横谷宗珉へ謫居の圖を母に見せ度と送りしは私のことなり、ひさくべき畫の中へ入て送りたると思へば、是とするところもあり。

【奇跡考】深川靈巖寺の後、海邊新田に、宜雲寺といふ禪院あり、一蝶歸郷して後、



しばらく此寺に住けるよし。寺中の繪障子のたぐひ、すべて一蝶が筆なり、ゆゑに世人一蝶寺と云。其繪ちかごろの回祿にほろびしとぞ。

湯原氏記ニ云、元祿七年四月二日、從ニ桂昌院様、六角越前守御使被レ遣レ之、

金屏風一雙

青野  
龍田

多賀朝湖筆 本願寺へ

同一双

大和耕作 同人筆 新門へ

### 英一蝶四季繪跋

夫大和繪はそのかみ土佐刑部大輔光信がすさみに、堂上のうやうや敷より田家のふつゝかなるさま、岩木のたゞすまひ、やり水のめいぼくこれにはじまりて、末々にながれ、予(が)<sup>\*</sup>如き(の)<sup>\*</sup>つたなきまで是をもとゝす。近頃越前の産岩佐の某となんいふもの、歌舞白拍手の時勢粧をおのづから寫しえて

\*曳尾筆本に  
よる

世の人うき世又平とあだ名す。久しく世に翫ぶに又房州の菱川師宣といふもの江府に出て梓におこし、こぞつて風流の目をよろこばしむ。此道予が學ぶところにあらずといへども、若かりし時(あだしあだ波のよるべにまよひ)時雨朝がへりのまばゆきをいとはざるころほひ、岩佐菱川が上にたゞん事を思ひてはしなきうき名のねざしのこりてはづかしの森しげきこと草ともなれり、さるが中に當りて謫居さすらへし事十とせあまり廿とせに近きをありがたき御惠のめでたきもとの都に歸り來ぬ。ある人むかしの筆の四時のたはむれ繪をふたゞび予に見す、其頃は心たくましく眼すゞろに、髮筋を千筋にわくることぐさも事たらざりけらし、しかし今の世の有様にくらぶれば髮のほどえりをこえず、ふり袖大路をすらす、

\* 曳尾雜本に  
よる

たゞあまさかる田舎おうなの姿繪(とも)思ふべからん。螢星  
うつりかはりて此一卷をみることに、浦島が七世のむま子に逢  
へるためしにひきて、かつはよろこびをそふるの心にす、こ  
れがために跋す。英一蝶書。

【追】嵐雪撰其袋元禄三年板に一蝶か句あり

花に來てあはせはをりの盛かな 鳴雲

朝寢して櫻にとまれ四日の雛 同

自書贊の句あまたあり枚擧すべからず。

一蝶は小歌の作多し、元禄六年印本松の葉にのするしのゝめと云小唄は一蝶の作  
なり。洞房語園には、みじか夜の早歌一名かやつり草となづけて、是をのせたり。  
淺妻船の贊も其比節を付てうたひけるにや、松の葉の端歌の部に載たり。寶永の  
比の寫本吉原つれ／＼草と云物に、かやつり草などの朝湖が歌こそ、又あはれな  
る事おほかんめれ云々。或説に一蝶聲よくて自らも小唄をよくうたひけるよし、

老人になりても紀國や文左衛門などに付て、花街にのみ暮したるとなれば左も有べし。

【繪】一蝶の畫、狩野安信の門人なれども、狩野氏にて是を鑿定せず、骨董畫といやしめて不用、町畫となりしゆゑなり、土佐の又兵衛是に同じ。

【追】宮川長春

専ら師宣ノ畫風ヲカキタリ、門人ニハアラズ。正徳享保中ノ人、版本ノ畫ヲ見ズ。  
 【繪】宮川雪溪〔新〕〔宮川〕曰、〔が末〕尾張國宮川村人、正徳年間、江戸兩國廣小路に住、土佐守門人、菱川の風を慕ふ。長春は狩野家の下請にて日光御用を勤む、狩野某甚宜からぬ人にて手間料を一向遣はさず、宮川立腹、度々催促に及び、遂に口論となり、宮川を多勢にて打擲し、其上に荒繩にていましめ芥溜に入置く。宮川方にては歸宅せざるゆへ、其子出尋ねて父を芥溜よりたすけ歸る、性命別條なしといへども、老人の事故、足腰をいため難澁に及ぶ。其子大にいきり、一刀を掲げて狩野方へきりこみ、當人は勿論、外門人三人きりころす。依之、其子は死罪、

長春は流罪、狩野某は欠所なり。其後、年を経て寶曆明和の頃、宮川春水といふ門人あれども、宮川は上に憚る氏なれば、勝宮川と號せしとぞ。

【只誠本】予見しものに寛保二年長春六十一歳自畫有り。相州市場觀世音の額に婦人の戯する處を畫きしも長春の筆にして寶永三年四月日とあるよし南畝翁の調布日記にあり。卒年不詳。

\*寶曆三年  
七十一歳

## 西川祐信 京都

京都に住す、正徳の比名人中興浮世繪の祖といふべし、繪本あまた有、中にも繪本倭比事すぐれたり。名人之枕繪を喜初。

【繪】西川祐信（元祿より寛延まで歿年□□）俗稱右京（初祐助 京師の人なり。姓藤原、西川氏、號自得齋、一號文華堂、稱大和繪師、世に西川流と云。

\*寶曆元年  
享年八十一

京都に住、始め狩野永納門に入て（法眼永眞、延寶の比安信門人、縫殿助永納字伯受、一陽齋、梅岳堂、西昌居翁と號す）畫を學び後一家を爲し、寶曆、明和、安永の比大に世に行はる、中興刻本仕女大和繪の祖と云へし、上梓する繪本數百

部あり、古今比類なき妙手なり、浮世繪師の名譽なるべきか、春畫は此人より風俗大にひらけたり、「新」後英一蝶が百人女廬の繪をもととして、「増」百人美女」として雲上高位の尊きより賤のいやしき迄、各其時世の風俗を寫し分たり、後又是を春畫にかきしかば罪せられしと云、筆意骨法、狩野土佐の二流をはなれず、悉く畫法にかなひし浮世繪師は此人に限れり。(或人の藏書に祐信畫の事にて罪せられし事を書たるものを見たりしが書名を忘れたり、西川の事委數ありし、なほ後にしるすべし)

繪本百人美女

同倭比事 〔新〕十册

同貝歌仙 三册

同都草紙 三册

同土農工画 三册

〔増〕同好色玉簾(畫名西川祐助  
祐信筆と有)

同好色百人美女(西川祐信筆)

〔新〕同千代見草 三册

同有磯海

同龜の尾山 三册

同眞葛ヶ原 三册

清水之池 三册

京羽二重大全卷の三、諸師諸藝の部 延享二年板

大和畫師 柳馬場綾小路下ル町 西川祐信

繪本答話鑑 三册

同女貞木 三册

同筆津花 同

同河名草 同

同十寸鏡 同

同勇者鑑 同

同和泉川 同

同寢覺種 三册

同糸櫻 同

同淺香山 同

同花紅葉 同

同千歲山 同

同池の蛙 同

同海土幸 二册

同後編喻草 三册

同玉かつら 同

同清水池 同

同池の心 同

同勇武鑑 同

同徒然草 同

同雙の岡 一册

同垣衣草 同

同都鳥 同

同東わらべ 同

同福祿壽 同

同雪月花 同

同花の鏡 同

同小松原 二册

同朝日山 三冊

同薄紅梅 二冊

同女俗玉鑑 二冊 其續作

● 此頃畫本の體裁は紺紫の表紙に金泥書あり、或は行成紙もあり、大本小本横切本等也。

〔増〕其他〔新〕上梓せる繪本數百部あり、〔増〕枚舉すべからず、亦彩色の妙手なり、肉筆の繪卷物等、世人専ら珍重す、近世東都にては師宣よりも祐信の畫は價貴しと云。

按に板刻本は夥敷あり、八文字屋本にて祐信が初心の頃畫きしと見ゆるもの多し。畫名は記さゞれども此人と見ゆ。

或書に曰、西川祐信は浮世繪枕畫好色本の達人と云れし、ある年百人女臚品定といふ大内の隠し事を畫き、其後好色變々岡といふ雲上のすがたの枕繪を板刻す。百人女臚のつがひ繪はやん事なき方々の枕席密通の體、清涼殿の妻隠れ、梨壺の隠し妻、萩の戸細の別れ路、夜の殿の妻むかひなんと種々の玉簾の中の隠し事を畫しこと、公廳にもれて嚴敷御咎を受、板行禁せられて斷絶しけるとかや世の



人の知る所なり、其比より以後好色本賣買を止め玉ひしを、ひそかに商ふことは成し、祐信も一蝶が跡を踏で、斯の如く成ことを云傳へしと云々。

【新】或書に西川祐尹とあるは祐信の男歟。

【世】繪馬鑑卷之一速見春 摩齋著 祇園の社釣狐の額の縁に、延享甲子年五月、西川右京祐

信行年七十四歳筆とあり。されば祐信は寛文十一年辛亥の生れなり。寶曆元年歿す、享年八十一歳なり。

【新】西川祐尹

文華堂祐信の男にて、畫を父に學んで能す、歿年不詳、板行の繪本數多ありとい

へども一二をあぐ。

繪本鏡百首 六册

同玉椿 二册

同花見鳥 二册

同面美鏡 三册

同水面鏡 三册

\*祐信の嫡男也猶祐尹の條を見よ

## 〔繪〕野々村治兵衛

〔新〕姓俗とも未詳、〔繪〕刻板の繪本世に多し。

〔故〕大坂の人なり、按るに西川祐信より少し後の人哉とも思はる。

雛形染色山 三册

雛形音羽瀧 三册

雛形立田川 三册

繪本通しるべ 三册

## 中路定年

野々村氏同時の人哉、其傳を知らず、京師の人なり。

畫本圖貨 三册

繪本三幅對 三册

畫本必用 三册

## 繪菱忠七

野々村氏同時の人、京師に住す。

雛形母子艸 三册

雛形瀧の流 三册

橋守國 大坂俊乘町

是又町繪なれどもよの常の浮世繪ならず、世に所傳の繪本通寶志、繪本古事談、謠曲〔史〕(畫)史、繪本寫寶袋等を見て知るべし。

〔繪〕橋守國(享保比の人、延享中歿す)俗稱惣兵衛、浪花の産なり、姓橋口信 號後素軒。

〔新〕姓橋、橋村氏、名有税、俗稱宗兵衛〔故〕又辨次といふ。

〔繪〕狩野探山の門に入て業を受(探山其カ守信鶴澤氏、探幽門人、大坂の人なり)

〔新〕探山は鶴澤氏、名守見、又良信、初め幽泉と號す。又探春齋とも云、探幽の門人、大坂に住す。

〔繪〕後一家の畫法を以て世に雷名す、狩野流の骨法を失はず、刻板の畫に妙を得

たり、精密奇巧此人より起る、〔新〕寛延元年卒す七十歳、〔増〕刻する所數種、天保の今に至る迄盛に世に行はる、書畫ともに善す、文學も博識の秀才なり。故に世の畫師の爲に廣く畫法を傳へ、粉本に乏しからざらしめんとて、精力を費し圖を工み、傍に其意を記して是を板刻せしむ、畫本の著述古今に比類なし、其名手世に知る處なり。狩野土佐を始、倭繪の名家多しといへども、其業を己に知るのみ、守國は悉く人の爲にせし故に、板刻畫の汚名を受たり、畫道に志さし有ども、書籍を見ざる俗家のものゝ爲には、筭翁が畫傳をも委しく平假名にしるして其意を得せしむ、倭漢畫法の奥義を極め、其業に達して畫本をあらはし、諸職の助となし、是が爲に世上に其業の力を得る者幾ばくならん、皆此翁の丹誠に依れり。尋常の浮世繪師に列する人にあらずといへども、板刻の畫に名を得たれば、姑く爰に擧ぐ、門人多し。

〔設〕守國住所は大坂順慶町四丁目と畫典通考の奥書に見えたり。

〔増〕守國筆繪本

繪本通寶志 〔新〕十册

同玉の壺 五册

同畫志 三冊

【増】同直指寶 【新】十冊

同詠物選 五冊

同運筆簡畫 三冊

【増】同寫寶袋 【新】十冊

同本朝畫苑 六冊

同扶桑畫譜 五冊

【増】同鸞宿梅 【新】七冊

同謠曲畫志

十冊  
中村三近編

南都名所圖 一冊

【新】同野山草 五冊

同萬歲武勇稽鑑 三冊

【増】同故事談 【新】十冊

有馬勝景圖 一冊

同畫典通考 十冊

【増】唐土訓蒙圖彙 【新】十五冊

【見】只誠按ずるに享保時代刻板の密畫は唐土訓蒙圖彙に始れる成べし。夫より以前かゝる細密の板本を見る事なし。

【追】懷月堂 【増】(淺草諏訪町居住す)俗稱【故】岡崎【増】源七號安慶\*

【追】享保中の人、世事談に見ゆ、姓名つばらならず。今折々其繪を見るに懷月堂とのみあり。

\*安慶の落款は見る處なれど安慶の落款あるを見ず、慶は彼の誤なるべし

\*繪本野山草は保國の著

〔繪〕正徳四年の三月、奥女中江島殿一件にて、生島新五郎遠島の時、共に暫く伊豆の大島に謫居すと云。木挽町山村座欠所となりしは此時なり。

〔故〕世事談に云、現在は懐月堂、奥村政信等なり云々。

〔故〕鳥居清倍

清信の男なり、正徳享保元文頃の人、父に劣らず名人にて池の端辨天の社に助六の看板に筆残りしが今は絶てなし、壹枚繪あり。

鳥居清經 清満門弟

(鳥居)清忠 同斷\* 米澤町角

浮繪彩色能書也。

\*三代目清信  
門弟の墓

(鳥居)清重 三代目清信門弟 小柳町<sup>\*</sup>  
市川海老藏似顔能く書也。

(鳥居)清勝 五代目清信門弟 高砂町

(鳥居)清次 同所<sup>\*</sup>

(鳥居)清久 日本はし小松町

(鳥居)清定 花房町

(鳥居)清廣 堺町

<sup>\*</sup>小柳町か

<sup>\*</sup>高砂町

(鳥居)清房

(鳥居)清時

(鳥居)清定一本ニ之

(鳥居)清政

幸四郎、富十郎、宗十郎似顔を能く書也。

古山師政 門弟米澤町

市川海老藏其外役者似顔名人、似顔繪の初。

〔註〕古山師重が男なり、俗稱新九郎、通稱を文志といふ。畫法を師宣に學ぶ、兩國江市長屋に住す、寶永頃より享保頃の人なり。此人に至りて菱川の畫風を失ふ



と世事談に見ゆ、此人市川海老藏の似貌を書出すと。

### 近藤助五郎清春 元祖清信門弟

【故】江戸の産にして 赤本金平繪本など書く、正徳享保の頃也。

【三】三馬按、清春は吉原細見記、井芝居狂言本等、白書畫にて數多開板せり、

此傳委くは別(に)記録す。

【新】類考に元祖鳥居清信の門弟といふは非なり、奥村政信、西村重長、近藤清春の三人は各獨立也、此時代の浮世繪はすべて鳥居の畫風を慕ひしもの也。

月岑子按に、享保の頃の板刻に近藤清信といへるあり、可考。

【故】江戸名所百人一首 一冊自畫作 道外百人一首

\*自畫作也

### 【故】近藤清信

79 享保頃の板刻に此名あり、清春の男か、考ふべし。

奥村文角政信 通油町本屋也

鍾馗の繪名人目玉丸く金筋を置、并浮繪紅繪の始め、枕繪上手。うつし繪日本繪師、志道軒繪等出ス。 〇印押

【增】奥村政信（享保の比）俗稱本屋奥村源六【新】或は源八【增】江戸通鹽町に住す、一本に油町書肆なり）號文角（おやま繪師とかたがきあり）【新】觀妙【增】<sup>奥ノ</sup>芳月堂、丹鳥齋

文角政信は自ら日本繪師とかけり、朱にて瓢箪の印を用ゆ、漆畫にも多し、浮繪と云て名所其外牧狩の圖、曾我十番切等、遠景の奥深く見ゆる圖を、板行にせしなり、其比は大に流行す、紅畫の始めなり、淺草【新】（寺境内）に出し【新】（講釋師深井）志道軒の容を繪くに妙なりと云へり。

【貝藏本】月岑云、政信重信が頃の一枚繪に三枚つづきのもの多し、和歌三神、三夕、

三幅對など名付し物なり、彩色は紅と萌黄のみなり。「故」雜司ヶ谷に草摺引の額あり。

【新】繪本新吉原千本櫻。遊畫式政信の贋本也狂畫にて四卷あり外題知れがたき古板を買請て須原や茂兵衛文政末摺立かく外題を改し也。

【故】要石 二册

きはひさくら

江戸紫裳紺 二册

繪本江戸繪簾屏風 二册

燠め鳥 二册

繪本金剛力士 二册

若草源氏

## 奥村利信

【増】<sup>\*</sup>寛延二年巳の新版疱瘡除の末に鶴月堂奥村文全利信とあり。

【新】一枚繪あり。

【増】奥村文志政房

【新】文志と號す、一枚繪、草双紙等多く有り。

\*此項浮世繪  
編年史に依  
る

【三】年玉ひまち咄と云稗史に江戸諸々口賣物其外物もらひ流行物等の始りを  
 覺記し、中に享保十年より初今専ら行はるゝと記たる所あり、通町奥村と上  
 は書あり、文角門人奥村文志政房書とあり。

【故】泰川重利

此人自ら大和繪師といへり。享保頃の人歟と思はる。うるし繪有を見たり。其繪  
 にはせ川町多さうしおろし根元あうみや九兵衛の新板とありたり。

【故】藤田秀素

此頃の人歟、赤本の桃太郎有を見たり。

\*享保頃

【故】井村勝吉

其傳詳ならず、京師の人なり。

丹前雛形 寶永元年刻

## 吉川盛信

其傳詳ならず、京師の人なり、俗稱半次といふ。

## 近士忠義太平記

## 西村重長 同町(通油町)地主後神田へ移ル本屋ニ成ル

浮畫、紅繪、畫本、哥舞妓役者繪等出ス。

【新】<sup>\*</sup>仙花堂と號す、享保の頃、通油町に住す、一枚繪畫本等多く畫けり、此頃の一枚繪に西村孫三郎<sup>\*</sup>と書たるあり、重長俗稱歟。

繪本江戸土産 初編三冊 重長畫

【故】今様職人盡百人一首 一冊

\* 影花堂とも

\* 孫三郎は重  
信なり

橋保國<sup>\*</sup>

\* 二代目守國  
と同人か

守國が男なり、畫法を父に學んで能くせり、號後素軒と云、印章も父守國と同じ勝字の印及び橘有税の印章二顆を押せるは父子ともに名のみ異にして號は同じかりし如く覺ゆれども、父存生中に同號同印章を用ひしには非ず、父歿後に繼たるたり。保國法眼に斂せられて寛政四年に卒す、享年七十六歳なり。

野山草 寶曆五年版

## 二代目 橘 守 國

天明より

\*二代目守國  
は保國と同  
人か

【追】女龍 【増】新【阿】りう

【追】享保中の名畫也、版下をかゝず。略傳世事談に見ゆ。山崎氏の女也。

【新】下谷長者町御旗同心山崎文右衛門娘にて芝神明前の境内へ出て繪を畫けり。

【故】近世逸人畫史に云。女龍は下谷の人、畫を菱川師宣に學て其畫風一工夫ありて奇趣あり。業平の涅槃像の奇圖を作る。實に女子の英傑なる者なり。

〔追〕川枝 豊信

〔通〕京師の人、享保十六年版「新」三國「追」朗詠狂舞臺といふ本の畫者也。

〔新〕享保年中の人、俗稱號とも未詳。

〔故〕洛下亭と號す。西川風の美人を能し、當時の風俗を寫して多く繪本に行る。

〔追〕羽川 珍重沖信

享保中、江戸の人、芝居繪本、吉原細見記のさし繪、赤本の繪等おほくかきぬ。

〔新〕本姓眞中氏「故」(繪情齋) 武藏國埼玉郡川口村の人也、俗稱太田辨五郎と

云口太田は川口の舊名の名は沖信、三同と號す、弱冠より江戸に出て畫を鳥居清信に學ぶ、心さ

ま老實にして言行を慎み、遊山翫水にも肩衣を脱事なし、享保の頃世に行れて芝

居繪本、吉原細見記のさし繪、赤本説經淨瑠璃本等の指繪多く畫きぬ、老衰して

三同宜観居士と號す、寶曆四年七月廿二日葛飾郡川津間の里藤浪里藤浪氏の家に病死す、

享年七十餘歳、池の端東圓禪寺に葬りぬ。

辭世 たましひのちり際も今一葉哉

\*藤浪氏は藤  
沼氏の誤、  
藤沼氏の妻  
也(燕石傳  
誌による)

〔追〕谷中感應寺の天井龍と天人は羽川藤永と畫名あり、珍重門人か。

〔三〕三馬云、珍重門人に羽川和元あり、附録云珍重は曲亭翁の伯父のよし。

〔故〕羽川藤永\*

〔故〕珍重門人なり、谷中感應寺の天井の龍と天人は此人の筆なり、師と同時に芝居繪本吉原細見記上るり本赤本等のさし繪多く畫きぬ。

雷川房信 俗名小松屋三右衛門、吟雪とも、後百龜\*

と云、享保寛保の頃。

一枚摺草双紙などあり、つたなき方也。

〔追〕大傳馬町三丁目山本九左衛門と云繪冊子問屋の主人なり、家おとろへて後に繪師となれり、房信の子を長兵衛と云、版本を摺て業とす、又娘二人有り兄弟三人とも今存生す、此山本九左衛門は古き本屋にて、貞享板江戸鹿子にも見ゆ、房

\*珍重の事蕭石襟志に詳し、馬琴の

伯父にあらず祖父の叔父なり

\*羽川藤永の誤か、珍重の項參照

\*房信と百龜とは別人、兩者を混同せるは何かの誤也



信が代に斷絶せり。

〔増〕摺職人に山本長兵衛あり、本所横綱町)

〔註〕吟雪が繪は鳥居風に似て少し異なる。豆繪といふもの此人並に清経頃よりは  
じまる。寛保寶曆の頃本郷に住す。

〔只讀本〕春川 秀蝶

按するに春川秀蝶といへるものあり、江戸愛宕山に祇園會の細圖の額を延享四卯  
年に畫て掲げたり、見るには有しが惜哉嘉永三年戊の火災に亡びたり。深川入幡  
宮にも此秀蝶が畫きたる境内の圖額に畫きたれど不出來なり。  
前の春川は時代はるかに隔たれども若くはこれが餘類か。

〔追〕下河邊拾水

〔新〕天明頃 京師雙丘住

〔追〕西川祐信と同時京師の人、畫本板刻もの多し。

\*春川榮山、  
春川五七等  
をさす

\*祐信より時  
代少し下る  
明和より寛  
政に到る

〔増〕此人狩野家の畫風を學びて近世の上手なり、祐信守國が刻本の筆意に似たりといへども大同小異あり。

増補頭書訓蒙圖彙〔新〕大成 〔増〕十册

繪本やしない艸(天明四年版〔新〕手島堵庵編〔増〕落西雙丘書堂畫下河邊拾水子とあり)

繪本をしへ艸

其他多し、費名わすれたり、追て書加ふべし。

〔新〕伊呂波歌繪抄 三册 教庭訓 一册 書畫一筆 寛政七年版

姬文喜都織 百人一首 秋里籙 島編 京の水 二册 秋里籙 島編

繪本福緒縮 二册 繪本高名鑑 二册

繪引節用集 秋里籙 島編

〔故〕武者魁圖會 三册 百人一首 笑の圖 春曉齋 寛政七年版 と合監

〔新〕門人國雄 〔増〕皎天齋

俗稱醉屋平十郎、〔故〕寛延頃の人、〔増〕此人名を好まざるが故に、世にしられず、

\*守國門人の  
意

生涯を困窮して終れり、落款して世に遺せる畫もなければ、人其名をしらず、古來かゝる類の後世に傳らざるもの多かるべし、世人多くは目を賤み耳を貴べること歎かはしき事ならずや。

毛詩圖譜（皎天齋國雄畫）刻本世に行れたり。

【故】三代目 鳥居清滿

俗稱半三、清信の二男或は清倍の男とも。芳町に住して三味線職を業とす。弟有しが早世なり。壹枚繪、双紙等有り。

田村貞信

年曆詳ならずと雖も享保より後の人なるべし、一枚繪あり。

勝川輝重

89 貞信同時の人なるべし、一枚繪あり。

石川豊信秀葩 重長門弟 小傳馬町地主

寶曆のはじめ紅繪多し、小傳馬町【註】旅人宿ぬかや七兵衛といひしもの也、一生倡門酒樓に遊ず、しかるによく男女の風俗を寫せり。一枚繪多し、畫本もあり。

【故】號明篠堂\*

【新】初名西村重保、狂歌師六樹園飯盛の父なり。天明五巳年五月廿五日歿す。【故】年七十五歳【新】淺草權寺に葬す。

狂歌方載集 二册

石川  
壯盛

繪本末摘花 二册

飯盛が父の死しけるとき、いしかはしうはをとふらふといへる十二の文

字を上下の句の上におきてよみてつかはしける 四方赤良

いしぶみをたつる飛脚のゆきことどりとモけとどりとモ しらぬ根のくに底のくにまで

かしたつきし父のみひとり先たてゝ はととそばから氣をやいたむる

\*明は祖の誤

\*淺草黒母町  
正覺寺の俗  
稱

しての山こへて七日になりぬれば　うちはなみだの川つかへかな  
 はてしなき涙やのりをこへぬらん　をひたるとしに不足なければ  
 とよのぶとかきし紅繪の摺物も　ふでのあとさへかたみとぞなる  
 らいせには蓮のうてなをつき置て　ふしんもいらすぐに極樂  
 月岑按、同時代石川豊雅といへる浮世繪師あり、一枚すりを見たり、豊信  
 が男賦。

〔只註本〕又曰、柳島春慶寺普賢堂の額に歌川豊春七十一の畫に豊信補畫と有り、此豊信にして豊春は門人なるべし、尙可尋。

〔故〕石川 豊雅

\* 此時代に壹枚繪あり、豊信の男賦。

\* 寶曆頃

春川 師宣

寶曆の頃の浮世繪師なり、其傳詳ならず、菱川師宣の筆意に似たれどもいたく筆

劣れり。

繪本列仙畫典 二册

長谷川光信 大坂

是又同斷、士農工商。  
\* 享保之頃

【新】梅峯軒永春と號す、又松翠軒

英勇畫譜 尾張、名古屋 永樂屋版 一册

【故】日本山海名産圖會

繪本御伽姿名鑑 三册

繪本武勇力帥 三册

倭繪英雄鏡 二册

【故】寺井重房

浮世漫畫 三册

繪本あくぼのちり 三册

繪本家寶御伽 三册

\* 守國の條  
「町繪なれ  
どもよの浮  
世繪なら  
す」を指す

長谷川光信同時の人なり、其傳を知らず。

畫本勇名艸 三册

繪本國見山 三册

【増】鳥山石燕 俗稱□□ 豐房

鳥山石燕は一時の聞人なり、繪本あまた出せり、委き傳追て考べし。

【新】名豊房、狩野玉燕周信の門人なれど浮世繪に等しき畫也。塵塚談に寶曆の頃、淺草觀音堂の中、定香爐の脇なる柱に歌舞妓女形中村喜代太郎の狂言之似顔を長サ二尺四五寸、幅八九寸の額に畫て奉納せしを諸人珍敷事に沙汰せし也。【只繪本】門人氷川社に樊繪門談、湯しまに草摺引、雜可々谷鬼子母神に大森彦七等の額あり。

【増】繪本百鬼夜行(三篇迄) 十五册

【新】繪本比類 【只繪本】

【増・新】水滸畫潛覽 三册

【新】鳥山彦 彩色摺  
貳册

或云此時ふきはかしの板行を始とせしと云安永三年板也彫工藤文堂東英摺工鶴葉雨亭とあり

【故】石燕畫譜 一册

畫圖勢勇談 三册

【追】岷 江 【新】橋姓

【故】名正敏、號玉樹軒

【追】寶曆明和の比、【故】(元縫箔師、後浮世繪師となる、五文字點式、おほく此人の畫なり)職人畫繪本に摺込の彩色を工風して大に行はる。

\*正しくは  
畫職人部類

【新】山本義信

俗稱平七郎、江戸の住、寶曆年中の人也。

【二本】烘按、淡嶋系圖の狂言本【故】青本【二本】を畫く、寛延寶曆の間。

【追】月岡丹下 【増】(天明六年の頃歿、年七十七歳) 俗稱□□(浪花

人なり、江州の産)【新】本姓は木田氏

【追】名昌信、號雪鼎、一號信天翁、高田敬甫門人。【新】(敬甫號竹隱齋法眼に敘す、初め畫を狩野家に學び後一家をなす。元江州日野藥店なり、寶曆中歿す八十歳)

【追】天明六年終于大坂、春繪の名人、又印刻の畫本多し。



【舊】按るに丹下彩色の春畫大巻物を見たりしが、妙手なり。

【故】安永四年板本浪花郷友録に月岡丹下隠町心齋橋に住すと有り。

【新】繪本<sup>\*</sup>源氏物語 三册

同蘭奢待 五册

同姬文庫 五册

\*刊本新増に  
よる

同諸禮訓 三册

同諸禮教訓文庫 五册

同深見草 二册

同和歌園 三册

同和歌園詞の花 五册

同太平樂 三册

同名取川 三册

同武者競 二册

同武者園 三册

同勇見山 三册

同源氏山 二册

同百將全傳 五册

同操艸 三册

同富士牧狩 一册

同壽艸 三册

同宇治渡 三册

同女武者勇姪競 三册

同高名二葉艸 三册

浪花往古圖

繪本東國名勝志 五册

汝月百人一首 一册

古今百人一首

歌仙掛 一册

寶曆十一年正月版

勝川春章 勝川春水門弟 人形町

明和の比哥舞妓役者似顔名人 又勝宮川氏とも

是も明和の比哥舞妓役者似顔をゑがきて大に行わる、〔世〕寶曆十一年五人男の繪をはじめとす、其比、人形町林屋七右衛門といへるもの方ニ寓居して、畫名もなかりしかば林屋の請取判に壺の内に林といふ文字ありしを押たり〔曳〕押手とせり、人呼て壺〔曳〕ゑといひ弟子春好を小壺といふき、武者繪をも能く畫し也。

〔三〕三馬按、春章號旭朗井、一號酉爾、俗稱祐助、書畫をよくす、門人數多あり、傳及系圖等委くは別記にあり。

〔新〕始勝宮川と書す。李林春章と書るも有秀鶴の似顔を能く書たり此頃の役者繪は細長く長き縞繪のもの多し。キメ繪といふ也。又嵩谷にも學びて二蝶風の草畫を畫しと云、寛政四年十二月八日歿す淺草西福寺に葬す。

〔世〕法名 勝譽春章信士

碑の右側に辭世彫付あり

枯ゆくや今ぞいふことよしあしも

【新】此時代より彩色摺大にひらけ板木師摺師共に精巧を極めしかば吾妻錦繪とて海内の名産とはなりぬ。

繪本百人一首 彩色摺箱入本  
雁金屋板

同威武貴山 三册 武者畫本

同舞臺扇 役者似顔  
彩色摺

同夏の富士 役者素顔の似顔畫、近由五護  
亭園に同名の畫本を畫けり

【曳】小松屋 俗名三右衛門後  
百龜「ト云」

【曳】明和の比大小のすり物の繪多く小松屋の書る也、西川氏の筆意を學びて春畫をかけり、元飯田町中坂藥舗也。

【新】鹿子餅落咄し本大に行わる。

鈴木春信 西村重長門弟

名人

【増】(明和頃の人なり)【故】本姓穂積【増】(居住兩國米澤町角)號湖龍

齋(江戸産なり西村重長門人と云)

【増】鈴木春信は浮世美人畫に名ありて一時の名人なり。吾妻錦繪と稱するもの  
祖とす。實本小本の差違等多し。此頃の畫本は細かき麻の葉の表紙に紅唐紙の外  
題をはり、袋入なり。

明和のはじめ、吾妻錦繪を畫出して、今に是を祖とす。是  
は其頃、初春大小【鬼】(の)摺物大に流行して、五六へん摺初メ  
て出來せり。【鬼】(夫より)工夫して今の錦畫とはなれり。春信一  
生歌舞妓役者の繪をかゝすていはく、我は大和繪師也、何ぞ  
河原ものゝかたちを畫くにたえんやト也。其心ざしかくのご  
とし。明和六年の頃、湯島天神に、泉州石津笑姿なみすの開帳あり  
し時、二人の巫女みめよきをゑらびて舞しむ。名をお浪おミ

\*湖龍齋と春  
信とは別人  
なり

\*初期の作に  
役子繪あり  
必ずしも此  
處に云ふ所  
の如くなら

つといふ。又谷中笠森稻荷の前なる茶店かぎやの娘おせん、  
浅草地内楊枝屋娘柳やおふじの繪を錦畫にゑがきて出せしに、  
世人大にもてはやせり。

【新】明和七寅年六月十五日歿す。繪木板刻のもの多し。

【増】小本畫本春の雪 【新】三

【増】同武の林 【新】三

【増】同春の友 【新】三

同花かつら 【新】三

【増】同千代の松 【新】三

【増】同春の錦 【新】二

【新】同いろは歌

吉原美人合 彩色摺  
遊女句あり

【新】繪本江戸土産

【新】二編 初編は西村  
重長筆也

【増】かさもりおせん、

飴賣土平も一時のものなり、

銀杏のおふじといふは淺

【増】同さゞれ石 【新】三

【増】同浮世袋 【新】三

【増】同入丁代草 【新】三

同古錦欄 二

【増】繪本諸藝錦 【新】三

草なり。

【三】三馬按に、此門人某橋本町に在て二代目春信となる。後年長崎に至り、蘭畫を學びて、再び江戸に歸りて大に行る。所謂司馬江漢是也。元祖春信の傳并鏡畫の事等別記に記せり。

\*眼鏡繪の事か

【世】吉川 定好

春信同時の人、一枚繪あり。

湖 龍 齋 兩國やけん堀

右同斷、<sup>\*\*\*</sup>後に浮世繪をかゝす、下手。

【三】三馬按、湖龍齋姓ハ磯田 【世】名正勝 【三】俗稱庄兵衛小川町土屋家ノ浪人ナリ、傳委クハ別記ニアリ。

【新】西村重長の門人となり

\*明和頃をさす

\*同斷は前  
の一條にあ  
る「男女風  
俗舞妓役  
者畫ともつ  
たなき方な  
り」の句を  
受く

〔増〕東都藥研堀の隠士と畫名を記せり。

按るに、錦繪を細長くつぎ、吉原遊女畫などをゑがきて表具し、俗に柱かくしと云、聯の如くにしたる繪多し、此頃専ら流行せしものなるべし。〔新〕後法橋となる。

混雜倭草畫 三册 板本なれど願筆力見ゆ

### 一筆齋文調 龜井町、

明和の頃

男女風俗歌舞妓役者畫ともつたなき方也、二代目八百藏似顔を能くす 〔増〕<sup>\*</sup>石川幸元門人 〔新〕<sup>\*\*</sup>門人に岸文笑といふあり。

〔故〕菊川秀信

101 明和頃の人なり、細繪あり。

\*此條浮世繪  
編年史に依  
る  
\*\*繪及び  
此名ありに  
歌名を頭光  
と云ふ

柳文調\* 日本はし南油町

右同断、二代目十町似顔をよくす、豊後節常盤津朝

太夫弟子にて淨瑠璃をよく語、上手。

【三】三馬按、柳文朝門人(に)文康あり、俗稱安五郎人呼て文康安といふ、老人にて今尙存す。

【故】號南龍齋、住居通油町南新道或は南油町ともいふ。【無】狩野流の畫を學び浮世繪をかけり。【境】明和の末より寛政の比。深川靈巖寺に碑あり。

【境】珠雀齋 (年曆姓氏未詳)

【境】始系、一實に正似顔畫書 珠雀女齋

【新】よく役者繪の似顔を畫く。

\*朝の誤  
同時は明和  
の比

\*同断は前  
調の筆藝文  
る「男女風  
俗舞妓後  
者畫ともつ  
り」をさす



【増】鳥居清長 寶曆より見え文化年中歿す

俗稱 市兵衛又新助 【新】父を白木屋市兵衛とて新場の燗草店寺本  
某の家守をつとめて本屋を業とせり 【増】關氏、江戸産、本材木町  
一町目に住す。

【増】鳥居市兵衛清長は鳥居三代目清満の門人也、近世の名人にして江戸錦繪の祖  
といふべし。始菱川の如き昔繪の風俗なりしが、中頃より畫風を畫替一家をなせ  
り。師清満の實子畫を不學、姑く芝居看板畫を相續せり。【新】一説に三代目清満  
男なくして一女子あり、此女子に聲をとる上繪師にて松屋龜次といへり、五代目  
清峯は龜次の男也といへり。【増】彩色摺畫本、浮世美人錦繪世に行れ、彫しく彫  
刻せり、枚擧するに遑あらず。【新】元祿寶永以來右に出る者なし。

【只臆本】按ずるに婦人の衣類に藍さびのかたびらへ下着の透通りたるさまを  
彫刻摺方の工夫をなせしも清長がわざなり、武者畫殊に巧みなり。【新】清長  
より錦畫彩色委しくなりし事也。

【増】繪本物見々岡

三冊

【新】江戸名所  
繪本也

【新】同武勇金剛力士

【三】三馬按、清長俗稱新助ニ非ズ、市兵衛ト云ヘリ。

【故】北川 豊章

安永頃よりの人、鳥山石燕の男なり、小本等に差繪あり。

\*此の説非なり、石燕の男に非ず、歌麿の前名也

【故】中村 慶子

歌舞妓役者女形中村富十郎なり、豊を善して英慶子と豊名す、安永三年の評判記に極上々吉立役は上々吉市川海老藏と並び有。俳優にて板刻の豊本有は珍らし、故に姑く爰に擧ぐ。

【故】慶子 豊譜 一册

門牛齋秋童

安永頃の人、青本あり。

谷久和

同前\*

芳川友幸

安永頃の人、青本多く畫けり、友幸は自畫作の物多し。

笑丸

奥秀

共に此頃の人歟。

歌川豊春

明和之頃より寛政の上手

西村重長門弟 芝神明三島町

近來うき繪を錦繪に書出せり、寶曆の比のうき畫に(曳)増れり、  
日本はしニ住ス。

\*安永頃の人、  
青本あり

\*笑丸の誤か

\*安永頃

〔増〕歌川豊春（安永より文化の間、享年七十餘歳にて歿す）〔三〕三馬按、號一龍齋  
俗稱庄二郎イ三 但馬屋と云傳有別記にゆづる 〔増〕（居始は芝三島町、後日本橋・落

髮して赤坂田町に住す）〔只説本〕江戸の産也

石川豊信、編年史

〔増〕豊春は始め□□門人なり、後流行の風俗を畫き一家をなす、〔故〕抑歌川家の

始祖なり。〔増〕操芝居の看板畫をかき彩色に委し、寛政の比、日光山御修復の節、

彼地職人頭を勤めしとぞ、此人浮繪〔新〕浮繪といふは關畫の俗に油繪といふものに比して畫る畫景の山水を錦繪に横に畫しなり。の妙

手なり、横にかきし錦繪など多し。

〔増〕但、草双紙の類は多くかゝず、（弟子に高名の者多し）。

按るに、土佐結城の操座の看板は、此人の筆にて毎度評判せられ、珍敷圖取をか

きしと云り、其後春英も是に次て劣らざるものなるべし、今は春徳が筆なり、春

高〔新〕も一兩度見しことあり。

〔新〕月岑子按るに柳島春慶寺普賢堂の額＊に豊春七十一の畫に豊信補畫とあるもし

くは石川豊信の門人にや尙尋ぬべしと有り。

〔新〕押上春慶寺碑

\* 一日蓮上人  
龍口、即華  
關、安政二  
年大破し大  
正十二年、繪  
失す（浮世  
繪界）三  
參照）

\*文化十一戊春

行年八十才  
元祖歌川昌樹

歌川妙哥

花は根に

名は櫻木に

普賢象

のりのうてなも

妙法の聲

二代目 歌川 豊春

歌川 貢

大野 規行

歌川 豊秀

歌川 豊國

歌川 豊廣

【新】后年豊春と名のりし者あり文政の頃なりし。【故】血脈の者か。其後輩名を不見。

【新】京師板行の讀本に歌川豊秀と云者あり、豊國の門人なるか未詳。

【新】車僧轍物語 甲賀三郎巖物語 聚義雜法談等也、尤も拙なし。

\*新増の記載  
を浮世繪編  
年史により  
て訂す

【増】法橋關月（天明より享和年中）俗稱□□大坂人なり、姓藤 法橋に斂す。

【三】三馬按、伊勢【新】參宮【三】名所圖會【新】（八冊）【三】は月岡丹下門人法

橋關月が筆なり、關月は高手の畫工なり、山海名産圖會と此書とを畫き、壯年にして歿す、惜むべし。

【新】名は德壘字は子温、【故】又阮。通稱原二

【故】始め月岡雪鼎の門に入て學び、又後和漢の畫法を學んで人物山水に長じ一家をなす。又詩書を能くせりと。郷友錄に住所は堂嶋中二丁目と有。寛政九年十月二十日歿す。歳五十一歳。

【新】語 關 牛

【増】關月が實子、天保中大坂に住す、【新】畫をよくし、又刻本の文を筆耕なせるありといふ。

【故】名は德風、字は子偃、夷揚齋と號せり、讀本を畫けるもあり。

\*享和より以前寛政九年に歿せり。  
\*俗稱原二郎。  
\*此の條一本になし。

\*德壘の誤

竹原春朝 大坂

これ又山城名所記、大和名所記、伊勢參宮記等を出す。上手。

\*名所記は名所圖會の事也。

\*天明より寛政

【新】竹原春朝齋〔菽〕本氏松本〔新〕名信繁、浪花の人なり、〔菽〕師春〔新〕汐齋といふ。

\*坂本春汐齋  
誓卜門人。

【新】一派の名人也。

【増】秋里籬島と交り深く、五畿内及諸國の名所圖會の刻本を多く出せり。

【新】都名所圖會

大和名所圖會

和泉名所圖會

攝津名所圖會

寄合書

【新】竹原春泉齋

【三】三馬按、春朝齋の男春泉齋あり、父に繼て名所圖會を畫く。

【新】二十四輩順拜圖會 前編

東海道名所圖會

寄合  
書載

八百屋  
お七 胡蝶の夢 五册

【故】赤松亭秀成

天明より寛政頃の人、其傳を知らず、錦畫あり。

勝川 春湖\*

春章門弟【新】安永頃より寛政頃の人【増】(明和よ

\*湖は湖の誤

り文政までの△後俊朝と改む、號吉左堂【故】東紫園、中林舎。

鳥居清長の筆意をよく似せたり。【増】錦繪また草双紙多し。

【三】三馬云、春潮浮世繪を廢して後俊朝と改む、吉左堂と號す、文政四辛巳年今尙存す、長壽の人なり、傳は別記に録す。俗稱吉左衛門と云。

【新】役者繪もあれば春章門人歟。

榮 之

遊女の姿繪を寫事妙也、錦畫多し。

榮之門弟

榮里

同  
榮昌



重政は近來錦畫の名手也、男女の風俗武者繪を畫、刻板の文

【增】姓藤原時富、號治部卿、鳥文齋（始濱町後本所割下水佳）。【世】御小納（戸）役

を勤任せし人なり。【增】天明より寛政の間浮世繪の風俗を能寫して錦繪に傾城美

人畫多し、専ら世に行る。【只讀本】慶阿彌老人の話に鳥文齋と號る事は榮之もと

狩野榮川の弟子にてありしが浮世繪を畫きし后文龍齋にも學び鳥居風の浮世繪を

もしたひしかば鳥居の鳥と文龍齋の文の字をとりて鳥文齋と號せしよしいへり。

按するに萬師北齋が畫風を學びしと見ゆるもの多し。

【增】門人榮理、榮昌、【新】榮笑、【世】榮龜、榮水【增】其他多し。後故在て姑く筆

を止む。狩野派の筆意を學んで今猶彩色繪多し。【只讀本】狂畫の繪

卷數多しこのれり。

北尾重政 大傳馬町貳丁目又根岸【新】大塚村ニ住ス。

明和より 名人 俗名左助

紅翠齋、花藍トモ

\*榮之はもと  
旗本なりし  
が寛政元年  
致仕し元文  
十四年七  
政十四歳に  
歿す（浮世  
繪界三ノ七  
參照）

字を能くかけり。

【増】本姓北畠（江戸の産なり）

【増】北尾重政は「新」始め書林須原屋茂兵衛が家に勤し奉公人也、須原屋が本店紀州にあり。その所の地名を北畠と云が故に茂兵衛が姓も北畠とす。重政も又同姓を用ゆといふ。【増】書畫ともに善す、就中板下に妙なり、武者畫花鳥に委し、【無】（壯年の頃は鳥居風の畫をかけり、其時代はすべて鳥居風を慕ひしなり）。【増】近來江戸書肆繪雙紙問屋藏板の庭訓、或は往來物、百人一首法帖の類【貝讀本】（悉く翁が筆なり）【増】又曆の板下は重政老年迄も書きし也。板下の筆耕は、其比三都に重政が右に出るものなかりし。

【新】文政二年二月卒す、八十一歳。

【増】花鳥の寫眞、武者畫本【無】（軍談）<sup>十【新】</sup>數百部を筆す、錦畫雙紙の繪尤多し、【無】名手の一人と云べし。

【増】繪本子育草 小本 三册

同響の魁【新】三册

同江戸詩 江戸名所 三册 狂歌人

\*「江戸詩」と「詞の花」は部作の誤か

同鏡草 三册

同四季交加 二册

泉親衡物語 五册 二代目  
鬼外作

【故】狂歌百人一首

菅聖廟御傳記 五册

繪本八十字治川

繪本武將略傳 三册

繪本百福壽

武者鞋 二册

繪本淺むらさき 二册

\* 同詞の花 二册

近江縣物語 六册 六冊編作  
六册忠臣水滸傳 十册 十冊  
京傳作

吉原美人姿繪 三册

繪本高麗嶽 三册

繪本武將一覽 三册

繪本武將記錄 三册

繪本嬉見童 三册

繪本さかへ草 二册

\* 同吾妻袂 三册 三冊狂歌本  
年中行事安積沼 五册 五冊  
京傳作

繪本藻蘭草 二册

簞  
合盤

【繪】後年【後】（文化の初頃か）二代目北尾重政と稱せる者は美丸と言し人なり。（新乘  
物町の川岸、俗稱□□）【貞誠本】その業いたく劣れり、式亭柳郊といへるも初代重  
政の門人也。

## 戀川春町 俗名 倉橋壽平

明和より天明

小石川春日町ニ住、勝川春章の名をもちり繪も又一流、雅也、草双紙數多、しやれ本等有り、當世大通人の姿を草双紙に書出せし初の筆者也、書する所おかしき姿のみ當時の通人か。

【三】三馬按、二代目戀川春町と唱たる畫工ありしが、近年改て二代目歌麿となる。倉橋春町と歌麿と共に鳥山石燕門人なり。

\* 明和の頃より天明の頃まで。天明（じ）病死。鱗形屋孫兵衛方の草双紙を畫直し、作の風を改るは此人也。松平丹後守家中。繪も又一洗新なり。

【新】名は格、字は壽平、壽山人と號す。松平丹後侯の留主居也。自畫作の滑稽畫本あり、狂歌を能す狂名酒上不埒といふ。

【只誠本】只誠云、初代春町は寛政元年七月七日歿す、市ヶ谷淨覺寺に葬す。【故】法名、寂靜院廓譽湛水（居士）【只誠本】辭世時。生涯苦樂 四十六年 即今脱却

\* 此の條一本  
になし

\* 井上氏の  
「浮世繪師傳」には或  
處に作る

浩然歸天

古朽木 五册 喜三二作

喜多川歌麿 神田辨慶橋久右衛門町

俗名勇助 名人

はじめは鳥山石燕門人にて狩野家の繪を學ぶ、後男女の風俗を畫て繪草紙問屋蔦屋重三郎方ニ寓居す、錦繪多し。今辨慶橋に住居す。千代男女風俗繪種々工夫して當時双ぶ方なし、名人。

【繪】居始辨慶橋、又久右衛門町、後馬喰町三丁目、號紫屋〔無〕（江戸ノ産也）〔繪〕自云、生涯役者繪をかゝず、劇場繁昌なるゆへ老若男女眞眞の役者あり、是を畫きて名を弘むるは拙き業なり、何ぞ俳優の餘光を假んや、我は日本繪師な〔無〕（り）【繪】浮世繪一派を以て世に名を轟すべしと言ふなり。其意に違はず、其名海内に聞ゆ、一豪傑と云ふべし。

因云、清朝の人歌麿が名を知て、其商船より長崎の人へ多く錦繪を求たり、唐までも聞へし浮世繪の名人なり、殊に春畫に妙を得たり、此人淺草の水茶や難波屋おきたの姿繪を出せり、かさもりおせん、をぐらやおふじ、なにはやおきた、三人狐拳の繪あり、繪本太閤記の圖を出して、姑く咎めを受たり、獄屋に入しが、出て間もなく病死す、おしむべし。

文化年間、奥州岩城より來れるものあり、此人浮世繪を好む一癖あり、元江戸の者なりしが、業なりはひを旅中にのみし、南部、出羽、加賀、能登に往來す、其比江戸にては一陽齋豐國の役者畫専ら行はる、此人云、遠國他郷に往ては、江戸繪の名人は歌麿とのみ言て、豐國の名をしる人は稀にもなかりしと云り。  
 【無】(流行の役者繪は白雨の降が如し、其用る處のみなりし) 【増】歌麿が高名なる、是にてしるべし。

役者繪に、市川八百藏が一世一代、おはん長右衛門の狂言をせし時、桂川の繪評判にて求ざる人なかりし、歌麿は美人繪にておはん長右衛門道行の繪を出して是に贊を書り、近世浮世繪かき、蟻の如くに這ひ出し、むらがるる趣

を悉く嘲弄して書たり、今藏する人多く有るべし。

歌麿に門人多し、浮世繪のみにあらず、花鳥虫魚寫眞等、精巧細密の彩色摺畫本多し、此人の傳に奇説多しといへども、委しくは別記にしるす。

吉原年中行事さいしき摺二册（十返舎一九狂文入）

繪本百千鳥（極彩色狂文入）

同虫撰（極彩色狂歌入）

【新】同駿河舞 三册 江戸名所狂歌入

【故】繪本和歌夷 一册

繪本吾妻遊 三册

繪本詞の花 二册

繪本數寄屋笠

潮干のつと 一册

繪本銀世界 三册

【繪】其他枚舉するにいとまあらず世の知る所なり。【無】新増ナシ歌麿云吉原年中行事は大に流行す、【繪】作者十返舎一九が云、吉原年中行事は吉原の事を委しく書し文章故に行はれしと云ければ、歌麿は繪組ゆへに行はれしと、互にあらそひ、大に取合となりし事ありしとぞ、是を以て其氣質を察するに、大にはこりし人なりとみ

ゆ。歿前繪雙紙間屋云あはせ、歌麿此度は必ず病死すべしとて、各錦繪の板下を頼み込、夥敷書物なりしとぞ、其比は外に畫者なきが如く、錦繪の板下をのみさせたりと、或繪双紙間屋の老人ものがたる。

【三】三馬按に哥麿門人菊麿今月麿と改む。式麿秀麿等あり。二代目歌麿初驛春町、別記に傳あり。

歌麿門人 行麿 千代女 畫神史畫

## 寫樂齋 【五】東洲齋寫樂

【新】俗稱齋藤十郎兵衛、八丁堀に住す。阿州侯の能役者也。

これは哥舞妓役者の似顔をうつせしが、あまり眞を畫かんとてあらぬさまにかきなせし故、長く世に行はれず一兩年に而止ム。

【五】しかしながら筆力雅趣ありて賞すべし。



【三】三馬按、寫樂號東周齋、江戸八町堀に住す、はつか半年餘行はるゝ而已。

【無】五代目白猿 幸四郎（後京十郎と改）半四郎 菊之丞、富十郎 廣次

助五郎 鬼治 仲藏の類を半身に畫たるを出せし也。

【新】<sup>\*</sup>回<sup>キ</sup>り雲母<sup>カ</sup>を摺たるもの多し、俗に雲母繪と云。

\*刊本「新増」による

## 勝川春英 春章門弟

【菟】俗稱久次郎【増】（住居新和泉新道）號九德齋

初め春章門人なり、後一家をなせり、武者繪に妙を得たり、寛政享和の比、専ら錦繪多く發行せり、操芝居の看板畫をかけるは世の知る處なり、自然一家の筆意をあらはし、畫道の妙を得たることは一蝶嵩谷に四敵すべし、然るに生涯浮世繪に終りしはおしむべきことなり、又一流の狂畫をかきて九德風と云、彩色摺畫手本、武者畫手本、繪箋紙數種あり、近世の名人にて春章歌麿も不及處多し、初代

119 豐國は此畫風を本學びたり、【新】文政二年己卯七月廿六日歿す五十八歳、淺草本

\*十の誤

願寺中善照寺に葬る。

〔繪〕繪本弓袋

〔新〕芝居訓蒙圖彙

式亭三馬作

〔繪〕忠臣藏十一段續の屏風、火事場火消はたらきの畫卷物、其他人の畫かざるものを多くかけり、因云、麴町なる山田某に逗留して屏風繪卷物を畫けり、畫法に奇巧ありし人にて、古きをたづねて新しき圖を工むこと妙なり、又儀太夫節をよく語り、三絃をもよくひけり。

〔故〕畫きし額、深川八幡に有。世に名高し。淺草寺に爲朝素盞鳴尊の額。柳島妙見に清正に虎の額、其外猶有べし。

\*今は皆無しと云

牛島長命寺に碑有。六樹園の文なり。上に勝川春英翁略傳と有。

久徳齋勝川春英翁は、大江戸和泉町の人なり、世々聞へたる繪師なることは、人の知る所なればいわず、父は磯田次郎兵衛といふ、母は某氏とか、はやう勝川春草子が弟子となりて、それが氏を繼ぬ、子二人あり、女子は先ちてうせぬ、男子は斧二、今世にあり、翁明和五年戊子に生れて、文政二年己卯十月廿六日、年五十八にて身まかりぬ、淺草本願寺なる善照寺に墓あり、翁本性すなをにて、飾る

こといみきらひて、いづこへ行にも、けの服のまゝにて出でぬ、かくてはみぐる  
 し、かさねてはうるはしき衣きて來り玉へと、あそびがいふをきよて、後の日、  
 又かしこに至りぬ、出あへるものぞ、うちたふれて笑ふことがぎりなし、翁猿樂  
 の裝束、ことにきら／＼しきをうち着て、まめだちをりて、みづからは、をかし  
 とも思はぬけにてぞ有ける、ある時ころを過して、家に歸りきて、とのかたにた  
 ちゐて、いかに春英のやどりは是れかと、たかやかにいふを、妻をどろきて戸ひ  
 きあけていれつ、何とていまのほど、きは／＼しくはのたまひそといへば、目を  
 へて歸りきたれば、もし此家あだし人の物にやなりぬらん、さては寢内せではあ  
 しからんと思ひて、さは云たるなりと、すべて翁のしわざ、願長康の風ありと、  
 皆な人はいひけり、おほかた江戸繪となへて、木にゑりてすりたるものは、翁  
 の右に出るものなしとぞ、北尾何某はいひけり、翁なくなりて、七とせになりぬ  
 とて、まなびをうけたる人々、かたらいあわせて、かくさまの石を立てよ、おの  
 れをして、聊なるつたへことをしるさせつ、あわれかかる人の、むそじにもたら  
 で、をわりをとりぬる、かへすがへすおしみて、おしむべきことなりかし、

背面に春  
 徳・春重・  
 英策・英草・  
 春幸・春景・  
 春陽・春勢・  
 春柳・春馬・  
 春雄・春和・  
 馬場氏の名  
 を影りたり

文政八年乙酉十月

六樹園石川雅望撰

【曳】歌舞妓堂【新】艶鏡

【曳】役者の似顔のみ書たれ共甚拙く半年斗行はる。  
けんせき

【新】寛政年中の人。

【世】紀 吉信

姓藤井、寛政頃の人、其傳を知らず。

政 演 重政門弟 京橋銀座丁

俗名京屋傳治郎\*

所謂京傳也、葎齋と云、しやれ本其外草双紙戲作に其名高し。

【曳】北尾政演（重政門弟、文化中歿す）俗稱京屋傳藏（住居京橋南一丁目）姓

\*傳藏を正し  
とす

岩瀬、字伯慶〔世〕酉星〔増〕本姓灰田〔増〕又號〔新〕甘谷、菊亭、醒齋〔増〕

醒々老人、號葎齋、作名山東庵京傳、初名甚太郎、〔無〕江戸深川木場之産〔増〕

〔兩國回向院に墓あり、淺草寺筆塚の碑銘、家弟京山人撰文〕

〔増〕山東京傳は書畫ともに善す、戲作に高名なること、世に知る所なれば愛に  
るまじ。

〔新〕文化十三丙子年九月七日歿す、年五十六歳。法名は知譽京傳信士と云。

〔世〕狂歌五十人一首 一册 吉原後日姿繪 一册

古今狂歌袋 一册

\*戲作者考補  
遺には辨譽  
智海京傳

政 美 重政子<sup>〔弟〕</sup>濱町へついがし

俗名三次郎

杉臯、後蕙齋と號。落髮して浮世繪をやめ一種の畫をなす。

〔増〕北尾政美(重政門弟文化中歿す)(居初小網町、後住吉町裏川岸、後お玉が池に

住す) 姓鍛形氏 號杉翠<sup>翠</sup> 後號蕉齋紹眞と改、政美近世の名人なり、狩野家の筆意を「新」學び、又光琳或は芳中が畫法を慕ひ、略畫式の工夫世に行れて「増」一家をなす「只誠本」若き頃切くみ燈籠あまた畫けり。吉原俄の圖、葛西太郎庭中の處、芝居の燈籠などありし。

「故」兒輩の玩ぶ組上燈籠は、元大坂のものなりし。夫故はじめは京の生洲、大坂の天滿祭の圖杯を重板せり。寛政、享和の頃政美多く畫けり。又北齋も續て畫けり。文化に至り、歌川國長、同豊久、此技に工夫をこらし、數多く畫き出せり。名所眞景の圖を寫すに工みなりしが、京の横華山が花洛一覽圖にならひて「増」東都の畫圖を委敷一と眼に見るやう、かくことを工風して、大に世人にもてはやさる。神田明神に其江戸畫圖の額を奉納せり。諸識の爲に畫手本となるべき物をおもた畫けり、近年繪手本は多く此人の筆なり、是より世に薄彩色摺の畫手本大に流行す、一時の聞人なり、「故」政美青本を畫くことは寛政八年に止む。

「増」略畫式(人物鳥獸山水花鳥草木六冊) 略畫苑 「新」草花略畫式 「故」一冊

「増」蕉齋略畫

諸職畫鑑 「新」一冊

蕙齋鹿畫

魚貝略畫式

繪本咲分勇者 二册

同大江山 二册

同會我物語 二册

同武隈松 三册

尊氏勲功記 五册

俳家奇人談 竹内文々、一編

【故】江戸名所東鑑 三册

東海道名所圖會

教訓鄙都言種 前二册

【繪】諸職  
雛形繪手本（此外刻本多くあり）

後松平越前侯の藩中に在て、板行發市の繪を止め、歛形紹眞と改め落髮す。

【新】文政七年三月廿一日歿す。

【繪】實子は赤子と呼ぶ【只誦本】（一號紹意）【繪】今猶越前侯の藩中たり、門人に美丸といふものありしが、故ありて政美の師重政が名跡を繼がしむ。但豊風は大ひに異りて、豊國が流なり、名を相續して反て絶るにおとれり【無】はかず。

窪 俊 満

龜井町に住、狂歌摺物の畫をのみかく、左り筆也、尤一枚摺大繪も出ス尙左堂と云。

【増】俊滿は狂歌を能す。

【三】三馬按、俊滿戲作あり、名を南陀伽紫蘭と號。青樓通油汚、玉菊燈籠辯、各小冊、其他草双紙四五種あり。

【新】俗稱易兵衛と云。始め畫を楫取魚彦に學ぶ、魚彦は下總香取の人也俗稱稻生強右衛門茅を建孟滿殿足に學びて劍を盡しと 魚彦より春滿といへる實名をあたへしが、勝川春章と天明二年三月歿す年六十歳也。いへる浮世繪師の門人と人の云をいとひて俊滿と改めしといへり、後浮世繪を重

政に學びて、狂歌摺物繪寫眞の畫に妙なり。

【註】兩國大平云、淺草黒船町權寺に葬。同人の長男及び孫安兵衛も摺物職となり我家へ勤めしと。

隴月夜物語 前編五册  
柳浪作



〔只誠本〕榮松齋長喜 始子興

鳥山石燕の門人<sup>\*</sup>にや詳ならず、北齋の畫風を似せたり。

〔按〕寛政享和より文化の始頃の人。青本を多く畫きたり、又此人筆耕せしものあり、門人に長松といふ有、錦畫有と拙し。

奈古曾闕

四册 鬼武作

### 勝川春好 春章門弟、長谷川町

哥舞妓役者似顔至てしんに上手。

〔按〕春章の門人にて小壺と云り、浮世畫役者畫多し。

〔三〕三馬云、春好早世にあらず、四十五六歳の比、中風を患て業を廢す、後年麻布なる善福寺に遁世して在しに、焉馬翁の需に應じて市川白猿の肖像を左筆にて畫たる事あり、其圖は今日歌白猿一首に見ゆ。

〔按〕二代目勝川春好は春扇なり、別に記す。

\*石燕門人  
猶浮世繪界  
三ノ二に極  
崎宗重氏の  
究群類なる研  
あり

## 【新】蘭 德齋 春童

【菴】寛政享和頃の人、名春道、勝川春章の門人なり、青本多く畫けり、此人中頃畫風變化せり。

## 【新】田 中 益 信

【菴】善辰齋と號す、自畫作の草紙あり、三馬云五代目栢庭の似顔上手なりしと云、兩國米澤町に住し、寛延頃より享和頃の人なり。

【自藏】補 龍神ソロヘト云稗史ニ三味線佐々木幸八太夫宮古路文字太夫トアリ、男ノマゲ高ク引上げ山本平七郎義信ノ畫ニ似タリ、鳥居家畫風ヨリハ古シ。

## 【新】古川 三 蝶

【菴】自畫作の草双紙あり。

## 【新】金 長

【故】此人も益信三蝶と同時なり。

【増】堤 等琳 號深川齋 雪山江戸の産なり【新】始深川に住す、後に

常盤町に住又米澤町川岸とも云。寛政より天保年間の人。

【増】叙法橋【只論本】惣髮也【新】三代目也。

【増】二代目等琳の門人なり、雪舟十三世の畫齋と稱す、一家の畫風骨法を立て、雪舟流の町畫を興せしは元祖等琳を以て始祖とす。安永天明の比より此畫風市中に行はれて幟畫、祭禮の繪燈籠にはこれをよしとす。當時の等琳は畫風筆力勝れて妙手なり。摺物團扇交張の板刻あり、仍て此に列す。【無】筆の達者尋常の板刻畫師と時を同して論じがたし。

【増】淺草寺に韓信の類あり、秋月と云しを三代目等琳と改名せし時の筆なり、今猶存す、雪舟の畫法には似ずといへども彩色骨法一派の筆力を以て名高し、畫く所の筆意、墨色の濃淡、絶妙比類なし。未だ京大坂に此畫風を學ぶものなし。門人あまたあり、繪馬や職人、幟畫職人、提燈屋職人、總て畫を用る職分のは、

皆此門人となりて畫法を學ぶもの多し。門人深遠幽微の畫法を會得せず、徒らに筆の達者を示さんとして師の筆意を失ふもの多く、其流儀を世に町繪と賤しめて職畫と云ふに至りしは歎かしきことなり。雪山は貝細工等種々の奇巧を造りて見世物としたる事あり、(大坂下り中川五兵衛籠細工の作なり) 諸堂社の彩色も多く此人の請負にて出來し所あり(堀の内妙法寺、土富店祖師堂、玉姫稻荷、其他多く見ゆ) 近世の一名工なり。

【新】文政中淺草寺境内にて茶番細工といへる見せ物を工夫して出せしことあり。

【増】法橋中和

【新】西村氏、【増】京師の人也、【故】佛光寺烏丸西に入町に住す、【新】刻本多く畫けり、字士達、梅溪と號す。【増】保元平治、又前太平記、源平盛衰記等名所圖會を畫く。【故】法橋に叙す、寛政より文政頃の人なり。

【新】紀州名所圖會

義經勳功圖會 十册 浪花山田敏雄散生作

木曾海道名所圖會 繪本年代記 五册

楠正行戰功圖會 野高散人作 十一册

【故】繪本曾我物語 十册

都林泉名勝園會 七册

【故】司馬江漢

春信門人にて二代目鈴木春信となる、橋本町に住す、學識も有し人にて、後年長崎に至り、蘭畫を學びて後再び江戸に歸り司馬江漢と名を改む洋學年表に曰芝に住せしを以て司馬と改しと江漢名は峻、字君岳、號春波樓、又不言道人、皇朝にて銅板を草創すること此人より初む、大に行れたり。文政元年戊寅十月廿一日歿す、行年七十二歳。

畫圖西遊談 五册

地球全圖略說 二册

江漢將に死なんとするに望み、自像一葉を畫き其上に辭世の歌をかき附たり、江漢年がよつたて死るなり浮世にのこす浮繪一枚。此畫像今は美濃大垣の醫師江馬活堂氏の家に存せり。

【繪】法橋玉山 (天明より文化の人) 俗稱□□大坂の人なり。【新】名

は尙友。【繪】姓は石田\*、法橋に叙す。

\* 阿田の誤

近世板刻【新】の【増】密畫の開祖なり。【故】月岡雪鼎の門人なり。一説謂月の門人と云。此説誤りなるべし關

月の筆意に倣て盡きしなるかと思はる。

【増】後一家の畫風をなす。著述の畫【新】本【増】尤多し。畫法筆

力の秀でたる事、古人に比類なし、名所圖會、繡像讀本數百部を畫く、京大坂の

板刻畫は悉く此人なり、一時の高名妙手と云ふべし。

【故】文化九年卒す、七十六歳。

【増】繪本太閤記（初篇より七篇まで）【新】各十二册【増】大に世に行はる

唐土名所圖會（兼葭堂板、【新】文化開板岡田玉山とあり、東野、熊岳と合筆、

勝れて【新】微細なり）

【増】三國妖狐傳

繪本玉藻傳談【新】【新】五册畫作共

【新】住吉名勝圖會 五册

繪本國姓爺合戰

二十四輩順拜圖會

後篇、前編は春泉齋の筆也  
後編は松島の隠最よし

繪本桶公記

繪本伊勢物語圖會

繪本琉球軍記

前編十册、宮田南北作

【増】其他枚擧すべからず世の知る處なり、門人多し。

【新】丹羽桃溪 名は元國

【故】靖中庵と號せり。大坂の人、上手なり、寛政より文化頃の人。

【新】河内名所圖會

蜻蛉の卷

【故】五冊  
粟杖亭(鬼卯)作

紙瀧重寶記 一冊

【增】勝川春亭 (寛政享和文化の間の人)

【故】山口氏、名長十郎 【新】號松高齋又勝汲堂 【故】戲墨庵 【增】(居和

泉町)

春英の門人なり、武者繪を善す、浮世畫役者繪一時に行はる、艸雙紙を多く畫く、繪本も二三種ありし。壯年にして病の爲めに業を廢し、其居所を知らず、惜むべし。

按るに、春亭は春英が高弟なるべし、世に發行する處の草雙紙繪、同時のもの多し。後に豊國の畫風を畫きて、役者錦繪も歌川風にかきしなり。

【新】歌舞妓年代記 馬馬作

昔語質屋庫 五冊 馬馬作

〔故〕風俗巫山夢 五冊 一九

常夏草紙 五冊 馬琴

初夢富士見曾我 二冊 馬琴

〔只賦本〕焉馬が編の哥舞妓年代記全部の畫尤丹精をこらしたると見へてよし。

## 豊 廣 豊國門弟

はりませ小サキ一枚摺墨繪などかけり。

〔三〕三馬按に、豊廣號一柳齋、俗稱頼の頭か勝次郎、當時芝増上寺片門前に住、寛政の末より草双紙を畫く、當時にいたるまで讀本の挿畫あまた畫がけり。傳は別記にあり。

〔繪〕寛政の末より文政十一年の頃歿す。江戸の産なり。始め豊春の門人なり、常に儀太夫節を好て三味せん尤妙手なり、後一家の畫風をなし、筆意雪舟、或は明畫の趣あれども、元より土佐狩野の畫風を學べり。草筆の墨繪を板行して張交畫とす、尤妙なり。草双紙敵討の讀物の繪此人より始り、初代南仙笑楚滿人の作なり、

\*享年五十六  
歳



世に行はるゝ讀本數十部を盡く。

【新】豐廣筆繪本枚擧して盡るにあらず、依て讀本のみ記。

俊寛鳥物語 馬琴作 十冊

旬傳實々記 同 十冊

松浦石瑰錄 同 三冊  
佐用姫

夢惣兵衛蝸蝶物語 同 十冊

括頭巾縮緬紙衣 同

朝比奈巡島記 同 三十冊  
【故】初より六迄

雲妙間雨夜月 同

糸櫻春蝶奇縁 同 八冊  
豊清合筆

松染秋七種 同 六冊  
情史

浮牡丹全傳 京傳作 四冊

繪本西遊記 二編、初編は東野筆にして尤もよし二編はいたぐおとれり

復讐御伽物語

鷺の談 京山作

【故】播州舞子濱 一九作、着色摺

馬の道草 二冊

盆石皿山の記 四冊 馬琴

江戸名所福茶番

桃茂流水 五冊 京山

【増】その筆力奇巧は近來同時の畫工に並ぶものなし。彩色畫も妙手なり。門人多し。

〔故〕向島堤に今の廣重の建し碑有。豐廣翁辭世を彫す。明治二十年四月建設せしなり。

死んで行く地獄の沙汰は鬼も角も跡の始末はかね次第なる

〔故〕古川〔新〕鬼玉

〔故〕明和頃の人畫本多し、其傳詳ならず。

繪本和歌海 三冊

繪本花見車 二冊

豐國 豊春門弟

寛政より享和

當時哥舞妓役者似顔の上手。

〔更〕錦繪をよくす、黒と紫斗にて彩色の錦繪を書はじむ。

〔繪〕歌川豊國政(無)(寛政より文化年中歿す) 俗稱熊吉(居始芝三島町、芳町、堀江町、

上櫃町川岸、油座に住す) 號一陽齋(江戸芝三島町の産なり、人形師を業とする

人の男)

初め豊春の門人なり、後英一蝶の畫風を學び狩野家の筆意を旨とす、浮世繪は玉山九德齋が畫法を慕ひ、一家の筆法をなす、一時豊廣と共に行はる、當世の風俗を寫す事に妙を得たり、豊國の畫、始ての板元は、神明前間屋和泉屋市兵衛にて(泉市と云)役者切畫なり、美人繪并役者似顔、此人より行はる、中興の祖と云べし。草雙紙合卷讀本錦畫數百部、世にもてはやせり。一流の畫風を以て江戸に雷鳴す、門人夥し。【只讀本】文政八年正月七日五十七歳にして終る、實彩靈毫(信士)と號す。三田聖坂功運寺に葬る。

\*弘運寺の墓

【增】一陽齋筆畫本彩色摺

畫手本 年玉筆

役者 合鏡

同此手拍【新】馬房作

【新】時世姿 女繪

似顔獨稽古

役者 三階興【新】三馬作

【新】同筆讀本

櫻姬全傳 京傳作 五冊

雙蝶記 同 十冊

稻妻表紙 同【故】五冊

【新】本朝粹菩提 同 十冊

安方 忠義傳 同 六冊

稚枝鳩 馬琴作 五冊

四天王剽盜異錄 同 十冊

三國一夜物語 同 五冊

阿古義物語 三馬作 五冊  
豐國貞刺筆

敵討松山話 寫馬作 六冊 四季物語 振替寫作 十冊 梅花氷裂 京傳作 四冊

【故】戲子名所圖會 三冊 馬琴

夕霜物語 六冊 京傳

【新】豐國粹善提の口繪に遊女を畫き、一枚の紙を上れば骸骨と成る圖を畫り、此圖杉田氏の解體新書を見て畫しは尤なれど誤て小兒の骨を寫す、笑ふべし。

【増】此人の傳多しと云とも、姑く爰に略す、別記に出す。文化文政の間、此人の似顔畫大に行はる。爰に於て豐國筆塚碑家額（柳島妙見境内にあり、門弟より建之）山東京山撰文并書なり。

【新】豐國筆塚碑銘

一陽齋歌川豐國本姓は倉橋父を五郎兵衛と云へり、寶曆の頃芝神明宮の邊に住し木偶彫刻の技業を以自ら一家をなせり。曾て俳優の名人市川栢筵の肖像を作るに妙を得たりき。明和の初こゝに豐國を生り、幼名を熊吉と稱す。性畫を嗜か故に歌川豐春に就て浮世繪を學しむ、依て歌川を氏とす。頗出藍の才あり。長ずるに及て俳優者流の肖像を畫に妙を得て生氣活動神在が如し。或又美人時世の嬌態、梓本彩筆、諸國流行し、華人蕃客も珍とし求む。茲を

以て一陽齋の號日の昇が如く、豐國の名一時に獨歩し、畫風自ら一家を成し、朱門の貴公子も師とし學ぶ。門人畫業の徒に於て良才乏しからず、實に近世浮世繪師の冠たり。惜哉一陽齋享年五十七歳にして没せり。時に文政八年酉正七日也。三田聖坂弘運禪寺に葬る。法名を實彩靈毫と云、遺愛の門人等も陽齋の義子今の豐國と量て亡師の遺筆數百枝を埋め碑を營み亡翁の友人等も爲に力を助け、櫻川慈悲成子をして余が蕪辭を需む、余もまた亡翁の舊識たり、故に固辭する事あたはず、其事を記て其乞に答ふ。

文政十一年戊子仲秋

狂歌室四方眞觀撰 窪世祥鐫

山東庵樵者京山書并篆額

【只識本】碑陰門弟並門々弟の連名あれど略す。

【新】豐國歿後出版なしたる追善の繪に辭世の句とて、

燒筆のまゝかおぼろの影法師

と記せるは他人の句にして辭世にあらざる事明か也。

\* 麗ともあり

\* 浮世繪編年史には之を出せり

追善肖像畫國貞筆并に讚。この月七日師たる人と長きわかれとはなりぬ、然るに喪にこもりしあさなみだとともに、すゝらばや粥の七種の佛の座

【増】或人云、豐國は其骨法豐廣に及ざる事遠し、畫法劣るといへども、流俗の眼を悦しむるに妙を得たり、劇場流行の時に逢るものなり。后年迄春畫はかゝざりしが、物故二三年前より數部の春畫を出せり。

【註】瀨川仙女追善集に豐國狂歌あり、

佛は泪の露に墨すりてかく似貌繪に残りおしさよ

【新】歌川豐秀

初代歌川豐春の門人也。

佐久間草偃

名は顯、字は叔徳、京師の人、畫を松村吳春に學び、法橋に叙す。文化十一年十月二日卒す。

【故】石田友汀

幽汀の長男なり、畫法を父に學びて能くせり。

【新】奥村文鳴

【故】姓は源名は貞章字は万禩、【新】京師の人、畫を應學に學ぶ、【故】名所圖會の差繪有。

【新】草偃以下は浮世繪師にあらずといへども何れも名所圖會のさし畫あるが故に爰に録す。

【曳】二代目 元春朗

上手

宗理

これまた狂哥はいかゝる等の摺物畫に名高く、淺草大六天神の脇町に住。すべて摺物の【曳】畫は錦畫に似ざるを尊ぶとぞ、寛

## 政十年年の頃北齋ト改ム。

【三】三馬按三代目宗理ハ初メニ宗ニト呼ベリ、後年俵屋ヲ改テ菱川宗理ト名  
ノル。

## 【世】春 朗

小にしきなどがあり、草双紙もゑがけり。

【三】又云、春朗ハ勝川春章ノ門人也。俗稱鐵次郎、後年破門セラレテヨリ勝  
川ヲ改メ叢春朗ト云。其後俵屋宗理ガ跡ヲ續テ二代目宗理トナル。後ニ故ア  
リテ名ヲ家元ニ歸ヘシ北齋辰政ト改ム、其名ヲ門人ニ讓テ雷震ト改メ、再ビ  
門人ニ與ヘテ戴斗ト改ム。是ヲモ門人ニ讓リテ當時ハ爲一ト改ム。本所ノ産、  
住居數多カハレリ。御用鏡師ノ男ナリ、委クハ別記ニシルス、門人枚擧スベ  
カラズ。

【増】葛飾爲一（明和に生れ寛政より天保の今に至る）幼名時太郎後讓二郎無名俗稱□□（居始め本所  
横網町后數十ヶ所に轉宅す、今淺艸寺前に住す）江戸本所の産なり、數號  
あり改名左に記す。

類考に、宗理  
と春朗と二人  
のやうに書き  
列ねたれども  
ともこれ北  
齋が初名にし  
て一人なり



【増】始めは業を勝川春章に受て勝川春朗と畫名す、故有りて破門せられ、叢春朗と云り。古俵屋宗理の跡を續て、二代目菱川宗理となりたる比、畫風をかへたれど（宗理の頃は狂歌の摺物多し錦畫はかゝず）未だ一派をなさず（堤等琳の畫風を慕ふ）亦門人宗二に宗理を譲り【無】（三代目宗理とす）【増】名を家元に返せり、千レ時寛政十年の末。爰に至り一派の畫風を立て、北齋辰政雷斗と改む、（一説北辰妙見を信ず、故に北齋と改めしと云。【無】其頃は東都に明畫の風大に行はれ、畫心有ものは唐畫を學ぶ事専ら流行す。俗に従ひて畫風を立しは世に出るの時なり。【増】後雷斗の畫名は重信にゆづる）北齋流と號し、明畫の筆法を以て浮世繪をかく、古今唐畫の筆意を以て畫を工夫せしは、北齋を以て開祖とす。爰において世上の畫家（俗に云本畫師）其畫風を奇として【無】（世俗に至る迄）【増】大にもてはやされ一時に行れて門人多く、高名の妙手と稱せらる。從來書を讀み學才あれば、戲作の繪變紙多く、草箋紙の畫作をも板行す、作名を時太郎可候と云り、叢春朗の頃は役者の錦繪を出せしが、北齋に至りて錦繪の板下をかゝず、歌ノ誤狂言摺物畫を多くかけり、錦畫の風なきを以て、悉く北齋の畫風を用ゆ。【無】（摺て奇巧なりし）

〔増〕但畫狂人の號は門人北黄にゆづる（北黄は板下をかゝず）。専ら畫狂人葛師北齋と畫名して雷鳴す。畫風錦繪草雙紙等の尋常にあらず、繡像讀本の差畫を多くかきて世に行はれ、繪入讀本此人より大に開けたり。（此頃畫入讀本世に流行す。畫法草雙紙に似よらぬを以て貴しとし、讀本畫とて別に一種あり、杏花園藏書浮世繪類考に云、北齋宗理は狂言摺物の畫に名高し、淺草に住す。すべて摺物畫は錦繪に似ざるを貴とす、と云）京師大坂より雷名を慕ひ門人多く學ぶ者ありし故、尾州名古屋を始めとして、京師大坂に至れども、匹敵する畫家絶てなし。板刻の密畫に妙を得當世に獨歩す、刊本枚擧すべからず。漫畫と題して畫手本を發行し、大に世に行はる、數篇<sup>\*</sup>を出せり（始板元江戸麴街角丸屋甚助なりしが、故有て后尾張名古屋永樂屋東四郎藏板となれり）再び名を門人に譲りて錦袋舎戴斗と改め、前北齋戴斗と云、（二代目北齋は本所の産なりしが、後は吉原仲の町龜屋と云茶屋なり、兩國回向院にて大畫布袋をかけり、錦袋舎名弘め書畫會あり、大畫は十六間四方、十八間四方、名古屋にては釋迦出山の圖をかけり）是をも文化の末、門人北泉に譲り與へて、前北齋爲一と改名す。門人に臨本を與ふるに違あらず、

\*北齋漫畫十  
三編あり

是が爲めに畫手本を板刻して數十冊世に行はしむ、生涯の面目は、畫風公聽に達して、御成先に於て席畫上覽度々あり、稀代の【新】畫仙【増】妙手と云べし。

板刻畫手本標目

北齋漫畫（自初篇至十三篇） 戴斗畫譜

櫛【新】喜世留【増】雛形【新】中形ノ  
畫本 櫛稽古【新】初編より  
四編 中本

【増】地文雛形

北齋畫鏡

北齋畫叢

一筆畫譜

畫本早引 二冊

三體畫譜【新】一冊

【増】爲一畫譜

北齋寫真畫譜【新】折本一冊

【新】畫本魁 一冊

武藏證 一冊

北齋畫譜 三冊

富嶽百景 三冊

畫本女今川 一冊

同庭訓往來 三冊

淨瑠璃絶句 一冊

隅田川兩岸一覽

二冊 彩色  
狂歌入

【増】畫手本數部枚擧すべからず、僅に其一二を爰にしるすのみ、委くは別記に譲る。

【新】讀本目錄

棒說弓張月 馬琴作 三十卷

新累解脫物語 同 五冊

墨田川梅柳新書 同 六冊

三七 全傳 南柯の夢 同 六冊

- 南柯後記 同 八冊
- 標園の雪 同 五冊
- 水滸畫傳 同
- 皿々郷談 同 六冊
- 假名手本後日文章 同 五冊
- 東嫩の錦 同 五冊
- 播供養 同 五冊
- 新田功臣錄 同 十冊
- 阿波鳴門 同 五冊
- 國字鶴物語 菟藥亭作 五冊
- 濡衣草紙 同 五冊
- 於陸<sup>ウチノ</sup>幸助戀夢盤<sup>ハシ</sup> 樂々庵 三冊  
桃英作
- 北越奇談 柳亭序文 六冊  
樞茂世作
- 山莊太夫 谷嶺作 五冊
- 敵打裏見葛葉 同 五冊
- 賴豪怪鼠傳 同 十冊
- 標紙模稜案 同 十冊  
藤井
- 忠孝潮來節 壽馬作 五冊
- 玉落穗 小枝繁作 十冊
- 松王物語 同 六冊
- 小栗外傳 同 十八冊
- 怪談霜夜屋 種彦作 五冊
- 勢田橋龍女本地 同三冊  
殊に密書也
- 雙蝶々白糸双紙 同 五冊
- 吹吹妹背山 振鷺亭作 六冊
- 飛驒匠物語 六樹園作 六冊
- 百合稚楚居廳 萬亭更馬作 五冊
- 繪本三國志

## 漢楚軍談

此外中本草双紙の類殊に多ければこゝにしろさず。

【増】傳に曰、爲一翁は曲畫を善す。(升玉子德利宮すべて器械に墨をつけて畫をかく、左筆も妙なり、下より上へ書き上ぐる逆畫をかけり、中にも爪にて墨をすくひかく畫は勝れて妙なり、筆にて畫たるが如し、畫く處をみざれば其實をしるべからず。【新】又俳諧を好み川柳風の狂句をよくす、【増】刻本の春畫をよくかけり、一派の風ありて情深し) 彩色に工風をこらして一派の妙を極めたり、總て惣身に畫法充滿したる人にて、一點の戲墨も畫をなさずと云事なし、稀代の名人なり。倭漢の畫法に委し、骨法自ら宋明の筆意ありて、尋常の畫風にひとしからず、眞を寫すに一家の筆法畫體悉く具るといへども、能其眞に似たり。(狩野流にても似て似ざるを畫法の第一とす。畫中不<sub>レ</sub>全して畫をなすを以て善とす) 自ら云、數年諸流の畫家に入、其骨法を得て、一派の筆法を試み畫道の業に於て會得せざることとはなしと云り。香具師の看板畫より劇場操の看板、油畫蘭畫に至る迄、往往新規の工風を出し、刻本の細密、定規引きの奇巧なる、一家の畫法を起せしは

尤妙なり。他郷に至るも畫者皆門に入て業を學ぶ、京師浪花は悉く翁の畫風を學びて名を改めずといへども、門弟にならぬはなし。(爲一翁轉宅すること一癖なり、數十ヶ所に住を替たり)浪花發兌の繪本を見てこれを知るべし。紅毛よりの需に應じて二三年の間數百枚を送りしに、蘭人も大に是を珍重す。然るに故有て是をば禁せられたり。天保の今に至るまで六十餘歲筆法少も衰へず、老年に及びて彌筆に潤ひあり、近年錦繪を多く出せり(諸國山水、花鳥盡し、三十六富士、百鬼夜行、【只誠本】張交畫【増】琉球八景、【只誠本】諸國瀧廻り等其外色々の珍畫ありしと云ふ)【増】肉筆彩色は他に勝れて見事なり。別に爲一翁が畫傳を誌す、委しくは其書を見るべし。

【只誠本】只誠按ずるに群馬亭と號せる狂歌の摺物を見たり。是は文化の始なるべし

只誠云、爲一翁宅を轉ずる事一癖なり、數十ヶ所一ニヶ月斗して易る事幾度といふを知らず、予がまみへし嘉永元申年なり、其居聖天町に住めり、是迄に九十三度目と云き、于時嘉永二酉年四月十三日九十歳にして葬す。淺草八軒寺町普教寺に埋す。法名南惣院奇譽北齋信士

辭世。 人たまで行氣さんじや夏の原

【故】二代目歌川豊國

號後素亭又一瑛齋と號す、本郷春木町に住す、俳優似貌繪美人繪等有、讀本はか  
 かず、元祖豊國の門人なり、後に師家の養子となる（豊國の實子と  
 ならずは非なり）後豊重と改む（一説初  
 豊重と  
 いひ）上手にて有しが早世なり。明治四、五年の頃二代目豊重と畫名ある錦畫を見  
 たり、何人か知らず。

【新】歌川豊清

俗稱金藏、豊廣の實子也。【故】父の業を繼ぎ畫道に志し深く、【新】父並に豊國に  
 學んでよくす。【故】文化八年十六歳にて東西庵南北が作の合卷、女合法戀執行者  
 を畫く、是初筆なり。此年豊廣が師豊春より豊清と畫風（名か）を送られしなり。【新】錦  
 繪草雙紙等多く、讀本一二部あり。上手にてありしが早世せり、惜むべし。

## 〔増〕辰 齋 俗稱「只鷗本」半次郎

〔新〕名政之、號柳々居、神田小柳町二丁目に住して家守役を勤む。〔増〕摺物中本の讀本等を畫きたり。北齋辰政と云し頃の門人なり。狂歌摺物并月並の詠草差畫等多く此人の筆なり、錦畫は畫かず、〔新〕號滿納半二。

〔只鷗本〕讀本は月宵鄙物語 四方貞顯作

## 〔故〕北 嵩

鳩氏、名重宣、本郷に住す、號を蘭齋、又醉醒樓、閑々樓とも號せり。讀本草紙等多し、後に浮世繪を廢して唐繪をかきて蘭居と號す。

美濃 八犬奇談 六冊 馬琴  
舊着

淺間嶽面影草紙 十冊 墨峯

高野利刀 二冊 小枝

金花夕映 五冊 谷峯

同後篇執着譚 五冊 同

加之久全傳香籠草 七冊 谷峯

## 北 齋

\*刊本「新増」に依る

\*三冊とも  
\*水正しくは  
澁州執着譚  
\* \*\*高野稔  
\* \*\*水鬘圖  
鬘とも云  
六冊



昇亨と號す、姓不知、名一政、兩國藥研堀に住す。草双紙を畫きしも有、此人浮繪の上手にて錦繪山水の遠景多く出せり。

教盛 青葉笛 五冊 關山  
外傳

北 岱

盈齋と號す、淺草に住す、摺もの贋本多し。

古能花草紙 四冊 小枝<sup>\*</sup>

十嘉榮利花 五冊 器水

\*六冊とも

愛護若神授傳 二冊 小枝

被 草紙 津川亭

【新】鳥居 清峯

151  
【新】清峯は【新】俗稱庄之助といふ【世】三代目清満の孫なり。清長の門人となりて畫を學ぶ【世】文化の始より文政の始め迄凡八九年の間、錦繪草雙紙（合巻といふ、繪表紙の三十丁もの、文化三四年比より専ら流行す）の類、浮世美人繪等多く板刻して世に知る處なり。歌川豊國の畫風に倣へり。清長物語してより芝居の看板

番附畫を受繼て清滿と改む、板下畫は悉く止たり。【新】住居、住吉町新和泉町  
【編年史】明治元戊辰十一月廿一日歿、年八十二。

【故】文政中市村座看板、故有て歌川國貞に畫かせしに其芝居評判宜しからず、  
其後は又清峯引續て畫きたり。

【新】大原【増】東野（此比同時の人と見ゆ、大坂の人、後奈良に住す）姓  
大原

【新】民聲といふ、五畿内産物圖會の編あり。諸合書の  
繪なり  
唐土名所圖會

繪本西遊記 初編十冊

【新】淺山 蘆洲

浪花の人、青陽齋、狂齋堂、蘭英齋等號せり。文化中多く讀本を出せり。

【故】繪本平引糸 六冊 蘭山  
蟹猿奇談 五冊 鬼卯

茶店墨江草紙繪 八冊 鬼卯  
連理雙袖 五冊 一九

\*天明より享  
和の比を指  
す、奈良の  
人にして大  
坂に住せし  
なり一名數  
傳説の編  
著者

\*畫は版圖也

## 【新】一筆齋馬圖

【故】大坂の人、讀本多くあり。

東鑑操物語 五冊 金文

繪本更科草紙

金鐙化粧櫻 六冊 昌房

## 【新】青陽齋置圖

【故】淺山氏、昔洲門人歟、俳優似繪多し。

復讐鬼娘傳 五冊 共榮

今昔長申譚 五冊 鬼柳

忠孝貞婦傳 六冊 歌國

## 【新】合川珉和

京師の人、讀本多し。源秀成、字は士陳、雪山と號す、【故】又合川亭とも號せり。

【新】岸駒の門人也。

漫畫百女 一冊

【故】物草太郎 十冊 西瀛

石井物語 五冊 小鹽

峯の雪吹 五冊 文丸

通神畫譜 一冊

【新】松好齋半兵衛

【故】浪花の人、氏未詳。

學會角力圖會 二冊

浪花俠夫傳 六冊 嘉保

【新】速見【塙】春蘭齋 俗稱□□ 大坂の人

【新】一に速水氏といふ、名恒章、通稱彦三郎、【塙】刻板の繪入讀本を多く畫り。

【新】又文をよくして自作の讀本多し。【塙】能く法橋玉山の畫風を學びたり、【新】文

政六年七月十日歿す。

【新】繪本忠臣藏 二十冊 同雪鏡談 十二冊

同金花談 十二冊

同龜山譚 十冊

同孝感傳 十冊

同顯勇錄 十冊

同誠忠傳 十冊

同合邦辻 十冊

同平泉實記 十二冊

同夜船譚 六冊

同甲越軍記 二十冊

同一休話 〔故〕六冊

同彦山靈驗記 十冊

同金毘羅神靈記 十冊

同二島英勇記 十冊

同淺草靈驗記 十冊

同箱根山靈驗記 一冊

同伊賀越孝勇傳 七冊

都風俗化粧傳 三冊

年中行事大成 六冊

扁額軌範 二冊

此書は春曉齋の作にして  
畫は北川春成の筆なり

春曉齋が筆の畫本忠臣藏の指畫義士泉岳寺へ趣く所を薰齋政美が畫る東海道名所圖會によつて畫り、この故に江戸を向ふになし品川の方を手にして義士品川の方より高輪にいたる所の圖を畫り、此の如き誤り外にも有べし。

〔新〕流光齋〔故〕如畫

〔新〕役者畫多し。

〔故〕大坂の人、俳優の肖像を畫くに名ありて、當時浪花にては有名の人なりし。

彩色繪も密なり、畫風月岡氏の筆意を學びしかと思はるゝ所あり。

繪本花菫蒲 二冊

同にはたづみ 三冊

\*芝居覺史 二冊

\*且生言語備 二冊

\*正しくは觀  
覺史

## 〔増〕二代目春曉齋

〔故〕速水氏、名恒茂、俗稱民之助、初號春民、春曉齋の男なり。父と同居して父歿後春曉齋の名をつぎ二代目となる。京師の人なり。

## 〔新〕北川菊齋

寛政より文化文政の人、〔故〕名潤字子達、墨字又觀雪齋と號す、〔新〕後月麿と改む、稱六三郎なり。馬喰町に住す、文化中小傳馬町麿や新道に住し家守となる。板刻の草雙紙等あり〔故〕歌麿に學び後、〔新〕一流なり、後年浮世繪をかゝず、名を觀雪と改む、此年柳島妙見宮へ鯉の額を納む。

〔故〕菊齋筆美人畫の落款に

文化元甲子春三月末口喜多川一流俊畫司筆

喜久磨改 正名月磨圖□□

右の如く有、然れば月磨と改めしは此時なるべし。

【增】蹄齋北馬 (文化文政頃の人) 俗稱【只誠本】五郎八【無名翁】有坂氏

【增】(居始神田、後下谷三筋町) 江戸の産

北齋に畫法を受けて狂歌摺物畫を多くかく、譜本の密畫に妙を得て數十部の板刻本世に行はるるは人の知る處なり。左筆の曲畫をよくす、後落髮す(川柳風の狂句もよくす)。繪本三國妖婦傳は玉山が繪の大本よりも一二年先に賣出せり。平家物語、鎌倉見聞志(星月夜顯晦錄)の類、軍書\*の繪入もの多し、(高井蘭山編)新著の讀本は枚擧するにいとまあらず。(門人逸齋遊齋等多くあり)畫風に一派の筆意ありて、後に土佐繪を慕ひて多く其趣を畫き、師の畫風とは大に異なり。

\*逸馬、遊馬の誤

【新】石言遺響 馬琴作 五冊  
三國妖婦傳 高井蘭山作 十五冊

孝子嫩物語 蘭山作北獨 五冊  
柳の絲 小枝繁作 五冊

常世物語 馬琴作 五冊  
田村磨物語 川上老人作 六冊

\*冊数はすべて故法室本による

那智の白糸 關山作 五冊

自來也物語 鬼武作 十冊

千代七變化物語 振鷺亭作 五冊

尼城錦 葛飾小太郎作 三冊

催馬樂奇談 小枝繁作 六冊

竹馬手綱 武者畫本  
馬琴狂歌入 三冊

俊徳齋謡曲演義 振鷺亭作 五冊

星月夜顯晦録 關山作 十冊

\*近年美人畫を多く畫たり、彩色もの又席上の略畫に妙なり。

\*天保の末より

〔増〕戴斗 (文化文政の人) 俗稱伴右衛門 遠藤氏 (小笠原家浪人な

り) 始は北泉、(居住麴町平川町天神前にありしが後は不知)

北齋の門人なり、名を讓受て二代目戴斗と云、畫風師の筆法を能く學び得たり。

眞偽やゝもすれば不知、〔新〕世に大北齋といふ。〔増〕浪花の刻本を多く畫けり

〔大坂北齋と云、かく所のもの、能似するを以てなり〕。

武者鏡 (板元浪花) 繪本 (同上) 二代目戴斗畫譜

小紋雛形 〔故〕花鳥畫傳 二冊 英雄圖會 一冊

繪本通俗三國志 萬職圖考 五冊



〔増〕其他讀本類七八種あり枚擧すべからず。

泉 守 一 (寛政より文化中歿す五十餘歲) 俗稱吉兵衛 泉氏 (居本郷)

一丁目) 號壽香亭 (江戸産なり) 目吉と稱す (俗中の渾名なり)

始めは古等琳の門人なり、后狩野探信門人となり守の字をゆるさる、

\*〔新〕探信は狩野探信の長

男又は守政與書と稱す享保三年十月四日歿す守一は寛政享和を盛にして歿すその歿年へだ、る事九十年に近し探信の門人と云は、ぶかし

〔増〕町畫には可レ惜名筆なり

り。武者畫を善かけり。父は泉義信と云る狩野流の門人にて畫工なり。守一は俗

稱の目吉を以て畫名とす。本郷の一俠客たり。能狩野流の畫法を學び墨畫の靈龍

鍾馗の繪に妙を得たり、戯れに摺物畫、花鳥の團扇畫等を出せり。泉吉兵衛は諸

社御普請の修復彩色御用を勤む (日光久能山江戸兩山の類) 町繪職人の頭なり

(齋藤源左衛門請負なり) 親吉兵衛より續て二代勤む (三代目吉兵衛は門人林之助

と云し者なり、實子女孌にて相續す)。生涯名を不レ好その畫きしは王子權現に爲

朝の額あり、〔菘〕上野清水堂に日蓮上人龍の口御難の圖、〔巻〕本郷弓町天神に五

郎時宗の額あり、湯島天神には童子遊びの圖あり、是も額なり、其他尙多し。門

\*壽香亭とも云

\*探信は探信の男守政にあらざして

後の探信守道(天保六年歿)なるべし

【日語本】只識接するに近年

弟に泉賦あり、壽川齋と號す能師の畫風を學びたり、此人の門人にやいふかし。

東兩國に住める人形細工人目吉と號る者あり、此人の門人にや、畫風は大に異なり等

【新】泉山松月  
泉守一の門人  
と云は非なり

稱和泉屋作十郎と云、神田編町に住す、右目吉の門人にや、畫風は大に異なり等

琳の畫風に近し。畫風師の風に似たり。錦畫なり。また錦繪はすく

【世】三代目等琳の門人なり。狂歌落物を畫かき、また錦繪はすく

【新】北 雲  
俗稱久五郎、大工を業とす、狂歌落物を畫かき、  
五冊 鬼筆

東兩西と號す、俗稱久五郎、大工を業とす、狂歌落物を畫かき、  
【世】尾州名古屋に住せしこと有。  
【世】夕霧書替文章  
俗稱初五郎 【世】岩窪氏

なく、わづかに二種あり。  
【世】北雲漫畫  
一冊 鬼筆  
水雲屋版

【世】魚屋北溪  
（文化より天保の今に至る）

金石衛門【增】（居始四ッ谷鮫が橋、後赤坂永井町代地）號拱齋 葵岡

（姓氏の如く用ゆ）江戸の人なり。

始めは狩野養川院門人にて畫を學び、後北齋の弟子となりて浮世繪師となる。四ッ谷の【新】松平志州侯の用達の【增】魚屋なり、仍て畫名の傍に魚屋と記したり。

摺物畫は勝れて妙手なり、北齋の高弟にて畫法能く師の傳を得たり、讀本張交の錦畫等あり、役者美人畫はかゝず。【新】後魚を尙はず畫を以て業とす【增】彩色の密畫も亦名手なり門人多し。（彫刻の畫なければ名不出）

釐の花 （鬼武者）三冊  
作ノ誤、新

美少年錄 二冊より  
編、新 馬琴作

吉原十二時 （六摺圖作） 【故】二冊

江戸名所附 【新】ナシ 【新】二冊  
（彩色摺）

【新】北溪漫畫 一冊 名古屋 永樂屋板

青山立法寺中碑 根府川石

翁諱辰行、善繪事、工于時世樣、遂武於菱川宮川諸名流、嗜學藏書數千卷、  
一生行實無愧忠信篤敬四字

葵岡老人北溪君之墓

あつくなくさむくなくまたうゑもせずうきこときかぬ身こそやすけれ

【増】春川 榮山

【只讀本】俗稱□□ 居中持杖町

傳追而可考。

【増】春川 五七 (新)初名【故】神屋【新】莠州【増】江戸小石川の人【故】御家人の由なり)

【増】文化の末より京都に住す、榮山の門人なるべきか未詳。京小原八坂の邊りに住けるにや【世】俗稱を龜助と云、自ら畫き自ら書、又彫刻もせしとぞ。著述のもの、天縁奇遇 三冊口八町 中本 此外なほあるべし。戯れに一絃の琴を引り。【増】江戸に在りし比は役者の細かき繪を畫き、板刻せしと見へたれど一二種に過ぎず、其後畫名を見ず。

【故】喜多川式齋

歌麿門人なり、俗稱東海林平次右衛門と云。小石川水道端牛天神下に住す。錦畫有。文化年中歿す。

【増】菊川英山 (文化文政の比【只讀本】より天保に至る) 【増】俗稱爲五

郎 市谷の産(麴町に住)號重九齋、名俊信

始め父英二に畫を學びたり。(英二は狩野流の東舎と云人の門人なり、板刻の畫はかゝず、菊川一家の浮世繪師なり。造り花を業とす、近江屋と云) 北溪は幼年よりの友なりしかば、其畫法を慕ひ北齋【新】流【増】の畫をかけり。古歌麿歿して後、自立して歌麿の畫風に似せて一家をなし、板刻の美人畫を出して大に世に行れたり、豊國春扇と並び行れて、浮世美人繪中興一家の祖なり。始めは役者繪も書けり、(文化三四年の頃、堀江町の團扇問屋、故有て悉く豊國の新版繪を不レ出、一年英山の役者畫の團扇ばかり出せし事あり、其翌年の頃より國貞も初めて歌右衛門が猿廻し與次郎の畫の團扇をかきしなり。夫より英山は團扇畫に役者を止て

かゝず、美人畫を多く出せり。國貞より二三年も早く世に行はれたり。錦畫は麴町三河屋清左衛門といふ繪變紙問屋板元にて始て英山の畫を出し、大いに賣れし

(傳右)燕

と云。歌麿歿して美人畫絶たるに、英山時に逢て、役者畫は豊國、美人畫は英山と並行はれ(豊國の役者畫の上表紙に一陽齋の畫像を英山畫き、英山の畫に豊國寄合畫き等あり、交深く互に惡意なりしかば、諸侯方へも二人にて席畫に出、絹地彩色畫も兩人へ命ぜられ「舞」「たり、年の字菊の字、織物煙草入などへちらしに付たるを持ち、現に在り、英山は南嶺の門人なり能く寫意を學べり)「増」しと云)、草箋紙四五種あり(竹塚東子作大鷄塚三馬作板元西村長始めなり、橋本徳瓶作、二三年續て出せり)「舞」讀本は不畫「増」美人浮世風俗は狂言振と不レ似、やはらかに當時の風俗をかき、遠國迄も名高く一時の妙手なり。錦繪は夥數開板せり、文政の末より故ありて、多く板下を不レ畫、門人多し、菊川流と稱す。

菊川英山門人

英章(淺野氏錦鬘團扇あり) 英泉(別に記す) 英里(錦畫あり冬木氏)

英信(摺物畫多し安五郎) 光一英章(春畫本あり狂言作者なり名草三)

\*晩年上毛蔵  
間なる坂下  
ヨ方に蓄蓄ト  
し慶應三年  
六月十六日  
其地に於て  
卒す行年  
八十一  
三(浮世繪界  
照)

英蝶 (摺物畫あり)

其他數十人あれども板刻の畫をかゝざるものは愛にのせず。

因に云、英山は畫才あれども讀本艸雙紙を畫く事には甚疎なり、十返舎一九作の貧福論のさしゑは此人の畫なり、艸雙紙も徳瓶が作の姉川頭巾といふ雙紙の畫は豊國の人物の中に、己が女畫を書加へしゆへ、其頃評判もよかりしに、北高も是に倣て畫きし艸雙紙讀本多くありしなり。

□ 川 春 扇 (享和より文化文政までにて改む) 俗稱清治郎 (居始麴町)

貝坂、淺草御門前、又神明町へ移る) 號は始春琳と云 (等琳門人)

春扇と改め又 (二代目) 春好と改む、〔故〕號可笑齋

〔繪〕始め雪山堤等琳門弟なりしが、後春英に學びて春扇と改む、文化の始め、東西葦南北と云作者、源五郎鮎と題せし雙紙を作り、春扇始て草雙紙の下畫を造り、(板元芝神明前山田屋三次郎初ての板元なり) 大に行はる。是よりして一途に浮世畫役者畫、草雙紙を書り。此比神明前の繪雙紙問屋、彼を取立ん事を挑あらそひ、

新板日々に多く發行す。僅の間なれども、豊國大に衰へしことありし。讀本も一  
 二種畫かけり。二代目春好と改名し、板下畫を止めて芝神明町に移れり。妻も風  
 流の者にて、草箋紙の作を年々に發行す、作名月光亭笑壽と云へり。

按るに、繡像讀本は東里山人作源平染分草と云し五冊、縫山翁作、橋供養三  
 編五冊なり、後陶器の焼付畫をかきて板刻畫をば畫す、其比は酒杯繪猪口と  
 云しもの流行の始めにて、専らに是をのみ業とせり。門人に扇里といふもの  
 ありき。

\*文政の頃

歌川國貞（文化二年頃より天保の今に至る）俗稱【新】角田庄藏【増】

\*三代目豊國

庄五郎、（居本所五ツ目、後龜井戸）【新】天満宮門前に住し又柳島へ  
 移る【増】葛飾郡西葛西の産、號一雉齋、【新】月波樓文化の頃より號す北梅戸  
 富望山人、富眺庵、一陽齋、晩年香蝶樓、琴雷舎、【増】一に五渡亭、  
 桃樹園の數號あり

國貞は本所五ツ目渡場に住す、【新】渡船の株式は家に有に、【増】依て五渡亭の號



あり(蜀山人此號を贈りしと云)、若年の頃より浮世畫を好み自ら師なくして役者繪を畫く、豐國門人となり始めて藍本をあたへしにその海書を見て豐國驚しと云り。豐國が門に入り程なく文化の始(二三年の比)に草箋紙の板下を畫けり。(山東京山始めての作、國貞始ての畫なり、妹背山と云、江見屋の板、夫より年毎に畫く、錦繪は「菖」文化五年戊申【增】中村歌右衛門大坂より下りし比(在原系圖、梅若狂言切狂言、於旬傳兵衛、猿廻し堀川の段、二番目狂言富岡志山關出村玉屋新兵衛【新】の段是歌右衛門が目見へ【增】の狂言也)數品を畫て發行す【新】一説に國貞始ての板元は【增】馬喰町西村與八【新】なりといふ。【增】團扇繪(歌右衛門猿廻し與次郎の畫、團扇繪を初て畫きしなり)草箋紙大ひに行れて、おさおさ師豐國におとらず、一時聞人となり、終に一家をなせり。畫風はよく豐國の骨法を學得たり。後に一派の筆意を以て、一蝶、嵩谷が筆法を慕へり。師歿して後、彌自立して、浮世繪役者似顔畫に名高く、數百部の合卷草双子を出せり、讀本は二三部に過ぎ、繪手本の類は未出ず、當世の風俗を寫すに妙ある事、よく豐國が畫法を學び得たり。門人多し、委しき傳は別記に誌す。

【新】又役者似顔繪は師豊國にまさりて俳優の故實を正し、當世の美人繪は殊に工夫をこらし、花街娼妓の風俗を深川、品川、四ッ谷、新宿、千住、根津、辨天、松井町、新地、常盤町、於旅、谷中、三田、三角、其餘の賤妓に至迄風俗を分かき出しければ、一時に其名を轟し三都片鄙迄賞しあへり。天保四年より英一桂の（英一桂は柳しま佳、九十六歳にして卒す、辭世に百迄はなんでもないと思ひしに九十六ではあまり早死）門に入て英一蹄と號す（一説に嵩谷の齋嵩綾の門人也とも云）、又香蝶樓と號す（一蝶が蝶と、一蝶の實名信香の香をとりて香蝶樓と號せり）天保十五辰年春、師の名を繼て一陽齋豊國と號す（二世豊國と名書を記す）按るに二世にはあらず三世なり、【只誠本】國貞の畫天保の末よりやゝ衰へたり、【新】改名の頃何人の狂歌にや

歌川をうたかわしくもなのり得て二世の豊國偽の豊國

齊風は豊國の骨法を學び、又一蝶嵩谷が筆意を慕ひしかど、似るべうもあらず、贋本を賣るものは尤少く出來宜しからず、弘化二巳年薙髮して肖造と號す、翌年柳島へ移住なし聲國貞に龜井戸の居を譲れり。「世文久二年より喜翁と號す、天

保以來頗る世に聞え、元祖種彦が作の田舎源氏の草双紙の畫など實に絶妙なり。

【新】元治元年十二月十五日に歿す、七十九歳、龜井戸村光明寺に葬す、法名豊\*刊本新編に依る

國院貞匠畫僧信士、肖像の錦繪に辭世の歌とてあり

一向に彌陀へまかせし氣の安さ只何事も南無阿彌陀佛

\*命毛の切れてことしの別れかな

\*刊本新編に依る

【増】繪本役者夏の富士

【新】役者素顔  
繪本彩色摺

【故】三册

【増】役者似顔早稽古

【故】一册

【新】俠客傳 馬琴作

阿古義物語

三馬作  
豊國合筆 五册

繪本戲場顯微鏡 彩色摺

\*小櫻姫風月奇觀 京山作 四册

\*豊國、國貞合筆

玉石童子訓 馬琴作

\*三都俳優水滸傳

半兵本二册  
徳升作

\*以下刊本新編に依る

\*同中本五編合九卷

初編一册  
鶴屋南北作

\*天保三四五七年合本  
芝居細見 孫馬作

\*芝居細見 二徳升作

常盤津淨 孫馬作  
常盤津淨 孫馬作

【故】松竹梅 多氣競

九册 春馬  
徳前裁

羅鶴狂湯壽

一册 京山

\*六册とも

【増】其他數枚擧するに遑あらず。

按るに、近頃國貞は英一蝶の畫印を用るを度々見たり、五渡亭國貞と畫名を書き、

花押は英一蝶とあり、いかなる事にや。嵩谷の齋嵩陵とか云人の門に入て、故人の名跡を望むにや、役者似顔の錦繪には似付かぬ靈名を慕ひしことなり。

【只誠本】只誠云此頃の川柳點にや

葎がはびこりて渡し場の邪魔になり

よしは國芳か、渡し場は國貞なるべし。

【世】二代目喜多川歌賢

馬喰町に住して二世戀川春町と云し人なり。北川氏、俗稱鉄五郎と云。書をよくし、故歌麿が妻に入夫せし人なり。錦繪を畫きしが拙き方なり。文化より天保年中の人。

【増】柳川重信（文化より天保三年に歿す年五十餘）俗稱□□鈴木氏

の男【新】父を志賀理齋、理齋の三男といふ。【籍】江戸の人なり、號は雷斗

（居始本所柳川町、后根岸大塚村）

\*理齋の三男  
にて柳川と  
よむ

北齋の門に入て畫法を受て北齋の聲となり、其娘を妻にす。雷斗の名を續て（始め本所柳川町に居しゆへ、柳川を以て姓氏の如くす）板刻の密畫に妙手なり。師の畫法をよく傳へて一派の風趣を書く。彩色畫に其風大に異なり、浪花の玉山が筆法を慕ひ、亦國貞の浮世繪を似せたり。草雙紙を多く畫り（柳亭種彦初ての作、重信始ての畫、京一番娘羽子板、西村與八板、文化四五年の比なり）、讀本も出せり、（柳亭始ての作、奴の小まん中本、文字手摺昔人形大本、山崎平八と云書林板元、草双紙讀本ともに大に世に行はれて數十部を發行す、一家をなして世に重信風と云ふ。浪花に至て頗る用られしが、僅にして歸郷す。常に人形細工、土の製作に奇功あり。また南嶺が草畫の筆法を畫く、天保三年十一月歿す、門人重山續て其業をなせり。

【新】緞手摺昔人形 柳亭種彦作 五册

七國士傳 爲永春水  
松尾金水 合作

\* 濡燕柄傘雨談 雲麿作 十册

里見八大傳 馬琴作  
英泉補筆

【故】日本百將傳一夕話 十二册

\* 繪本水滸傳 二册

\* 繪本烈戰功記

\*二世重信の  
畫か

## 〔芭〕歌川 豊久

豊春門人なり。堺町に住せり。錦繪多くあり、又芝居狂言本をも書けり。文化の頃組上燈籠の畫多く畫けり、尤其畫に妙を得たり。

## 北尾 美丸

政美が門人なり。新乗物町川岸に住す。文化の末より歌川美丸に改めたりしが、故有て政美が師重政の名跡をつがしめ、二代目とす。花蘭齋と號す。畫風の大いに異り豊國が流なり。其業もいたく劣りし方なり。

〔芭〕歌川 國長 (文化の末より。文政に歿す、四十餘歳) 俗稱梅干之助(居)〔只讀本〕三田、後〔増〕芝口三丁目、後新橋金六町) 號一雲齋  
江戸の産なり

畫を豊國に學び浮世繪を能す、草箋紙二三種あり、組上燈籠或はこまかき細工物

に組立る錦繪多く出せり、其工風に妙を得たり、【無】漢畫に誤ル浮【新】繪と名付たる名所の遠景多く畫けり、【増】門人國宗、其餘多くあるべし、板下畫を不レ見。此人常に遊藝を好みて音曲に妙なり、酒席に興を添る事を能す、一奇人と云へし、櫻川善幸、甚幸などゝ一時の友人なり。

歌川 國丸 (文化より文政の末に歿す年三十餘) 俗稱□□【文治【新】】居 始本

町二丁目、後浮世小路一號一圓齋、江戸の産なり【新】或は武州川越ともいふ五彩樓、

繡蝶庵【故】輕雲亭、彩霞樓といふ、俳諧を鶯笠庵に學んで、【新】龍尾と號す

【増】此人書畫を善し頗る才あり、豐國の門人となり、國安と並び行はる。浮世繪役者畫ともに多し、草雙紙合卷錦畫、世人の知る所なり。畫法は師の筆意をよく守れり。亦風流に遊び諸名家との交り深し、俳諧をたのしみて鶯笠庵の門葉なり。【新】文化七年三馬作一對男時花歌川口上三馬畫入に前髪の肖像あり、文化八年京

山作出世櫻譽之詠歌【初】山口上

\*刊本新増に依る。稱此に外文化六年十五歳にて初筆の挿繪あり。三馬繪口上を述上、此の額か

## 〔故〕歌川國満

號一翁齋、元祖豊國門人なり。俗稱熊藏、飯倉土器町、槍物町、芝口二丁目、四所町等に住せり。彩色に妙を得たり。錦畫草双紙多くあり。

〔繪〕歌川國安（文化の始より天保に至て致す、年三十餘）俗稱安五

郎 居大門通村松町、又本所扇橋 號一鳳齋、江戸の産なり

幼年より豊國の門人となり、師の傍に誕生たり、文化の始錦畫を出す、(中村歌右衛門千本櫻忠信道行の畫あり) 其後故ありて、西川安信と改めしが、亦改て國安といふ。艸草紙錦畫世に多し、畫法はよく師豊國の筆意を學べり、役者畫かきの一人なり、門人多し。

門人安信 安(多吉) などなり

按るに、二代目の國安と稱する者ありて板刻に見ゆ。



歌川國直（文化の比より天保の間に至る）【菖】吉川氏、俗稱四郎兵

衛、【壘】鯛藏（居始麴町より所々に移る、后田所町に住す）號一烟

齋【菖】一揚齋【壘】信濃の産なり、一に浮世庵 柳烟樓、【菖】柳烟堂、

寫樂翁

【壘】始め明畫を學び、又北齋の畫風をも好しが、壯年の比豊國の門人となり、文化の末より艸雙紙を出せり（式亭三馬推擧して取立たり、三馬作の畫多し）其後錦畫讀本世に多く出し、國貞に匹敵せり。豊國の畫法を能せしかど、從來明畫を好むほどの畫才ある人なれば、一派の畫風を立んとして暫くこれを廢せり。後天保の始より雙紙中本などを多く出す、浮世繪一家の上手なり。門人多し、畫く所板刻に出ざれば爰に載せず。

因に云、門人に竹庵龍子と云しものあり、粕塚宿の産なり、艸雙紙役者畫など出せしことあり、文化年中なるべし、【新】八王子にて歿せり、【壘】其比は國芳なども國直が家に塾生の如く居て板刻を學びたりし。近頃國芳が畫風は總て取合せの器財艸木など、國直が筆意にのみよりて畫しが、當時は紅毛繪の趣を基として畫

くと見ゆ、北齋の畫風を慕ふは、國直が畫風によりて學びしゆへなり。

【新】景清外傳

小枝繁作 十五册

双玉傳

宮田南北作 十五册

大内興隆十杉傳

五册 香水

幼稚畫手本

一册

【只録本】二代目歌川國直は本郷三丁目に住す。

## 國 政 豊國門弟

【奥】歌舞伎役者の似顔をつつす事をよくす。

【増】歌川國政（寛政の末より文化の始までの人）

【三】三馬按、俗稱甚助、奥の會津の産、傳別記【増】號一壽齋（居始芳町、堀

江町、后市ヶ谷左内坂に住）

豊國の門人なり、豊國の高弟にて二代目國政と云、畫は遙か後に見へたれ共板下を見ず。始め紺屋を業とす。性習芝居を好むの一癖あり、僅のいとまあれば狂言を見物す、元より俳優の面を似せて畫くこと甚妙なり、紺屋の主豊國と交り深かりしかば其故を物語り、豊國傍に招きてかゝしむるに、面體の癖を似する事豊國

の及ばざること多し、則需に應じて門人となす。或時中山富三郎（世にぐにや富と異名す）の似顔を畫く、其人を目前に見るが如し、其頃専ら似顔半身の團扇繪流行す、團扇問屋是を見て板下にかゝしむ、市中に出賣るに世人面部の似たる甚奇なるをもてはやし、不計利潤を得たりしかば、夫れよりして多く團扇繪を畫しむ。その師豊國是に及ばざりしゆゑ國政が畫くところを以て規矩とし専ら役者畫を國政に似せてゑがきけり、因て世人は反て國政が門人ならんと云しとぞ。後錦畫にも多く出しが、畫道に深く不レ入、學ぶ所拙ければ人物全く不レ備、僅三四年にして止む。後似顔の假面を作りて、童子の爲めに賣りけり、晩年を不知。

〔新〕<sup>\*</sup>二代目國政と云、畫名はるか後に見へたれ共板下を見ず、何人か知らず。

## 〔註〕歌川國次

元祖豊國門人なり。俗稱幸藏と云、銀座四丁目に住す。錦繪草双紙等多くあり。

\*一説に二代  
國宗文政中  
二代國政を  
名乗りしと  
云ふ

元祖豐國門人なり。一禮齋、後一陽齋と號す、又號陽岳堂。金子氏惣次郎と云。天保年中御小人目付を勤め、湯島三粗町に住せり。實作の草双紙多し。作名を志満山人といふ。

歌川 國宗\*

山下氏、俗稱勇藏號長文齋。居芝居町、錦疊二三種あり。豐國門人也。

\*二代目か

【新】二代目文朝

【舊】今二代目柳文朝は尾張町の邊に住すといふ、吳服屋仕入物などに靈名見ゆ、文化文政の頃なり。

【新】中井藍江

名は直、字は伯養【世】又師古と號す、通稱養藏といふ、【新】浪花の人、關月の門人なり。【世】後ち畫風一變せり、門人數多あり、詩文中井竹山に學んで能し及

び茶道を嗜めり。天保元年七月二十三日歿す。

【新】播州名所圖會 師の筆意に  
遺ふ事なし

### 二代目玉山

【翁】二代目玉山岡田作徳【故】字は子秀【新】法橋に敍す、【君】文化文政の比、江戸  
神田【新】紺屋町【翁】に住せし事あり、板行の輩はかゝざりし。神田明神に爲朝の  
圖を畫きし額あり、初代玉山の畫をよく學び得たるものなり。【新】或日家を出て  
其行衛を知らず、初代玉山侗友に續て上手也、惜むべし。

\*石田の誤

### 【新】石田玉峯

元祖玉山の高弟也、清正眞傳記の跋を證とす、【故】浪花の人蘆華齋と號す。文化  
文政頃の人。

【新】繪本蘆芽變紙 二編のまじし畫は  
石田玉峯とあり

【故】繪本室の八島 六册 中巻人 復讐安達ヶ原 六册

不知火草紙

【新】二代目玉山の筆に似たり、考るに玉山修徳の先名なるや未詳。

松川半山

翠榮堂と號す、大坂に住す【故】師未詳、讀本等多く畫けり。

【新】繪本琉球軍記 後篇 十册 宮田南北作

左刀奇譚 【故】五册 手塚庵月作

【故】大聖 歡喜天靈驗經和訓圖會 三册

豐臣勳功記

正信偈訓讀圖會 三册

繪本石山軍記 卅册

地口行燈 二册

【新】探月齋

【故】其傳を知らず、浪花の人なり。

【新】谷本月齋

〔註〕京師伏見の人。

\* 越路の文 六冊

北 明

北齋門人なり。\* 氏俗稱共に未詳。畫狂人と號する讀本を畫けるもの多く有。

復讐初瀬物語 七冊 鬼耶

同幸物語 六冊 同上

\* 浪齋重春

浪花の人なり。山口氏、其師未詳按るに柳川重信門人か一號柳亭、讀本を多く畫きたり。又錦畫も有。文化文政頃の人。

復讐琴松譚 六冊 種春

都鄙物語 五冊 本朝春秋外傳 五冊 五月

俳優三國志 三冊

月宵鄙物語 後四冊 三千丸

繪本忠孝二見浦 十冊 南星亭

扶桑皇統記圖會 十冊 好齋堂

\* 正しくは古  
志路の章手  
家宛月作の  
繪本

\* 「北明子畫  
品六文化十  
三年版」に  
「井上氏女  
北明子畫」とあり

\* 柳齋とも

北堂墨山

浪花の住、北齋の門人なり。

繪本鬼娘傳 五册 鬼耶

曠鐘成

此人畫人には非ざれ共、畫を飽くし、畫作の者多くあり、依て姑く列記す。

芝瓶百人一首 一册

鎮西菊池軍記 五册

\* 一陽齋正信

復讐殺物語 六册 金太福

繪本三山昇紙 五册 鶴野益

春曉齋政信

一陽齋正信と此人とは別人歟、考ふべし。

現過恩納欄 五册 種香

繪本忠孝美苜錄 十册 東鏡亭

\* 金比羅參詣  
名所圖會天  
保山名所圖  
會滑種漢書  
等あり

\* 一に一揚齋  
に作る

\* 畫名に東都  
春曉齋とあり  
り江戸の  
人か



【新】桂向亭長丸

【註】大坂の人なり。桂向山人とも號せり。寛政文化頃の人。

昔物語松虫墳 六册 聽雨軒

【新】東 春 嶺

【註】浪花の人、東氏。

異本楮生談 六册 東逸

【新】福 知 白 瑛

【新】六々狂歌仙 彩色摺

【註】森 川 保 之

183 京師の人。其師並に傳共に未詳。

登禰太平記

三册

春の屬  
主人

明月清譚

五册

東隱亭

鎌倉太平記

東隱亭

### 三木探齋

文政頃の人。浪花の住。其傳未詳。

### 葛飾爲齋

北齋翁晩年の門人なり。筆意師の風に能似せたり。醉櫻軒と號せり。浪花に至りしが後歸りて江戸淺草藏前に住せり。明治の始頃存せしが、後不知。

朝比奈巡島記

七八十册 金水

千丈松

六册

善知安方忠義傳

五册 金水

神功三韓退治圖會

五册

日蓮上人一代記圖會

五册

\*二、三册

### 六花亭富雲

浪花の人。氏、俗稱未詳。一號千錦亭、又緣華亭と號せり。

復讐見英勇録 三七冊

【新】重 山 【舊】(二代目柳川重信)

【舊】按に、重山は師重信の聲なり、馬琴作の伏客傳二篇五の巻の末二丁重信病おもりし時、重山續て畫しものなり(初篇は英泉畫なり、八犬傳は重信英泉兩畫なり)其他讀本あり、彩色摺にて藤ばかまと云畫本あり(麴町家屋閣角丸屋甚助板、小枝繁翁作なり)【新】二世重信根岸に住す。

\*刊本に依る

【舊】岳亭春信 俗稱斧吉(江戸青山の人、狂歌を善す、窓の村竹の門人なり、堀川太郎春信と云り) 號を八島定岡と云

北溪の門人となり狂歌摺物草雙紙讀本等を畫けり【新】南傳馬町天王祭りの時店の

【舊】初め畫を堤秋榮茅場町に住す  
代目等麻門人に學び、後北溪の門に入り、又北齋に隨從す。

住居後大傳馬町。此人戯作の讀本多し。水滸太平記。俊傑柳稻水滸傳。狂歌奇人

傳。猿蓑聞集。其外多し。

一老覽譜 一册

忠孝氷水川 三册 畫作

鹿島名所圖會 三册

繪本白壁草紙 六册 東里山人

\* 葵川 清春

門人 月川 輝重

共に京師の人。

溪齋【無】英泉 (文化文政より天保にいたる)

俗稱善次郎後里介 (居住江戸數ヶ所に轉宅して住所不定、始番町後

根岸新田村【新】根津、池ノ端、坂本町二丁目)

【無】姓藤原、本姓池田氏 江戸産池田氏男也

名義信一に茂義【故】字泥聲

【無】號 溪齋、一號一篋庵

\* 風映花可寄  
源(十册)  
嶺(加那)  
谷怪談(四)  
册山月庵(十  
人)等に畫主

別號 無名翁

可候 戯作の名なり、戯作の草雙紙中本、春畫本等あり

【無】始め幼年の頃狩野白桂齋（并一齋）の門人となりて畫を學ぶ（白桂齋は赤松某侯と云へり、狩野榮川法印の高弟也）後獨立して浮世繪をかかけり（國春樓又北亭と云へり）青蠶の志ありて仕官にありしが、壯年にして沈浪す、從來宋明の唐畫を好み書を讀の一癖あり、通宵眠る事を忘る、戯作を樂みとして近世草雙紙、中本、春畫、好色本を多く出せり（薄彩色摺の春畫に工風せり、畫作の枕文庫勝れて行れたり）當時流行の繪風に倣て浮世美人繪を多く畫き一時大いに世に行れたり、北齋翁の畫風を慕ひ畫則骨法を受けて後一家をなす。青樓（新吉原を云）遊女の姿を寫すに委く、其家々の風俗（うちかたけ）襖姿を畫くに役者の狂言振（くらげ）に似せず、時世の形體（一本にあらはに）を新たに畫しは此人に起れり。近頃國貞も傾城畫は英泉の寫意に似せて畫し者也、役者畫はかゝず浮世繪師の見識を慕しと見ゆ。草双紙合巻中本、繡像讀本數十部を畫く。此人僅文化の末より文政の間大に行れたれども、筆する所の讀本錦畫夥數板刻せり（團扇畫も多し、近世藍摺の錦畫は此人の工風より流行す）。京大坂の書肆より讀

本多く出版す、三都の刻本を江戸に在住して畫くは北齋と此人のみ也、門人も多  
くありし。

浮世寶譜畫手本

自初編至十編、尾州名古屋本町一丁目書林東壁堂永樂屋東四郎

板

容艶寶史

美人畫の  
秘則也

江戸書肆合刻

錦袋寶叢

諸職の  
畫手本

大坂心齋橋博郎町北へ入群玉堂 河内屋茂兵衛板

繪本初心寶譜 馬喰町二丁目 西村屋與八永壽堂板

畫本 芝神明前、甘泉堂和泉屋市兵衛板

【新】武勇魁圖會 二册 永樂屋

畫本錦之囊 一册 河内屋茂兵衛板

通俗排悶錄 十二册 六樹園作

松風村雨物語 十册 文東陳人

繪本應仁記 【故】二十册【新】高井關山作

金鈴橘草紙 五册 全亭作

椒醬蛇物語 ワサビ 五册 全亭作

水滸太平記 五册 全亭作

好文士傳 爲永春水作

總猿偕語 瀬川如舉作

開卷俠客傳 馬琴作

【故】繪本水滸傳 一册

松亭漫筆 二册 金水

玉の露 五册 小枝

鼎臣錄 如皋

辨證異傳 五册 柳泉

七小町

【無】此他數本あるべし、枚舉するに違あらず、別記に出す。

溪齋英泉門人

英春（俗稱大木氏、小石川、春畫錦畫多し）

初め春川 英笑（京の人也、在江戸歿す、草及紙錦畫あり）

五七門人 英之（俗稱源次郎、麴町、中本讀本に多く出せり）

英花 英壽（俗稱伊三郎、錦畫中本よみ本多くあり、浪花に在住して名を改む）

英齋 泉晁（俗稱吉藏、霞浮島、草双紙錦畫多くあり）

英齋 泉橘（俗稱仙吉、向島、中本多く畫作を出せり筆耕を業とす）

泉隣（俗稱井村氏、櫻田、中本さしゑあり）

英齋 泉里（俗稱彌吉、麴町、中本さしゑあり）

板刻の畫を見ざるは爰にのせず、英の字を畫名とする浮世繪夥數あり、英山門人

と混同す、一時の人なれば也。

略傳に云、一筆庵英泉は星岡の産也、父母存在の中は違不出（父は池田茂晴、  
 投山不言齋の門人にて書を能す、讀書を好み、俳諧を嗜み、千家の茶の湯を  
 樂しむ、不白杯と友なり）。母は泉六歳の時歿す、繼母なりしが更に其心なく、  
 双親に仕て至孝なり、尤家貧しかりけり。文化の始め父は夏歿し、母は冬歿  
 す。幼き妹三人を養育せしに讒者の舌頭にかゝり、流浪の人となる。水野家  
 に血脈多くして撫育せられしが世のなりゆきを歎じ志を廢して浮世繪師とな  
 れり。戯場狂言作者、初代篠田金治（後並木五瓶也）の門に入、千代田才市の名  
 を續て作者となりしが、再畫工菊川英二が家に寓居す（英二は英山の實父也、  
 【只誠本】土佐の門に入てより近國を徧歴する事三四年にして東都に歸りたり、  
 【舞】其頃英山行れて諸侯の召に應じ彩色畫多くありしが、肥州侯命ぜられ、  
 門人不殘の畫を集給ふ、其列に入て英泉と聲名をしるし出せしより是を名と  
 す、英山門人と云ふ始めなり）元より名を不<sub>レ</sub>好、飄々として住所を不<sub>レ</sub>定、  
 醉るが如く胤を畫き、羽子板幟繪を彩り、需に従つて醉することなし（此頃



風呂を置くものは一日二百文なりしを英泉七匁五分づゝ取りしなり、是より以後他人も今に至つて三匁と定りしと云、職分筆の達者の方は二人分をなす、板刻の畫を半かきて行所を知らず、版元<sup>一冊</sup>發客迷惑して行所を尋れば娼門酒樓に酔て死せるが如し、漸に其後を畫て是を與ふ、芝金杉の濱に碇屋六兵衛と云し魚問屋有（是後に巴屋仁兵衛と云る板元なり）此人從來錦繪其外の板元を業とする事を好むが故に、泉を擄て家に養ふ、泉衣類をたづさへ出て不歸、主人漸に行先を知て尋ねれば、人の衣類を酒食に換て酔て本性なし。虎餽を生ながら鱧と共に煮て之を喰ひ、猪を好て喰し、羽織を着し、下駄をはき、近邊に出しと思へば夜船に乗じて上總木更津に至る（木更津より五里程入周准郡に池田氏の苗家あればなるべし）。かゝる放蕩無頼の人といへども、更に是を不レ惡、人衆の板元のすゝめにより、居を新橋宗十郎町に定めたり、食客を集て晝夜門に錠を不用、家主後難を恐れて大いに迷惑す。如此の行狀なれども親族他人に金銀を少しも不借、只己が業により其あたへを取て捨る如くに遣ふのみ。其後妻をむかへ、子無きがゆへに一女子を養ふ。是より後

人に歸りて板刻の繪に精を抽て夜を不<sub>レ</sub>寝、晝夜門外に不<sub>レ</sub>出、拾有餘年の間、彫刻發布の繪本錦繪、衆人に勝れて筆する事夥く世に發布す。爰において一家をなし門人を多く置て業とするに苦心して志をとげず遺憾と云ふべし。因に是に記す【新】天保の頃より筆を止て云、盛りあれば衰ふ人に哢られんより哢るにしかじと、需るに不應して根岸時雨里に隠れ、根津花街等に娼家をせし事もあり。

【只誠本】只誠云、英泉が傳自身に己が行狀を誌せり、世に聞人の傳數多あれども、己が傳を作りたるをきかず、根津門前なる木村長右衛門が判を盗みて押し、事露けんしたる時亡命せし事を漏せり、惜むべし。此后日本橋東坂本町貳丁目火の見の向側へ移りて嘉永元年八月廿六日歿す、五拾九歳。

辭世、かぎりある命な見せんおしからぬ只かなしきはわかれなりけり

此傳の内に連名數多あれど煩はしくよつてはぶく。

\*七月廿二日  
歿の方正し  
きが如し

八代洲河岸定御火消屋敷同心也、俗稱安藤徳太郎、後十右衛門、又徳兵衛と改む、  
 同藩與力岡島林齋又森岡俗稱 武左衛門に狩野家の畫風を學び、又豊廣の門に入りて浮世繪  
 を畫く。居住大鍋町、弘化三年常盤町へ移り、又嘉永二酉年夏の頃中橋狩野新道  
 へ移住す。

【世】文政の頃迄は人も知らざりし程なりしが、靈岸島竹の内といふ繪双紙問屋の  
 註文の横畫、東海道五十三次の圖を畫き大いに流行し、夫より名所繪多く畫きし。  
 天保年中畫く處の山水の錦畫流行す。

【新】又安政三辰年より江戸名所百景一枚摺續下谷魚菜所小田 屋榮吉といふ 夥しく板行し、天保  
 以來世に行れたり。【世】童子が畫手本になるべき様の本多く出版し是又行れたり。  
 草双紙も多く畫きたりし。【新】后確髮す、安政五年九月六日歿す六十二歳、淺  
 草新寺町東岳寺に葬す。辭世、

東路へ筆を残して旅の空西のみくにの名どころを見む

【世】狂歌江戸名所 十五册

江戸土産 十册

廣重追善肖像畫

三代目 豊國

に天明老人の讀あり、左に記す。

立齋廣重子は歌川家の元祖豊春の孫弟子にして豊廣の高弟なりけり。今の世の豊國、國芳、ともに浮世繪にて此三人にかたをならぶる者なし。常に山水のけしきを好み、又安政三辰の年より江戸百景をかゝれ、目の前に其けしきを見る如く、猶又狂歌江都名所圖會を撰み此圖を頼みしより其月くにあらはす、出板摺本の圖取見る人筆のはたらきを感吟せり、然る所此菊月の六日、家の跡しき納り方迄、書殘し、辭世までよみおかれ行年六十二を此世の別れ、死出の山路へ旅立たれ、鶴の林にこもられしこそなごりおしけれ。

東路へ筆をのこして旅のそら西のみ國の名どころを見む

【増】歌川 國芳 (文化より天保の今に至る)

俗稱【新】井草【増】孫三郎【新】異に太郎  
左衛門居始【新】本【増】白銀町

二丁目、後に兩國米澤町【新】一本二異谷川町  
又新和泉町北側新道里俗玄治店【増】

號一勇齋【新】又朝櫻樓【増】江戸【只誠本】神田【増】の産なり

【増】豊國の門人なり、文化の比、錦畫一二種出しが、暫く止む。文政の末より水

繪傳百八人の錦畫を出し（板元兩國加賀屋吉右衛門）大に行はれて、錦畫草紙年  
年發行す。能九德齋が畫風を學び、一流の筆法あり、門人多し。

【増】按るに北齋が畫風をも慕ひし故か、近世蘭畫の趣意を基とすと見ゆ。

【新】京紺屋の男にして幼年の頃より上繪をよくし浮世繪を好むが故に豊國  
の門人となり國直が家に塾生の如く居て板刻繪を學びたり。故に國芳の畫風は總  
て取合の器財草木杯も國直が筆意にのみよつて畫しが、後は紅毛畫の趣を基とし  
て畫と見ゆ、北齋の畫風を慕ふは國直が畫風によつて學びし故なり。文化の頃よ  
り紫さうしといへる本三冊作者不詳を畫くといへども、甚だ不出來にして評あしかり  
しゆへ錦繪の板下を頼む人もなく世に知られざりしが、文政の始、馬喰町錦集堂  
東屋大助といへる地本問屋にて平知盛が亡靈を畫きし三枚つゞきの錦繪出板す、  
同じ年相州大山良辨が龍の圖三枚續の錦繪出板、皆國芳に畫かゝせたりしに、皆  
評判よく、其後銀座に川口庄藏、又日本橋に川口長藏といへる繪草紙問屋ありて  
役者繪似顔を國芳に畫かゝせ板刻すといへども、師豐國又は國貞あるが故に人み  
な國芳を嫌ふ。文政の末水滸傳家傑百八人の内智多星吳用、九紋龍史進、行者武松、

黒旋風李達、花和尚魯智深の五人を錦繪に畫きて出板す板元兩國米澤町加賀屋吉右衛門 大いに行れ、

引續百人残らず出板なしたり或人云國芳が水滸傳の一枚畫圖上に豪傑百八人の一個と記す圖毎にしかり半を畫きし頃拵天王鼎蓋を畫きても又かくの如し終に

其繪不遜板刻終り百九人となれりと云 夫より錦繪草雙紙年々發布す、狂畫は九德齋春英が畫風を學び、

一家の風をなす。畫く所故人の規則を放れ新奇の工夫をなし畫るものこと／＼く

珍らしければ、天保より次第に行れて〔只誠本〕錦繪草双紙數多畫けり、弘化に至

りて益々盛にして就中嘉永年淺草寺觀世音開帳の砌り一ツ家姥の圖の額を畫きて

より、其名海内に轟き、浮世繪の一人と稱す。後中風をうれひて其業を廢せり。

【新】文久元酉年三月四日卒す。六十五歳。淺草新寺町日蓮宗大仙寺に葬す、法名\*

深修院法山國芳信士

【只誠本】やき筆のけふりときえて筆洗の

水は手向となれるはかなさ 秋屋

【故】或説に 國は甲州にて勝川春亭に始學びしと云、實否を知らず。

一勇畫譜 一册 忠臣銘々傳 一册

三國英勇畫傳 一册 新編笠松鬼神傳 十册 零冊

墨堤三國の社内に碑あり。并草其英其外門人よりは是を建る。

先生諱國芳。號一勇齋。又號朝櫻樓主人。并草氏。稱孫三郎。江戸人。以寬政丁巳十一月十五日。生於銀街第一坊。文久辛酉三月五日。歿於新和泉街。享歲六十五。葬於淺草八軒街大徳寺。考柳屋吉右衛門。妣柏谷氏。先生幼而聰慧。僅七八歲。好見繪本。愛玩北尾重政所畫武者鞋二卷。同政美諸職畫鑑二卷。頓悟畫人物。十二歲時畫鍾馗提劍圖。其狀貌猛壯。行筆秀勁。如老成者。當是之時。一陽齋敬川豐國。所謂浮世繪師之巨擘而名於時。嘗見此圖。大竊歎賞。以爲不易得之才。稱揚特厚。先生遂爲之弟子。研窮有年。先自豐國之門有國政・國長・國滿・國安・國丸・國次・國直等數子。皆於繪事許稱歌川氏。受以偏名國字。於是歌川畫技傳播都鄙。豐國旣歿。數子前後相繼。凋落殆盡。先生與國貞濟美齊名。若魯靈光。巍然長存。其業雁行。國貞巧於閨房美人仕女婉淑之像。先生長於軍陣名將勇士奮武之圖。雖嬰孩童無不知其聲價者。先生娶齋藤氏生二女。長名鳥。早世。次名吉。配田口其英。以爲嗣。先生與梅屋鶴壽情交尤密。恰如兄弟。鶴壽贊成其業四十年。亦如一日。可謂眞友矣。今茲癸酉。正當十三年忌辰。其門人及其英相謀。爲追慕

會。以余與先生有舊。請製碣文。而墓石有限。不得繼續。以余之所識。塞其實云。

明治六年癸酉十月

友人 東條信耕撰

萩原聳書并篆額

宮龜年鐫

【增】長谷川雪且（文化より天保の今に至る）雪且の子聖且（神田）【故】

（彫物大工後藤茂右衛門とあり）

名は宗秀、巖岳齋、一陽齋【增】俳名五樂【故】下谷三枚橋又神田に

住す【增】江戸の人なり

始め狩野家の門人となり、雪舟の畫風を學びて一家をなす、浮世繪にあらずといへども、一蝶の畫風をかき、或は唐畫の筆意も能す。

按に長谷川等伯（始久六、法眼に敍し、雪舟五代と書す）の畫裔を續しものなるべし、畫法一家をなして板刻の繪本多し、殊に江戸名所圖會勝れてよし。

摺物繪に艸筆のもの多く畫けり、一派の名手なり。

雪且——男雪堤



按るに、東都に雪舟の畫裔と稱するもの多し。川島雪亭（田安侯の畫師なり、雪舟の畫孫なり、雪舟と少し異なれども名手なり、寛政頃より天保の今に至て存す）又櫻川秋山井の誤かと云人あり（天明寛政の頃の人なり、雪舟の畫孫と稱す）本郷に住す、（畫則も冊を板刻して畫論を出せり）長州侯の藩中に雲谷の畫裔有り、當代は不<sub>レ</sub>學<sub>レ</sub>畫といへり。町繪師に堤等琳と云ものあり、雪舟十三世の畫裔と稱す、畫法大いに異なり別に記す、各混同して誤傳ふ。其外諸國に雪舟流の畫を慕ふもの有り、自立して其畫裔と稱す、元祖雪舟（雲谷軒等楊）稀代の名畫なれば、其英名を慕ふが故に類族多きなるべし（佛家にやゝもすれば空海の作佛、惠心の作佛と云あるが如し）此雪且翁は一派の妙手なり、俵屋宗達、光琳の筆意に倣ふて畫きしものもあり、明實體に寫せし山水なども見ゆ。其善きを採て畫くは名人の所爲なり、浮世畫に列するものにあらずといへども、板刻の畫多くあれば姑く爰に載す、法橋玉山杯の類なり。

〔故〕天保十四年正月廿八日卒す。歳六十六歳。淺草幸龍寺に葬す。

## 〔註〕長谷川雲堤

名は宗一、字松齋、雪堤と稱す、又梅紅とも稱す。雪且の男なり、父と同居、畫を學んで雲谷風を能くす、筆力父に劣らず上手なりし。畫本の挿繪有り、明治十五年三月十五日歿す。

## 喜多武清

谷文晁の門人なり。號可庵、又、五清堂、一柳齋等の號あり。字子愼、八丁堀竹島に住す。京傳作の優曇花物語の差繪を畫くと雖も、唐畫師故に俗客の目を樂しましめず。爲に行れず。京傳後に是を悔たりといふ。安政三年十二月二十日卒す。歳八十一歳。武清翁も浮世繪師に非ず、板刻の畫本有が故に姑く擧ぐ。

繪本勳功草前集 十册

可庵畫籤

歌仙繪抄 一册

〔新〕大石眞虎 尾張の人なり

〔故〕尾張國名古屋本町通り門前町醫師小泉隆助の二男なり、寛政四年の生れにして幼名は門吉太郎、又、衛門七、小門太ともいへり。或時は壽太郎とも云し。俗稱順平。初め晝を月樵に學び、樵谷と號す。後に武家の故實を研究し渡邊周溪に就て學び、眞虎と稱し、剃髮して入道前眞虎と落款せしも有。晝風は四條より入て土佐を出で一家をなす。初め晝風は文鳳に似たり。中頃は北齋風も交れり。月樵に學びし折未だ幼き頃瓦の欠を拾ひて砂の上に馬を晝き筆を持出して板圍ひへ人の形を晝きし徒らならず。十五六の頃に至りては師の月樵も其筆有る驚きし程になりしと。又俳諧の發句を能したり。其性風流洒落、且つ頓智頓才あり。傳別に有り。或年の五月節前に床店やうの所を借りて腹掛半纏にて幟の繪をかき多くの錢を得て皆酒にかへて遊しと言ふ。此時の繪は常の格を外し、少しも有職氣なく北齋を其儘に晝けりとぞ。江戸に來りて深川一色町網打場邊に住し事有。天保四巳年四月十四日歿す。名古屋大順の眞福寺に葬す。生前の遺言により、墓石に大和繪師大石眞虎之墓とのみ記す。行年四十二才。

法名 阿闍遊林信士

鹿齋圖風 二册

鹿齋百物 一册

尾張名所圖會 七册

名家贅譜 三册

花鳥百家發句集

永曆大雜書 一册

神事行燈

百人一首一夕話 九册

巖嶋名所圖會 五册

## 書 齋

北川月鷹門人なり、墨川亭と號す、高田侯藩中にて通稱田中善三郎といふ。後に  
齋を廢して戲作者となれり、讀本草双紙等の著多し。

## 二代目 北齋

本所の産なりしが、后に吉原仲の町の龜屋といふ茶屋に成しと。兩國回向院にて  
大齋の布袋を書り。錦袋舎名弘の會ありし。大齋は度々なり。十六間四方、十八  
間四方等あり。名古屋にては出山の釋迦を齋けり。

類考に云、二代目北齋は深川海邊大工町、橋本喜三郎と云しが、いかなる事

にか業を止め、後早世と有。又天保頃の或書に、二代目北齋は爲一門人、名は辰政、俗稱は橋本庄兵衛と云。淺草三谷に住すと有。類考に早世と記すを見れば此人は別人にして三代目かと思はるれど未詳、猶考ふべし。

### 春齋英笑

初春川五七門人にして春川英笑と云、春齋と號す、京師の人なりしが江戸にて破せり、溪齋英泉の門人となり、英蝶と改む、文政頃錦畫草双紙を畫けり。

### 歌川貞秀

橋本氏、名玉蘭、俗稱兼次郎、又兼吉共云、五雲亭又玉蘭齋とも號す。畫作の草双紙有。三代目豊國の門人なり、草双紙、錦畫多くあり、龜井戸に住せり。

\* 題とも

赤穂義士一夕話 五册

八宗 起原 釋迦實錄 五册 谷城

忠孝阿佐倉日記 十五册 金本

## 四代目 歌川豊國

三代目豊國門人にて、初名一壽齋國政と云り、後に二代目國貞となり、櫻蝶樓、一雄齋と號す。又師の養子となりて四代目豊國となる。龜井戸の古居に住せり。俳者似貌繪、艸双紙等多くあり。明治十一年の頃畫名猶見えたり。

## 歌川貞房

小島氏、俗稱庄五郎、號五龜亭又橘蝶樓共號せり、目白臺に住す。草双紙錦繪多し。

## 歌川芳盛

姓三木、號一光齋又さくら坊と號す。國芳の門人なり。畫風師の風を能學び得たり。草双紙、錦畫多く出せり。居下谷廣小路、後池の端茅町等たり。

## 歌川芳虎

號一猛齋又錦朝樓とも號す、國芳門人にて、草双紙錦畫等多くあり。俗稱辰二郎、居長谷川町後松川町。

#### 國 員

浪花の人、元祖豊國の門人歟。俳優似貌繪、錦繪等多く畫けり。

#### 五葉亭廣信

京師の人、俳優似貝繪錦畫等多く有り。

#### 南粹芳雲

大坂の人、國芳門人なり、俳優似貌繪等多し。

#### 芳 瀧

205 中川氏、俗稱恒次郎といふ。大坂の人。父を源兵衛と云。畫を中島芳梅に學びた

梅之本鶯齋

國芳門人なる歟、江戸の人、鶯齋梅兒と記せるも有、此人なるべし、拙き方也。

歌川芳梅

浪花の人なり、號一鶯齋、國芳門人なり、中島氏、名藤助。

復讐岩見英勇錄 四七册

歌川國輝

號一雄齋又一曜齋、山田氏、三代目豊國の門人なり、初め獨醉舎貞重と云。本所御藏前に住す、草双紙錦畫多く有。

歌川芳員



一川氏、一春齋と號す、國芳門人なり。晉羽に住し、武者繪を能し、草双紙錦畫多し。

歌川芳勝

歌川國芳門人なり。俗稱庄助と云。號一勢齋又一秀齋共號せり。初め幕府の醬油用達を勤めしが、後に浮世繪師と成。清元を好みて語り下手太夫といふ。

昇齋一景

明治の初め繪畫あり。

〔新〕喜多川北堂

兆齋月亭

## 補遺

宮川春水 芳町

享保之頃

勝川春水 宮川門弟 俗名藤四郎

享保頃か、深川後よ芳町よ住

勝 薪 水 宮川門弟

寶曆明和の頃迄

本銀町四丁目住

(鶴岡蘆水) 俗名金次

隅田川兩岸一覽筆者 屋げん堀不動前通り

【巻】附録 古今大和繪浮世繪の始系

江戸元祖 公家 武家 農人 職人  
 仙人 鳥獸 草花 山水  
 女官 奥方 傾城 町風  
 古代 大和浮世繪の始り 江戸大傳馬町二丁目住居  
 一流 生國房州保田出生 同板元鱗形屋三左衛門  
 孫兵衛

貞享元祿之頃古代名人

土佐流 菱川師宣——娘簀造酒之丞  
彩色名人

元祿享保ノ比

初代 鳥居清信難波町邊住  
四座看板書

二代目

鳥居清信仲三人 難波町

三代目

清倍 兄、早世

四代目

清信 弟、早世  
俗稱半三

五代目

三男  
清信 弟四郎 芳町三味線所

清満

清長 門弟 木材木郎  
三芝居當時看板書

清信 市川海老藏ノ譜名人

門弟  
清勝 高砂町

清次 同

清久 小松町

清定 花房町

清廣 堺町

清時

清政

幸四郎 第十郎 宗十郎似類名人

清之

三代目 鳥居清倍

門弟

清重 小網町ニ住ス

清忠

米澤町角  
浮世畫影色

元祖清信門弟

享保之頃

奥村政信

文角、通油町住

日本畫師、心印書  
鐘屋ノ名人、目ニ金簪ヲ置并ニ浮畫紅摺ノ始也又志道軒繪上手

西村重長

通油町住  
浮世繪名人、役者も畫く

近藤助五郎清春

【三】三馬按に、此三人ハ清信門人に非ず各獨流なり。此時代の浮世畫はすべて鳥居家の畫風を慕しもの也。既に北尾重政も壯年の頃の畫は鳥居流也。これを以て知るべし。

宮川長春

正徳中ノ人、兼川ノ畫風

宮川長龜

元禄門人

宮川春水

大和畫師、芳町住居

宮川門人  
古山師政米澤町江市屋長七、  
市川海老蔵其外似面畫畫始ル  
名人

勝川春水

藤四郎 深川後 芳町住

勝水

本銀町四丁目

勝川  
春章

當代似顔名人、人形町

勝川春好

長谷川町、早世

春朗 今改宗理

春英—春徳

【三】三馬云、春好早世にあらず四十五六歳の頃中風を患て業を止、後年麻布善福寺に遷世して在しが、焉馬の需に應じて市川白猿の像を左筆に畫くこと有。其圖今日哥白猿一首に見ゆ。

菱川師宣

門人

同太郎兵衛師重

本姓古山

古山新九郎師政

稱文志

草保中ノ人

宮川ノ門人ニアラズ

寛保の頃

石川豊信

西村重長門人  
役者女盛名人  
小傳馬町地主

きれい也

寛政

歌川豊春

豐信門人浮世繪名人  
芝神前前三島町住

寛政

歌川豊國

當時役者之名人

國政

同

歌川豊廣

芝片門前  
俗名與兵衛

一流

湖龍齋

米澤町角

鈴木春信

西村重長門人

北尾重政

西村重長門人  
武者盛名人、大傳馬町二丁目

政演

京傳也

政美

へつ、いがし

柳郊

式上亭

窪俊滿

【新】赤子 【新】紹意ト號ス越前侯ノ藩タリ、或ハ政美ノ男也  
 【新】美丸 【新】歌川美丸ト云フ新薬物町川岸ニ住ス、文政ノ  
 始三代目北尾重政ト改ム、其ヲサイタク劣レリ

寛政 敬 鷹 久右衛門町  
 當時女繪名人、此右に出る者なし

右江戸惣大和畫師也

- 一、役者似顔上手
- 二代目八百藏似顔上手
- 一筆齋文 調 龜井町
- 一、日本畫役者繪明太夫弟子
- 淨瑠璃上手二代目十丁似顔上手
- 柳文 朝 南油町

【三】三馬按に、文調門人に文康あり、俗稱安五郎。人呼て文康安と云。老人にて今尙存在。

- 一、實ニ正似顔畫書
- 珠雀齋

女畫 浮世畫

- 京 武者 鳥獸
- 正徳ヨリ枕畫書始
- 西川 祐 信
- 山水 役者
- 土佐也

何レモ宜敷名人也

- 大阪 享保ノ頃
- 本畫師 後素軒 橋守國
- 鑑人



同 同 同 同

板元 澁川南左衛門  
柏屋清右衛門  
士農 長谷川光信  
工商名人 橘守國  
天明の頃 山城名勝園會大和伊勢  
當時 銘人 竹原春朝

【三】三馬按に、伊勢名勝園會八月岡丹下門人法橋關月が筆也。關月ハ高手の畫工也、山海名産圖會と此本とを畫き壯年にして歿す、惜べし。

春朝齋の男に春泉齋あり繼て名所圖會を畫く。

右の始系は本銀町後箔屋主人在屋新七所實なり寫して類考の後に附記す、參考して其實を訂すべし、  
猶後考をまつ。 庚申夏五晦 杏花園

【廻】菱川氏系圖

藤原姓

菱川七右衛門

房州平(群)郡保田町住  
菱川吉左衛門道茂入道光竹  
寛文二年二月十五日歿ス

家業ハ興箔屋其業精妙也

實子淨世繼の祖始 箔師後輩ニテ一家ヲナス  
菱川吉兵衛師宣入道友竹

房州平郡保田町産、若年ノ時江戸ニ移リ住ス、正徳年中江戸ニ於テ歿ス享年七十餘才、居所ヲ考ルニ、  
貞享四年板江戸鹿子ニ村松町二丁目、元禄二年板江戸四疊及元禄五年板買物關方三合集町三番町トアリ、一説ニ探町横町又大傳町二丁目ト云是等轉宅ノ處ナルベシ

二男  
菱川正之丞

門人  
菱川政信 字守節畫風ハ良ク師ニ似タリ

門人  
菱川友房 畫風似テ筆下レリ

門人  
古山太郎兵衛師重 元祿年中ノ人 トアリ古山ハ本姓ナルベシ  
江戸長谷川町ニ住ム

古山新九郎師政 享保中人 稱文志  
江戸兩國米澤町住此人ニ至リテ菱川ノ畫風ヲ失フ、世事談ニ見ユ

實子  
菱川吉兵衛師房 始吉左衛門ト稱ス、鹿子及團圓、三合集覽等ニ吉左衛門トアリ、父師宣ト同居始

二男  
菱川沖之丞師永 繪師後ニ稱屋ヲ業トス 鹿子及團圓ニ作之取トアリ一説ニ酒造之丞父ト同居彩色ニ妙ヲ得タリ

實子  
菱川佐次兵衛 イ、重嘉 家業相傳

二男  
菱川彌右衛門

師宣ノ血脈ハ代目ニ至テ絶タリ、今菱子以家ヲ續ク、房州保田町ニアリ、是七代目也、女子他ニ嫁シテ生ル血脈ノ者今ニ同所他家ニハ有トイフ

【增】元祖清信 俗稱庄兵衛 住居難波町

清重 清信門人 市川海老蔵似顔畫ノ上手

清忠 米澤町角 彩色浮世畫師

二代目 清信男〔新羅波町ニ住ス 三代目 俗稱半二新清信二男或ハ清倍ノ男トモ 清經 三三馬按清經、長共清滿門人也  
清倍 清滿 芳町三味線師

四代目

清長

清長門人

清勝 高砂町

五代目

清峯

清滿ト改ム、清長門人也寛政ヨリ今至天保住居和泉町

清次 岡

清久 小松町

清定 花房町

清廣 〔新〕塚町ニ住ス

清時 〔新〕和泉町ニ住ス

清政

清之

清元

清滿實子

畫不學和泉町ニ住ス 雜箱屋渡世

【通】英氏系圖之略

英一蝶 〔增〕七十三、承應元年生ル享保九年歿ス

二代目實子

一蝶

名 信勝 〔增〕一説二代目一蝶ハ八丈島ニテ出生ス、故ニ遠トキ共ニ江戸ニ具シクリ尾ヲ島一蝶ト云ヘリ。〔新〕元文元年閏十一月十一日歿ス。深川寺

〔新〕三男

俗稱長八 町隅岳寺ニ葬ス 〔新〕法名機外道輪居士

一鯛

俗稱 〔增〕多賀 〔通〕百松後源内一号孤雲 〔新〕名 信訥 誠湖窓翁 後一舟ト改ム

門人、雙子禪師家

一舟 名信種號東窓翁俗稱彌三郎

【增】一舟男  
一川【新】名宗澤號松成

明和五年正月廿七日歿【新】二本櫻承教寺中【追】顯乘院ニ葬ル

一蝶 晚年門人

一水

後黨之と改本姓佐脇名道賢字子岳【新】初名嵩樗號果々觀一  
號中岳堂又東宿一室齋等之號アリ俗稱甚顯【新】明和九年七月

門人  
高嵩谷 號屠龍翁【增】名一婦  
兩國藥研堀住

高溪宜信 異本宜信  
作宜信

門人  
一蜂 【增】追號春窓翁【增】一說ニ云、一蝶ノ子、多賀長八郎僧  
勝號一蜂【新】寶曆十年四月廿八日卒、深川法禪寺中南龍院  
ニ葬ス

【增】堤等琳

元祖俗稱孫二  
雙等琳ト云

等舟

羅山日本橋中通リ葛町靈風  
ヲ改メテ一派ヲ畫ク妙手也

堤

等琳 二代目俗稱吟二、本姓月岡

門人堤

雪峰俗稱雉子定

孫二

居神田大工町

二代目  
孫二 雪丘  
俗稱筆安

目吉

秋月

等琳

三代目別記アリ  
法橋雪山深川齋

秋琳 春扇也

等けい

榮山 月岡  
淺草山谷【新】

等明

等楊 麴町

秋月 始等舟  
今野村

雪仙 本町一丁目

等榮 茅場町

泉山 松月

【新】月岡氏俗稱庄五郎世ニ本庄ト云、本町ニ住ス、又天保四年春川島藩  
齋所人トナリ喜徳ト改ム、久世侯靈師トナル、後金吹町ニ住ス嘉永  
中制製ス

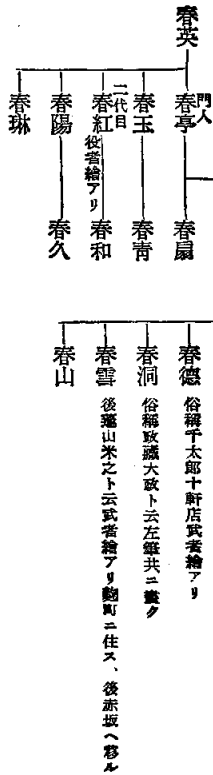
宮川春水 俗稱口口大和繪師ト云芳町住喜保比ノ人  
姓勝宮川ト改ム

春水 俗稱藤四郎深川後芳町住

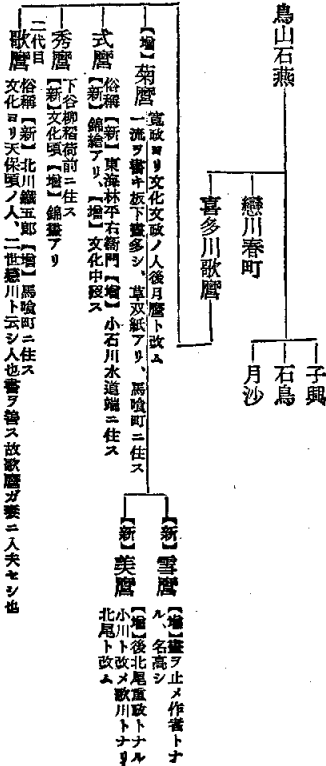
新水 門人

春章 門人

春童 林春道號關樞齋  
門人カ



【新】鳥山石燕



## 「行齋」

〔増〕萬飾爲一

二代目

北齋

二代目門人

戴斗

女子 門人柳川重信留斗ノ妻、早世、男アリ爲一實孫也。

女子 〔無〕他へ嫁ス、畫工ニアラス、早世、御鏡御用ノ家ニ嫁ス

女子榮女 〔新〕始南澤ニ嫁シテ離別ス、〔無〕畫ヲ善ス、父ニ隨テ今事畫師ヲナス名手ナリ、

辰政ト云シ頃ノ門人

辰齋

雷斗

柳川重信ト云、別記

雷州

青山ニ住ス、ヨミ本アリ

重山

〔新〕二世重信

北齋と號しての門人

北馬

界亭

〔新〕有坂氏俗稱五郎八〔増〕狂歌撰物多シ、別記アリ、畫入ヨミ本數十冊ヲカケリ、後一家ノ畫風ヲナス、踏齋ト云、下谷三ノスヂ町ニ住ス

〔新〕淺草

兩國ヤゲンボリニ住ス、錦繪山水ノ遠景多シ

拱齋

北溪

別記アリ赤坂ニ住ス、スリ物ヨミ本多シ——丘山〔編年史〕

北岱

淺草ニ住ス、スリ物ヨミ本多シ〔新〕登齋ト號ス

北鷲

スリ物ヨミ本アリ、〔新〕抱亭ト號ス

蘭齋

北嵩

〔新〕島氏 岡々樓ト號ス〔増〕本郷ニ住ス、ヨミ本草双紙多シ、後唐畫師トナル〔新〕東屋ト號ス、名重宣

東南西

北雲

大工久五郎トアリ、スリ物錦繪アリ、畫本アリ

## 溪齋英泉

- 英春 俗稱大木氏、小石川ニ住ス、春畫錦畫多シ  
 英笑【新】 初め春川五七門人、京の人も在江戸歿す、草双紙錦畫あり  
 米花 英之 俗稱源次郎、麴町ニ住ス、中本讀本に多く出せり  
 英泉壽 俗稱伊三郎、錦畫中本よみ本多くあり、浪花ニ在住して名を改む  
 泉晁 俗稱吉藏、豊岸島ニ住ス、草双紙錦畫多くあり、  
 泉橋【新】 俗稱仙吉、向島ニ住ス、中本多く畫作を出せり、筆跡を樂とす、  
 泉隣 俗稱井村氏、櫻田ニ住ス、中本さし五あり【新】 號山齋  
 嶺泉里 俗稱彌吉、麴町ニ住ス、中本さし五あり  
 文齋【新】 磯野氏名信齋、肥前長崎ニ住ス、長崎土産一冊アリ畫作

觀岳

北泉

別記ス、ヨミ本、畫本多シ、二代目戴斗【編年史】北廣【編年史】大坂ノ人、別記アリ、後畫狂人【編年史】斗編年史

墨傳

名古屋ノ産畫本ヲ出ス

北洲

大坂ノ産、錦繪ヨミ本アリ



一英一 静寂ト號ス

英壽 俗稱伊三郎號英齋、浪花ニ住ス、錦繪、讀本多シ、

歌川豐春

後年豐春ト名ノリシモノアリ、血脈ノモノカ文政ノ始メナリシ  
其後ナシ、京橋銀座二丁目新道ニ住ス

豐廣

芝片門前ニ住ス  
門人アリ別ニ記ス

七右衛門

畫ハカ、ズ  
本所御、【新】舟【堀】藏前ニ住ス

豐國

中橋横町川岸ニ住ス  
門人多シ別ニシルス

豐久

堺町ニ住ス、芝居狂言本ヲカク  
錦畫アリ、初上グ燦龍ノ畫ニ妙ヲ得タリ

豐丸

錦繪アリ

歌川豐廣

生涯役者畫ヲカカヌ浮世繪師ト云  
彩色摺江戸名所福茶番

實子

豐清

俗稱金  
畫ヲ善ス、錦繪草双紙讀本アリ、早世ス可シ也

女子

他ニ嫁ス

【類】初代豊國

【増】一陽齋豊國 五十三

實子 不レ學シ畫 直次郎 板木師

親實子

豊熊 俗稱熊吉 豊廣爲ニハ實ノ孫ナリ

門人

廣昌 豐州沼津宿太平【新】屋【増】其 錦畫ニ三種アリ

廣重

八代洲川岸住、文政ノ末ヨリ天保ノ今專ラ畫ク 武家安藤徳太郎 錦畫草双紙多シ

廣恒

廣政

【類】二代豊國 豊國實子トナル本郷春木町ニ住ス

一龍齋豊國 後取川豊重ト改ム【新】號後繁幸

初代豊國門弟 俗稱別記ニユヅル【新】三代目

國政

一翁齋

國滿

俗稱熊鷹【新】飯倉【増】土器丁植物丁芝口二丁目 田所町・錦畫繪及紙アリ

國長

俗稱別記ニユヅル

國丸

俗稱別記ニユヅル

【無名】

國次 俗稱幸齋、銀座四丁目ニ住、錦繪草双紙アリ

二代目豊國門弟

國富 錦畫アリ

國兼

錦畫及紙アリ、二三種ニ過ギス

國景

國【無名】誌

國安 俗稱別記ニユヅル  
【新二代目】  
 國安

國貞 俗稱別記ニユヅル(三代數國)

國直 俗稱別記ニユヅル

【新】二代  
 國直 本郷三丁目住

國信 作名志満山人ト云  
 畫作ノ草双紙多シ

國芳 俗稱別記ニユヅル

國周 口繪アリ早世

國虎 俗稱象藏  
 草双紙錦繪アリ多ク出ス

國宗 國長門人  
 錦繪ニ三種アリ

國照 俗稱勘右衛門  
 錦畫ニ三種アリ

國房 錦畫ニ三種ヨミ本モアリ

【新】人  
 國登女 錦畫アリ

【類】三代目豊國

【増】一雄齋國貞

【退】

實子

不レ縁 盡

女子

同實子

【類】五風亭

貞虎

俗稱與之助  
雙紙錦繪多ク出セリ

貞繁

双紙ヲ出セリ【新】早世

貞秀

俗稱兼吉【新】橋本氏名玉蘭五雲亭又玉蘭齋ト號  
双紙錦繪等多ク出セリ

貞幸

錦繪アリ【新】五丁亭ト號ス、横川瓦師男

貞房

草紙出セリ【新】五龜亭ト號ス、又種蝶樓ト號ス

貞景

錦繪草紙ヲ出セリ

【新】國貞 初名國政、壽齋ト號ス師ノ養子トナリ龜戸ノ古菴ニ住梅蝶樓ト號ス

國得

本所松倉町ニ住ス

國壽

國富

國孝

柳島ニ住ス

國朝 四ツ谷ニ住ス【編年史】新宿に住し酒屋を業トす

## 歌川國芳

芳房 一寶齋ト號ス、萬延元年六月十日歿ス

芳兼 一好齋ト號後田縣又梅月

國明

一風齋ト號ス二代目トナリ【編年史】俗稱ハ弁三郎十四番組御徒士平澤某の二男、出て蜂須賀初代未詳

國輝

一雄齋ト號ス草双紙アリ

【編年史】又雄齋とのみ稱せり、龜井戸に住す、蜀紅錦七寶積（此君圖談「栗作」木下關線林）十返舎一九作等の草双紙皆其畫く所、俳人百歌撰（錦享川柳觀）の肖像も亦其筆に係る

國綱

號一蘭齋四ツ谷ニ住ス

國久

【編年史】柳島に住す、豐國の二女お榮を娶とす

國清

本所石原【編年史】俗稱は和田安藏

國周

號一鶯齋荒川八十八

國齊

兩國ニ住ス

國郷

尾張町ニ住ス

國盛

號一寶齋本郷四丁目ニ住ス

國房

馬道ニ住ス【編年史】大竹政直番所、今四谷に住す

貞升

後國升ト改ム、浪花ノ人

貞重

號獨郎舍

芳秀 一旭齋ト號ス

芳年 俗稱月岡米次郎一碧齋ト號ス

芳滿 一散齋ト號ス

芳廣 一張齋ト號ス

芳鳥 一燕齋ト號ス

芳宗 一松齋ト號ス

芳虎 一孟齋ト號ス、俗稱辰次郎、長谷川町ニ住ス

芳丸 一圓齋ト號ス

芳艶 一英齋ト號ス、堀江町淺草橋場、后本町二丁目

芳藤 一藤齋ト號ス、居春木町

芳綱 一登齋ト號ス、居下橋町

芳員 一露齋ト號ス、香羽ニ居

芳英 一春齋ト號ス

芳雪 一嶺齋ト號ス

- 芳爲 一集齋卜號ス  
 芳梅 一駕齋卜號ス  
 芳豐 一龍齋卜號ス  
 芳基 一停齋卜號ス  
 芳榮 一端齋卜號ス  
 芳貞 一素齋卜號ス  
 芳幾 號一蕙齋又朝霞樓後蕙齋、俗稱落合幾次郎、后諏訪町又米澤町今龜山町  
 芳近 一蓮齋卜號ス  
 芳鷹 一峰齋卜號ス  
 芳盛 一光齋卜號ス、厩下谷廣小路、后池ノ端茅町櫻坊卜云  
 芳直 一成齋卜號ス  
 芳富 一藝齋卜號ス  
 芳晴 一物齋卜號ス、淺草茅町後淺草並木、芳春卜改  
 芳勝 一騎齋卜號ス、始幕府ノ醬油用達ニテ初石渡庄助卜云、殿ノ下清元千平太夫

芳照

一得齋

芳政

一天齋

芳里

一葵齋

芳鶴

一聚齋

芳延

一桂齋



出 文 照 承 認

了 830311 號

昭和十六年九月二十五日  
昭和十七年十一月二十五日  
第一刷發行  
第三刷發行

(五千部)

浮世雜類考 ★★

定價四十錢



(永井製本)

編 者

仲 田 勝 之 助

發 行 者

岩 波 茂 雄

印 刷 者

白 井 赫 太郎

精 興 社 印 刷

(東京一四)

發 行 所

東京市神田區  
一ツ橋二丁目三番地

岩 波 書 店

電話九段〇一八七番(代表)  
櫻口座東京二六二四〇番  
會員番號一〇二〇三七

配 給 元

東京市神田區  
淡路町二丁目九番地

日 本 出 版 配 給 株 式 會 社

店小出版物に就ては永く責任を任るにまじらず  
かち下で申御へ店小接直は台場の等丁亂・丁落ら

## 口書子に寄す

岩波茂雄

——岩波文庫發刊に際して——

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。譬ては民を愚昧ならしめるために組織が最も欲き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに應取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれぬ。それは生命ある不朽の書を少數者の書籍と研究室とより解放して街頭に限なく立大しめ民衆に伍せしめるであらう。近時大盛生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に欲慮の態度を缺かざりしか。更に分買を許さず讀者を驚愕して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推挙するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の實務の態度大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より忘れて來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價值ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書を各個に自由に選擇することが出来る。携帯に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのちるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

